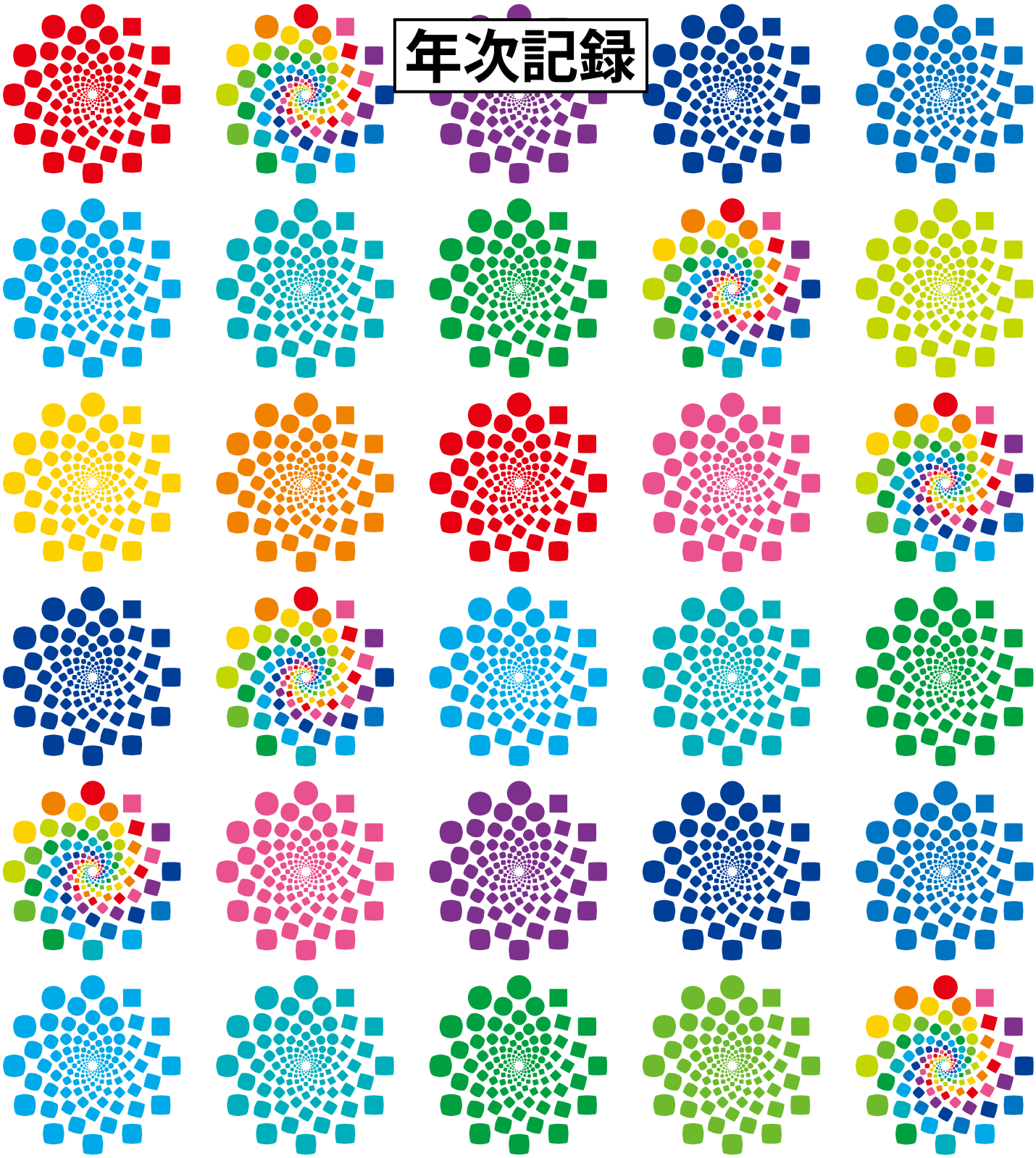
北海道大学サステナビリティ・ウィーク 2014

持続可能な開発のための教育

年次記録



北海道大学

フェスタ 国立大学2014

本書について

本書は、2007 年に北海道大学が開始した持続可能な社会の実現に向けた研究・教育の促進強化イベント「サステナビリティ・ウィーク」2014 年開催の年次記録です。主に、ウェブサイトをそのまま PDF 化して集約しています。

サステナビリティ・ウィーク企画者の熱い想いを可能な限り記録に残すことに努めました。よって、イベント開催当時の 2014 年時点の情報のため、掲載しているウェブサイト URL がリンク切れしていたり、一部の報告文書に抜けがあったり、また無効な連絡先を掲載している場合があります。

なお、開催行事のうち、「GiFT2014～Global issues Forum for Tomorrow～」の詳細は本学ウェブサイト上で公開しております。「GiFT」をキーワードに、本学ウェブサイト内の検索エンジンをご利用ください。

また、本書はサステナビリティ・ウィーク 2014 年開催に関する日本語の報告書ですが、同内容を英語でも公開しています。また、他年度の報告書も両言語で公開していますので、是非ご覧ください。

最後に、当時の開催イベントに関するお問い合わせについては、詳細をお答えするのが難しいこと、予めご了承ください。持続可能な社会の実現に向けて、本書をお役立て頂ければ幸いです。

2017 年 3 月

北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局

目　次

1.　サステナビリティ・ウィーク 2014 の概要

1.1　本年の特徴 2

1.2　総長あいさつ 3

1.3　プログラム・パンフレット 4

1.4　実行委員長 総括 12

2.　開催行事のウェブサイト（開催日順）

2.1　日中記者交換協定 50 年　日本報道、中国報道の半世紀 15
2.2　CRC 国際シンポジウム　生体分子をモチーフとした機能性分子の創製と応用 18
2.3　STAND UP TAKE ACTION in Hokudai 20
2.4　専門家国際ネットワークを用いたサニテーション教育 23
2.5　CLARK THEATER 2014 25
2.6　食事はどうして楽しいの？ 28
2.7　学術成果のオープンアクセスと HUSCAP 30
2.8　第 5 回 ESD 国際シンポジウム　次世代の ESD 戦略 32
2.9　障害をもつ大学生の就労をめざして 38
2.10　北大×JICA 連携企画　青年海外協力隊トークイベント ～持続可能な社会をつくる日本のボランティア～ 42
2.11　時計台サロン　農学部に聞いてみよう ～北海道の絶滅危惧種を保護する試み～ 44
2.12　北海道／防災・減災リレーシンポジウム―冬の防災・危機管理を考える― 46
2.13　市民公開シンポジウム 都市でも農的生活 ―植物の面白さと豊かな生活― 48
2.14　留学希望者向けセミナー　SD on Campus 51
2.15　第 9 回応用倫理国際会議「安全、サステイナビリティ、人性の涵養 ～気候変動に対する道徳義務～」 53
2.16　サステナビリティウィーク北大・地球研合同ワークショップ 「地域や人びとに寄り添う研究の在り方とは？」 55
2.17　特別講演会「サステイナビリティの倫理」 57
2.18　保健科学研究院公開講座　ようこそ！　ヘルスサイエンスの世界へ 59
2.19　RECCA 北海道　北海道における気候変動とその適応ワークショップ 61

2.20　雑紙削減プロジェクト　PAPER SPACE
～身近なところから見つめなおそう～.....64
2.21　協定校企画　フィンランド―日本　ジョイントシンポジウム 66
2.22　経済学研究科　REBN シンポジウム
―北海道における新時代の「ものづくり」: IT×農業の試み―.....69
2.23　GiFT2014　～Global issues Forum for Tomorrow～.....72
2.24　北大×JICA 連携企画　国際協力人材セミナー in 札幌 78
2.25　安全でサステナブルな社会の土台をつくるには？
―社会基盤学からの多様な視点―.....82
2.26　第 5 回学生企画　サステナブル・キャンパス・コンテスト
―サステナブルな明日への架け橋― 85
2.27　国際シンポジウム 環境と健康と科学コミュニケーション 88
2.28　北大アフリカ研究会シンポ　アフリカで活躍する北大の研究者たちⅡ
～アフリカに展開する北大研究ネットワーク～ 92
2.29　大学改革シンポジウム　サステイナブルキャンパス国際シンポジウム 2014
サステイナブルキャンパス構築のための思想と実践
－大学にとって「地域」とはー.....94
2.30　新しい農業生産のやり方　―エコロジー農業の日仏交流―.....97
2.31　日露共同で行なう教育プログラム開発プログラム
～極東・北極圏における持続的発展を未来へつなぐ～ 101
2.32　先住民文化遺産とツーリズム―文化的景観と先住民遺産をめぐる諸問題―...104

3.　実施報告

3.1　第 5 回 ESD 国際シンポジウム―次世代の ESD 戦略― 報告書.....108
（※以下の【　】は、報告書内のページ数です。）

3.1.1　はじめに.....【3】
3.1.2　タイムスケジュール .....【5】
3.1.3　全体会の報告 .....【7】

- 開催挨拶.....【9】
- 趣旨説明.....【11】
- 基調講演：ESD10 年の総括.....【13】
- 主題講演 1：ESD の将来展望 .....【23】
- 主題講演 2：ESD の再構築.....【29】

3.1.4　分科会の報告

(1) 分科会 1 の報告：ESD Campus Asia の成果と展望 ..... 【35】
(2) 分科会 2 の報告：北海道 UNESCO スクール・コロキウム..... 【51】
(3) 分科会 3 の報告：ESD 学生フォーラム ..... 【65】
(4) 分科会 4 の報告：大学と地域社会が協力する ESD..... 【81】

3.1.5　総括セッションの報告..... 【91】

1. サステナビリティ・ウィーク 2014 の概要

本年の特徴

・開催テーマ　：　持続可能な開発のための教育

・メイン期間　：　2014 年 10 月 25 日（土）～2014 年 11 月 9 日（日）

・企画数　　：　32 企画

・企画実施期間：　2014 年 9 月 28 日（日）～2014 年 12 月 21 日（日）

・参加者数　　：　32,045 人

・特筆事項　　：

- 2005 年に北海道大学「持続可能な開発」国際戦略を策定し、「持続可能な開発」をテーマに掲げて各種の取り組みを行ってきた北海道大学は、同年に開始された国連「持続可能な開発のための教育（ESD）の 10 年」キャンペーンが最終年を迎えることから、教育に焦点を当てて様々な角度から議論を行った。

- 附属図書館による展示企画や北大映画館プロジェクト「CLARK THEATER」、市民向けの各種セミナーの開催によって参加者が 3 万人を超えた。これにより、本年を含め過去 8 年間の累計は、開催企画数 250、参加者数 15 万人を突破した。

- 教育学研究院が主催する国際シンポジウムの 5 回目を全学的な企画へと拡大し、「ESD 国際シンポジウム-次世代の ESD 戦略」と題して開催したところ、主に東アジア地域から 165 人が参加した。

- 文部科学省「大学の世界展開力強化事業」に採択された「RJE3 プログラム」（East Russia-Japan Expert Education Program）の始動を記念し、「日露共同で行なう教育プログラム開発プログラム　～極東・北極圏における持続的発展を未来へつなぐ～」と題して国際シンポジウムを開催した。

- サニテーションに従事する人材を育成する教育プログラムを作るため、ザンビア、ブルキナファソ、インドネシアから参加を得てワークショップを開催し、3 つの講義の e-Learning 教材を作成した。

総長あいさつ

138年前の創設以来、北海道大学にはフロンティア精神が息づいています。現在も、防災、貧困撲滅、気候変動など、耐えることのない人類の課題に取り組んでいます。
時代の開拓者である北海道大学は、持続可能な社会の実現に向けて叡智を結集するために、2007年から毎年サステナビリティ・ウィークを開催し、9月から12月にかけ、シンポジウムやワークショップなど議論の場を数多く提供しています。

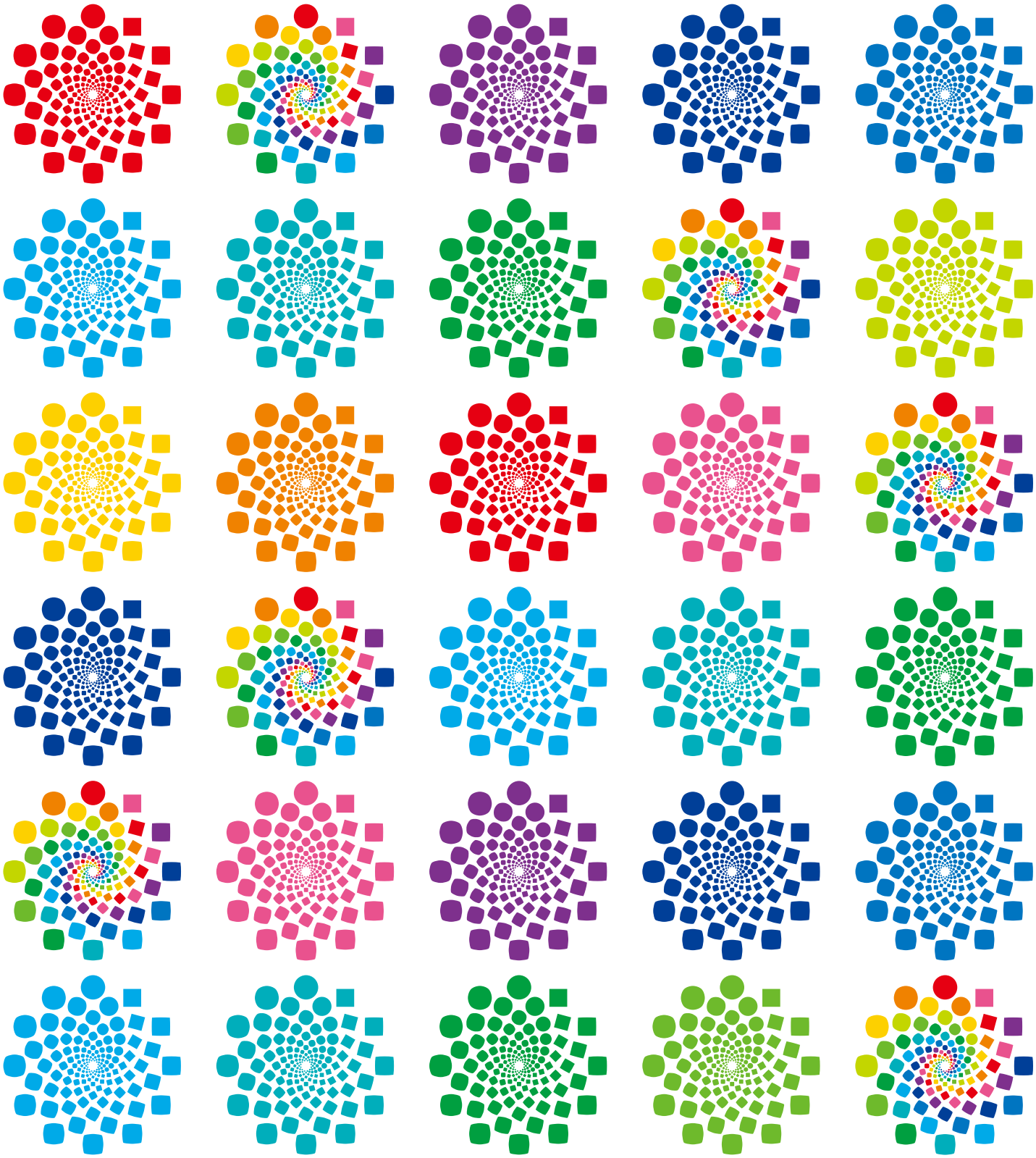
今年は、国連のキャンペーン「持続可能な開発のための教育の10年」が最終年を迎えるのに合わせ、サステナビリティ・ウィーク2014も教育に焦点を当てます。世界から研究者や学生、市民が、研究成果や多様な経験を持ち寄り、これまでの教育そしてこれからの教育の在り方について共に学ぶ最良の機会となるよう願っています。

北海道大学総長 山口 佳三

北海道大学 総長 山口 佳三

北海道大学サステナビリティ・ウィーク2014

持続可能な開発のための教育



北海道大学

フェスタ 国立大学2014

ごあいさつ

138年前の創設以来、北海道大学にはフロンティア精神が息づいています。現在も、防災、貧困撲滅、気候変動など、絶えることのない人類の課題に取り組んでいます。時代の開拓者である北海道大学は、持続可能な社会の実現に向けて叡智を結集するために、2007年から毎年サステナビリティ・ウィークを開催し、9月から12月にかけ、シンポジウムやワークショップなど議論の場を数多く提供しています。

今年は、国連のキャンペーン「持続可能な開発のための教育の10年」が最終年を迎えるのに合わせ、サステナビリティ・ウィーク2014も教育に焦点を当てます。世界から研究者や学生、市民が、研究成果や多様な経験を持ち寄り、これまでの教育そしてこれからの教育の在り方について共に学ぶ最良の機会となるよう願っています。

北海道大学 総長
山口　佳三

1 10月25日(土) 13:00～18:30 Web

サステナビリティ・ウィーク2014 特別企画　第5回ESD国際シンポジウム

次世代のESD戦略

気候変動、急激な自然環境の劣化、多発する自然災害、感染症の拡大、消費型経済システム加速など、人類の抱える課題が複雑化・多様化する中、世界は教育に希望を託し、国連は「持続可能な開発のための教育の10年(DESD)」キャンペーンを展開してきました。

教育は、次世代の経済、産業、社会の在り方を決めるものです。これまで、大学が知識を無秩序に細分化してきた結果が現代社会であるならば、未来を作るために必要なことは、他分野との知の統合化と、俯瞰したものの見方を備えた人物を育成することです。それは、課題を抱えた現場とのかかわりの中でこそ可能な教育です。

果たして大学は、自らが位置する地域の中で、DESDキャンペーンに呼応した確かな教育を実践できたのか。10年を振り返り、主たる問題を検証すると共に、これからの大学教育の在り方について議論します。

言　　語：日本語・英語(同時通訳)
参加申込：必要(申込サイトにて受付。
　　詳細は中面ページをご覧下さい)
会　　場：学術交流会館

〈問い合わせ先〉
教育学研究院
TEL: 011-706-3965
E-mail: shomu@edu.hokudai.ac.jp
北海道大学
サステナビリティ・ウィーク事務局(国際本部内)
TEL: 011-706-8031
E-mail: sw1@oia.hokudai.ac.jp

基調講演
ESD10年の総括
マリオ タブカノン
Mario T. Tabucanon
国際連合大学高等研究所
客員教授

主題講演1
ESDの将来展望
韓 龍震
Yong Jing Hahn
高麗大学校師範大学長

主題講演2
ESDの再構築
河口　明人
Akito Kawaguchi
北海道大学教育学研究院
教授

プログラム

13:00～ 会場:大講堂	開催挨拶 …… 上田 一郎(北海道大学 副学長理事／SW2014実行委員長) 開催趣旨説明 …… 小内 透(北海道大学 教育学研究院長) 基調講演 「ESD10年の総括」…… マリオ タブカノン(国際連合大学高等研究所 客員教授) 主題講演1「ESDの将来展望」…… 韓 龍震(高麗大学校師範大学長) 主題講演2「ESDの再構築」…… 河口 明人(北海道大学教育学研究院 教授)			
16:00～	分科会1 **ESD Campus Asiaの成果と展望**	分科会2 **北海道UNESCOスクール・コロキウム**	分科会3 **ESD学生フォーラム**	分科会4 **大学と地域社会が協力するESD**
18:00-18:30 会場:大講堂	総　合　討　論			

北海道大学
サステナビリティ・ウィーク
2014

持続可能な開発のための教育

未来を切り開く教育や学び、コミュニケーションのあり方について共に考えます。

2　10月8日(水)　14:00~16:00　会場ID: I

専門家国際ネットワークを用いたサニテーション教育

ⓐアフリカのサハラ砂漠以南では人口の69%、南アジアでは64%の人々が衛生的なトイレを持っておらず、これらの地域ではサニテーションに関わる人材が強く求められています。本セミナーはサニテーション人材育成コースの導入となる、現状の把握に関する講義を行い、参加者のフィードバックを受けて、今後の教材づくりに役立てます。

アジア・アフリカ地域の課題解決に貢献することを目指したJSPS「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」の一環として開催されます。

ⓑフロンティア応用科学研究棟 セミナールーム ⓒ英語(通訳なし) ⓓ不要(直接会場へお越しください) ⓔ北海道大学次世代都市代謝教育研究センター ⓕ国際水環境学院(2iE),ザンビア大学水資源管理センター

ⓖお問い合わせ　工学研究院サニテーション工学研究室　船水尚行
TEL&Fax: 011-706-6270　mail: funamizu@eng.hokudai.ac.jp

3　10月8日(水)　18:30~19:30　会場ID: C

STAND UP TAKE ACTION in Hokudai

ⓐ国連のミレニアム開発目標達成のために「立ち上がる」世界的なキャンペーンの北大版です。今年は、農学部前にて地場生産物の即売を生産者が直接行なう好評のイベント「北大マルシェ」を取り上げ、イベント関係者を招き、北海道の「食」や「農」、「サステイナブルな未来」について参加者の皆様と一緒に考えます。

ⓑ附属図書館本館メディアコート ⓒ日本語 ⓓ不要(直接会場へお越し下さい) ⓔ北海道大学附属図書館 / 国連寄託図書館 ⓕ北大マルシェ

ⓖお問い合わせ　附属図書館 / 国連寄託図書館 城恭子
TEL: 011-706-2973　Fax: 011-746-4595　mail: ref@lib.hokudai.ac.jp

4　10月20日(月)~11月3日(月・祝)　会場ID: C

学術成果のオープンアクセスとHUSCAP

ⓐHUSCAP(ハスカップ=北海道大学学術成果コレクション)では、本学のさまざまな学術成果を電子ファイルで保存し、広く世界で共有するためにウェブ上で無料公開しています。今回の展示では、誰もが学術成果を利用できるようにしようという「オープンアクセス運動」のご案内とともに、現在HUSCAPで公開されている研究をご紹介します。

HUSCAP
URL: http://eprints.lib.hokudai.ac.jp

ⓑ附属図書館正面玄関ホール ⓒ日本語 ⓓ不要(直接会場へお越し下さい) ⓔ北海道大学附属図書館

ⓖお問い合わせ　附属図書館学術システム課
TEL: 011-706-4741　mail: huscap@lib.hokudai.ac.jp

5　10月26日(日)　10:30~12:00　会場ID: A

障害をもつ大学生の就労を目指して

ⓐ2014年2月に障害者権利条約への批准が叶いました。本企画は、大学で学び、社会で働いてきた障害のある人に、これまでの体験をお話しいただきます。就労支援に携わる事業所や障害者雇用を実施している企業にも参加いただき意見交換を行います。すべての人にとって、希望をもって学び働くことができるような社会をつくるために、教育や大学がどうあるべきか、ともに考えましょう。(午後からの分科会に参加を希望される方および情報保障が必要な方は、下記問合せ先まで申込をお願いいたします。)

ⓑ学術交流会館 小講堂 ⓒ日本語(手話通訳・要約筆記あり) ⓓ不要 ⓔ北海道大学特別修学支援室 ⓕ北海道障がい学生支援ネットワーク(仮称), 札幌学院大学(後援)

ⓖお問い合わせ　特別修学支援室
TEL: 011-706-7473　mail: udl@jimu.hokudai.ac.jp

6　10月28日(火)　18:15~19:30　会場ID: H

北大×JICA連携企画 青年海外協力隊トークイベント
~持続可能な社会をつくる日本のボランティア~

ⓐ青年海外協力隊として開発途上国の教育現場に携わってきたJICAボランティアが、自分の目で見て、耳で聞いた2年間についてお話します。また、その経験を今後どのように日本の教育・社会に還元できるのか、開発教育の視点からみなさんと考えます。協力隊に興味のある方、教員を目指している方、ぜひご参加下さい！

ⓑ国際本部 大会議室 ⓒ日本語 ⓓ不要(直接会場へお越し下さい) ⓔ独立行政法人 国際協力機構 北海道国際センター(札幌) ⓕ北海道大学国際本部

ⓖお問い合わせ　JICA北海道(札幌)市民参加協力課 石崎 貴大
TEL: 011-866-8421 Fax: 011-866-8382　mail: ishizaki-takahiro@jica.go.jp

7　10月30日(木) 13:30~16:30　会場ID: A

北海道／防災・減災リレーシンポジウム
—冬の防災・危機管理を考える—

ⓐ冬の北海道では、暴風雪による交通障害・大規模停電の他、地震や火山災害の被害拡大も懸念されます。住民の暮らしや経済活動の安全を確保するため、大学・行政・マスメディアが連携し、地域の特性に合った防災・減災対策と市民教育を進めることが欠かせません。本企画は、北見・室蘭とのリレー方式のシンポジウムにより、総合的な討論を行います。また、10月28日～10月30日は学術交流会館1Fホールにて、災害対応に関するポスター展（入場無料）も開催します。ぜひお立ち寄りください。

ⓑ学術交流会館 大講堂 ⓒ日本語 ⓓ必要（申込サイトにて受付）
ⓔ北海道大学公共政策大学院

ⓖお問い合わせ
公共政策大学院 田中みどり
TEL&Fax: 011-706-4723 mail: midorit@hops.hokudai.ac.jp

8　11月1日(土)~11月2日(日)　会場ID: D

第9回応用倫理国際会議
「安全、サステイナビリティ、人性の涵養」

9　11月2日(日) 16:30~18:30　会場ID: D

特別講演会「サステイナビリティの倫理」

ⓐいま、サステイナビリティの考えが大事であることは自明のこととして受け止められています。しかし、どうして大事なのか、その理由を考えることもまた重要です。11月2日の特別講演会では、環境倫理ならびにサステイナビリティ倫理の第一人者であるニューヨーク大学デール・ジェイミソン教授をお招きして、市民・学生と一緒に思索します。先んじてより学術的な内容として11月1日から行われる国際会議では「気候変動に対する道徳義務」と題した同教授による基調講演とともに、世界的に活躍する研究者が最新の研究成果を報告します。

プログラム	
第9回応用倫理国際会議	
11/1(土)	基調講演：16:30～
11/2(日)	10:00～12:30(9:30開場)
特別講演会「サステイナビリティの倫理」	
11/2(日)	16:30～18:30(16:00開場)
※全日程を通し英語での講演となります。	

ⓑ人文・社会科学研究教育棟（W棟） ⓒ英語（通訳なし） ⓓ不要（直接会場へお越し下さい） ⓔ北海道大学文学研究科応用倫理研究教育センター

ⓖお問い合わせ
文学研究科応用倫理研究教育センター　西川深雪
TEL: 011-706-4088

10　11月5日(水)~11月7日(金)　海外開催

協定校企画　フィンランド - 日本　ジョイントシンポジウム

ⓐオープニングセッションでは、ラップランド大学（フィンランド）、オウル大学（同）、北海道大学、札幌市立大学の代表者が、相互交流の充実と更なる発展を目指して、発表・討論を行います。分科会では「サービス・デザイン」「高齢化社会」「コミュニティー・プランニング」等を切り口に、最新の研究成果を共有し、今後の共同研究・共同教育の可能性について議論します。

ⓑ海外開催（フィンランド ラップランド大学） ⓒ英語（通訳なし） ⓓ参加希望者はお問合せ下さい ⓔラップランド大学,オウル大学,北海道大学,札幌市立大学
ⓖ北海道大学国際本部国際支援課TEL: 011-706-8029 Fax: 011-706-8037

11　11月8日(土) 20:00~22:00　オンラインのみ

GiFT -Global issues Forum for Tomorrow-

ⓐ持続可能な社会の実現に挑んでいる研究者5人のプレゼンテーションをインターネットで見て、英語と日本語で議論するインターネット・フォーラムです。世界中の高校生と大学生に向けた、「一緒に世界の重要課題に挑もう!」との熱い呼びかけに、FacebookかTwitterで応答してください。

ⓑFacebook, Ustream等を通じて参加
ⓒ日本語・英語（通訳なし） ⓔ北海道大学

GiFTの情報を網羅したポータルサイトはこちら!
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/

ⓖお問い合わせ
サステナビリティ・ウィーク事務局
TEL: 011-706-8031　mail: sw1@oia.hokudai.ac.jp

12　学生企画　11月9日(日) 13:00~18:00　会場ID: A

第5回 サステナブル・キャンパス・コンテスト
—サステナブルな明日への架け橋—

ⓐ北大を世界一サステナブルにするためのプロジェクト・コンテストです。今年は「自然」なキャンパスをテーマに、教育をし、教育を受ける場である大学が本来あるべき"自然な"姿や、大学生活を改善できるアイデアを、北大生、他大生、市民から広く募集します。最優秀賞の提案は、学生環境団体SCSDの協力のもと実現へと動き出します。

参加プロジェクト募集中!
詳しくはSCSD公式サイトまで
URL: http://scsdhome.web.fc2.com/

ⓑ学術交流会館 第一会議室 ⓒ日本語 ⓓ不要（直接会場へお越し下さい）
ⓔSCSD（The Student Council for Sustainable Development in Hokkaido University）
ⓕ北海道大学サステイナブルキャンパス推進本部

ⓖお問い合わせ
SCSD 小山田伸明
TEL: 090-1201-7773 mail: scsdmail@gmail.com

13　Web　11月17日(月) 13:30~17:00　会場ID: A

国際シンポジウム
環境と健康と科学コミュニケーション

ⓐ科学の発展は環境や倫理上での新たな問題を生む可能性を常に持っています。この危険性を社会全体で認識し、対応していくには、科学技術について誰もが理解を深められる手段の確立が不可欠です。本企画では、環境変化から来る健康への影響を題材に、科学技術コミュニケーションにおける課題について、諸外国での事例も交え、討論します。

予定プログラム
第一部：講演
三上直之（北海道大学）「科学コミュニケーションとは」
Jong Han Leem（仁荷大学校）「韓国の研究におけるコミュニケーション」
伊藤佐智子（北海道大学）「北海道出生コホートにおける参加者コミュニケーション」
Sharon Hanley（北海道大学）「英・豪のHPVワクチンリスクコミュニケーション」
大島寿美子（北星学園大学）「研究者と市民をどうつなげるか」
第二部：パネルディスカッション

ⓑ学術交流会館 小講堂 ⓒ日本語・英語（同時通訳あり） ⓓ必要（申込サイトにて受付）
ⓔ北海道大学環境健康科学研究教育センター
ⓕ保健科学研究院,医学研究科,教育学研究院,高等教育推進機構,札幌市（後援）,札幌市教育委員会（後援）,札幌市保健所（後援）

ⓖお問い合わせ
環境健康科学研究教育センター 荒木
TEL: 011-706-4746 Fax: 011-706-4725 mail: araki@cehs.hokudai.ac.jp

14 Web　11月25日(火) 13:00〜17:45　会場ID: A

サステイナブルキャンパス国際シンポジウム2014

サステイナブルキャンパス構築のための思想と実践―大学にとって「地域」とは―

ⓐ 北大にとっての地域、また地域にとっての北大とは何かを考え、なぜ今、サステイナブルキャンパスの構築が必要なのかを探ります。人材を育む場として、大学は地域の中でどのような役割を果たすべきなのか。諸外国がサステイナブルキャンパスの文脈の中で地域連携をどう位置づけているのか。思想的・実践的話題について講演を行ない、議論します。

基調講演
● 京都大学経済学研究科 教授 植田 和弘
● ルクセンブルグ大学 サステイナブルデベロップメントセンター長 アリアネ・ケニッグ

プログラム	
12:30	受付
13:00〜	開会挨拶
13:30〜	基調講演　(各40分)
14:50〜	質疑応答
15:25〜	パネルディスカッション
17:40	閉会挨拶

ⓑ 学術交流会館 大講堂 ⓒ日本語・英語(同時通訳あり) ⓓ必要(申込サイトにて受付) ⓔ北海道大学サステイナブルキャンパス推進本部

ⓖ お問い合わせ　サステイナブルキャンパス推進本部
TEL: 011-706-3660 Fax: 011-706-4884　mail: osc@osc.hokudai.ac.jp

15 Web　12月19日(金)　会場ID: I

日露共同で行う教育プログラム開発プロジェクト

〜極東・北極圏における持続的発展を未来へつなぐ〜

ⓐ 極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する人材を育成すべく、数十年の共同研究実績を有する北海道大学とロシアの大学が協力して教育プログラムを開発します。環境評価、文化的多様性、土壌と生産、地域資源開発、防災管理に係る文理融合プログラムについて議論します。

ⓑ フロンティア応用科学研究棟 レクチャーホール ⓒ日本語・ロシア語 ⓓ必要(申込サイトにて受付)
ⓔ RJE3 コンソーシアム ⓕ北海道大学,北海道(後援),札幌市(後援) ⓖ北海道大学国際本部 サステナビリティ・ウィーク事務局 TEL: 011-706-8031 mail: rje3@oia.hokudai.ac.jp

16　12月20日(土)・21日(日)　会場ID: A

先住民文化遺産とツーリズム

―文化的景観と先住民遺産をめぐる諸問題―

ⓐ 先住民社会における景観利用のあり方を、世界各地の事例を参照しながら論じます。昨今、自然環境を積極的に利用して築かれた先住民文化遺産の研究が進んでいます。文化的景観をキーワードに、こうした文化遺産の特質、その有効的な管理方法、教育プログラムによる次世代への継承について検討します。

基調講演　12月20日(土)　午後から
● ウプサラ大学 考古学部 教授 ニール・プライス
報告　12月21日(日)　全日
● アバディーン大学 考古学部 上級講師 リック・ネヒト ジェフ・オリバー
● ワシントン大学 バーク博物館・人類学部 准教授 スヴェン・ハーカンソン
● ウプサラ大学 考古学部 講師 カール=ゴスタ・オジャラ

ⓑ学術交流会館 小講堂 ⓒ日本語・英語(逐次通訳あり) ⓓ不要(直接会場へお越し下さい) ⓔ北海道大学アイヌ・先住民研究センター ⓕ北海道大学観光学高等研究センター

ⓖ お問い合わせ　アイヌ・先住民研究センター　岡田真弓
TEL: 011-706-2317 Fax: 011-706-2859 mail: m-okada@let.hokudai.ac.jp

調和を見いだす

自然の恩恵を意識しつつ、
環境を損なわずに暮らす道を模索します。

17　10月29日(水) 18:00〜20:00　会場ID: L

時計台サロン　農学部に聞いてみよう

北海道の絶滅危惧種を保護する試み

ⓐ 市民の皆様に北大農学部の研究を広く知っていただき、一緒に考えることを目的とした市民公開セミナーです。今回の話題は、北海道に固有の動植物の種類が減少し、絶滅危惧種が増えている現状とその保護について取り上げます。札幌農学校と呼ばれたかつての北海道大学の雰囲気を色濃く残した札幌市時計台2階ホールで開催します。

ⓑ札幌市時計台2階ホール ⓒ日本語 ⓓ不要(直接会場へお越し下さい) ⓔ北海道大学農学研究院 ⓕ北海道新聞社,札幌国際プラザ(後援),札幌農学同窓会(後援)
ⓖ農学事務部　庶務担当TEL: 011-706-2420

18　10月31日(金) 13:00〜16:00　会場ID: A

市民公開シンポジウム 都市でも農的生活

―植物の面白さと豊かな生活―

ⓐ 生活に潤いを与える植物栽培や家庭菜園を取り入れた「農的生活」への注目が都市圏でも高まりつつあります。植物同士が生育を制御し合う興味深い現象や、札幌市や海外都市の農的テーマパークの事例紹介、都市農業におけるユニークな多角経営化(6次化)の事例紹介を行うとともに農的生活の可能性について議論します。

ⓑ 学術交流会館 小講堂 ⓒ日本語 ⓓ不要(直接会場へお越し下さい)
ⓔ 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター ⓕ北海道園芸研究談話会
ⓖ 北方生物圏フィールド科学センター 荒木肇 TEL: 011-706-3645

すこやかに人間らしく生きる

ひとり一人が身体的、精神的、社会的に良好な状態(Well-being)で質の高い生活(Quality of Life)を送ることのできるコミュニティをつくります。

19 学生企画　10月16日(木)〜19日(日)　会場ID: B

CLARK THEATER 2014

ⓐ 文化的に優れた映画の鑑賞を介し、大学と学生と市民が巡り会うことのできる映画館を期間限定で開催します。大学という学びの場で感動や楽しみを共有し、私たち全員にとって安心できる未来について、共に考えます。長辺・短辺・特集など、今年のテーマに合わせて多数取り揃えています。(一部有料のプログラムがあります。)

ⓑクラーク会館 ⓒ日本語 ⓓ不要(直接会場へお越し下さい)
ⓔ北大映画館プロジェクト ⓖ北大映画館プロジェクトmail: info@clarktheater.jp

【凡例】

0 Web　日時　会場ID:
行事名
ⓐ 概要 ⓑ 会場 ⓒ 言語
ⓓ 申し込み ⓔ 主催 ⓕ 共催
ⓖ 問い合わせ先

このマークが付いている行事は、WEBサイトから参加の申し込みができます。
特に記載のない限り参加料等はすべて無料です。
会場IDは裏面のMAPと対応しています。
バックの色は各行事のカテゴリーを表しています。

持続可能な開発のための教育	すこやかに人間らしく生きる	調和を見いだす	協力ネットワークを広げる

20　11月4日(火) 9:30~17:00　会場ID: A

RECCA北海道 北海道における気候変動とその適応ワークショップ

ⓐ 文部科学省気候変動適応研究推進プログラム(RECCA)北海道は、積雪量等で水資源面での大きな変化が予想される道内の気候に適応してゆくための研究を5年間実施してきました。本企画では、研究者・実務者・市民の対話と交流を通じ、気候変動への適応を議論します。

ⓑ 学術交流会館 小講堂 ⓒ日本語 ⓓ不要(直接会場へお越し下さい)
ⓔ 北海道大学工学研究院 ⓕ公益財団法人 日本気象学会 北海道支部(後援)
ⓖ 工学研究院 山田朋人TEL&Fax: 011-706-6188

21　11月8日(土) 13:00~15:30　会場ID: A

安全でサステナブルな社会の土台をつくるには?
— 社会基盤学からの多様な視点 —

ⓐ 社会基盤学とは、気温の上昇、自然災害の激化、枯渇の一途をたどる天然資源、水や空気の汚染などの自然環境変化を予測し、安全、安心、健康に人々が暮らせる社会を構築するための学問です。本講座では専門の研究者が本学問を紹介し、現代における意義、重要性を分かりやすく解説します。

ⓑ 学術交流会館 小講堂 ⓒ日本語 ⓓ 不要(直接会場へお越し下さい)
ⓔ 北海道大学工学部環境社会工学科社会基盤学コース・国土政策学コース
ⓖ 工学研究院 猿渡亜由未 TEL: 011-706-6183 mail: saruwata@eng.hokudai.ac.jp

22　Web　日時・会場未定

新しい農業生産のやり方　—エコロジー農業の日仏交流—

ⓐ 気候変動を始めとする地球環境の変化は、農業のあり方に決定的な変化をもたらしています。2015年にパリで第21回国連気候変動枠組条約締結国会議が開催されるのに先立ち、地域の特性を活かし、環境に十分な配慮をした農業生産システムとはどのようなものか、どのように実現していけるかを考えます。

ⓑ 未定 ⓒ日本語・フランス語(同時通訳あり) ⓓ申込者を優先(申込サイトにて受付)
ⓔ 札幌日仏協会/札幌アリアンス・フランセーズ,在日フランス大使館,アンスティチュ・フランセ日本
ⓕ 北海道大学農学研究院 ⓖ札幌アリアンス・フランセーズ 平岡智成 TEL: 011-261-2771
mail: bureau@afsapporo.jp

23　Web　10月19日(日) 9:30~12:30　会場ID: F

食事はどうして楽しいの?

ⓐ 歯から得られる堅さや弾力などの食感や、咀嚼する神経と筋肉の相互作用、さらには食事中の談笑や審美性など、「食事を楽しくする要素」は、実にさまざまです。世界的な実績のある研究者を招き、食事がどうして楽しいのかを討論し、私たちの食事をより楽しくする秘訣などの紹介も行います。

ⓑ 歯学部講堂 ⓒ日本語・英語(同時通訳あり) ⓓ必要(申込サイトにて受付)
ⓔ 北海道大学歯学研究科 ⓖ 歯学研究科 有馬太郎TEL: 011-706-4275
Fax: 011-706-4276 mail: tar@den.hokudai.ac.jp

24　11月3日(月) 13:00~16:00　会場ID: E

ようこそ! ヘルスサイエンスの世界へ

ⓐ 3名の研究者が保健科学の研究を分かりやすく解説します。講演は環境変化の健康への影響(特に世代をこえた影響について)、ストレス社会をしなやかに生きるための「光」についての知識、そしてパーキンソン病のリハビリテーションと、私たちにとって身近な3つのトピックを取り上げます。

ⓑ 保健科学研究院 E棟1階 多目的室 ⓒ日本語
ⓓ 必要(下記問合せ先にて受付、10/24(金)まで) ⓔ北海道大学保健科学研究院
ⓖ 医学系事務部 保健科学研究院事務課TEL: 011-706-3315 Fax: 011-706-4916
mail: shomu@hs.hokudai.ac.jp

サステナビリティ・ウィーク WEBサイト
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/jp

参加申込みはこちら ▶

行事一覧はこちら ▶

協力ネットワークを広げる

新たな視点を得て解決を導くため、
国境や学問分野を越えた協力をさらに進めます。

25　Web　9月28日(日) 10:00~17:00　会場ID: J

日中記者交換協定50年　日本報道、中国報道の半世紀

ⓐ 50年前、日本と中国の記者が特派員として双方の国に派遣されました。東京五輪の開催に沸く年でした。日中の記者の眼に、それぞれの国はどのように映り、いかに報じたのでしょうか。両国関係を報道という側面から振り返り、これからの日中関係を考えます。

ⓑ 情報教育館3F ⓒ日本語 ⓓ申込者を優先(申込サイトにて受付) ⓔ北海道大学メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター　法学研究科附属高等法政教育研究センター ⓕ同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科 ⓖメディア・コミュニケーション研究院
渡邉浩平 TEL: 011-706-5283 mail: koheiw@imc.hokudai.ac.jp

26　9月30日(火) 12:50~18:50　会場ID: K

CRC国際シンポジウム　生体分子をモチーフとした機能性分子の創製と応用

ⓐ 生体分子に関連する化学研究は、近年さらに重要な意義を持つようになってきました。今回、生体分子をキーワードとして各分野の6人のエキスパートを世界から招き、シンポジウムを開催します。分野間での意見交換を行い、生体分子をめぐる研究開発の未来を議論します。

ⓑ 創成科学研究棟4Fセミナールーム ⓒ 英語(通訳なし) ⓓ 申込者を優先(下記問合せ先にて受付) ⓔ北海道大学触媒化学研究センター ⓕ日本化学会北海道支部,高分子学会北海道支部,有機合成化学協会北海道支部,北海道大学フロンティア化学教育研究センター
ⓖ 小山靖人 TEL: 011-706-9157 mail:yasuhito.koyama@cat.hokudai.ac.jp

27　11月6日(木) 13:30~17:00　会場ID: A

経済学研究科 REBN シンポジウム　—北海道における新しい「ものづくり」の可能性を考える—

ⓐ 北海道だからこそ可能なものづくりとはどのようなものでしょうか。地域や産業の特性をふまえ、農業(1次産業全般)×IT(ビッグデータの活用も含む)×メイカームーブメント(センサーやデバイスを3Dプリンターで)というコラボレーションによって、北海道の製造業のあり方を革命的に変えてゆく可能性と、今後の活路を探ります。

ⓑ 学術交流会館 大講堂 ⓒ日本語 ⓓ不要(直接会場へお越し下さい) ⓔ北海道大学経済学研究科地域経済経営ネットワーク研究センター ⓕ日本生産管理学会北海道東北支部,札幌コワーキング・サポーターズ(後援) ⓖ経済学研究科 塚田 久美子 TEL&Fax: 011-706-4066 mail: sacade@econ.hokudai.ac.jp

28　11月8日(土) 9:30~16:30　会場ID: M

JICA PARTNER 国際協力人材セミナー in 北海道
~国際協力の場で働きたい方、専門性を活かしたい方へ~

ⓐ JICAが運営する国際協力キャリア総合情報サイトPARTNERにて情報を提供しているさまざまな国際協力実施機関が会場に集結します。大学生・大学院生や社会人等を対象に現場の生の声や実態、仕事のやりがい、業界動向の解説等を行ない、1日で国際協力業界の様々な仕事・キャリアについて知ることができます。

ⓑ 北海道立道民活動センター(かでる2.7) ⓒ日本語 ⓓ必要 (参加申込URL: http://bit.ly/1ppppj5) 受付期間:10/7~11/7 ⓔ国際協力機構(JICA) ⓕ北海道大学国際本部 ⓖPARTNER事務局
TEL: 03-5226-6785 Fax: 03-5226-6316 mail: jicahrp@jica.go.jp

29　11月18日(火) 15:30~17:30　会場ID: G

北大アフリカ研究会シンポ　アフリカで活躍する北大の研究者たちII
~アフリカに展開する北大研究ネットワーク~

ⓐ 目覚ましい発展の中にありながら、いまだ貧困、政治、環境をはじめ様々な問題を抱えているアフリカ諸国。この地における持続的な発展を議論するべく、さまざまな専門からアフリカの課題に取り組む北大研究者によるネットワーク、北大アフリカ研究会(HURNAC)のメンバーが多様な取組みを紹介します。

ⓑ 工学部A101会議室 ⓒ日本語 ⓓ不要(直接会場へお越し下さい)
ⓔ 北海道大学アフリカ研究会 ⓖ工学研究院 牛島健 TEL&Fax: 011-706-6273
mail: uken@eng.hokudai.ac.jp

イベントスケジュール

● 主な対象

日程		行事名	共催・後援	専門家	市民	大学生院生	高校生	その他	19	4
9月28日(日)	25	日中記者交換協定50年：日本報道、中国報道の半世紀 主催：メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター	同志社大学大学院 グローバススタディーズ研究科	●	●	●				
9月30日(火)	26	CRC国際シンポジウム： 生体分子をモチーフとした機能性分子の創製と応用 主催：触媒化学研究センター	日本化学会北海道支部 / 高分子学会北海道支部 / 有機合成化学協会北海道支部 / 北海道大学フロンティア化学教育研究センター	●		●				
10月8日(水)	2	専門家国際ネットワークを用いたサニテーション教育 主催：次世代都市代謝教育研究センター	国際水環境学院(2iE) / ザンビア大学水資源管理センター	●		●				
10月8日(水)	3	STAND UP TAKE ACTION in Hokudai 主催：附属図書館 / 国連寄託図書館	北大マルシェ		●	●	●			
10月16日(木)～10月19日(日)	19	CLARK THEATER 2014 主催：北大映画館プロジェクト		●	●	●	●		10/16	
10月19日(日)	23	食事はどうして楽しいの？ 主催：歯学研究科		●	●	●	●			
10月20日(月)～11月3日(月・祝)	4	学術成果のオープンアクセスとHUSCAP 主催：附属図書館		●	●	●	●		10/19 まで	10/20
10月25日(土)	1	SW2014特別企画 第5回 ESD国際シンポジウム ―次世代のESD戦略―　主催：北海道大学		●	●	●	●			
10月26日(日)	5	障害をもつ大学生の就労を目指して 主催：特別修学支援室	北海道障がい学生支援ネットワーク(仮称) / 札幌学院大学(後援)	●	●	●	●			
10月28日(火)	6	北大×JICA連携企画：青年海外協力隊トークイベント 主催：独立行政法人　国際協力機構　北海道国際センター(札幌)	国際本部		●	●	●			
10月29日(水)	17	時計台サロン 農学部に聞いてみよう： 北海道の絶滅危惧種を保護する試み　主催：農学研究院	北海道新聞社 / 札幌国際プラザ(後援) / 札幌農学同窓会(後援)		●	●		●		
10月30日(木)	7	北海道／防災・減災リレーシンポジウム：冬の防災・危機管理を考える 主催：公共政策大学院		●	●	●	●			
10月31日(金)	18	市民公開シンポジウム：都市でも農的生活―植物の面白さと豊かな生活― 主催：北方生物圏フィールド科学センター	北海道園芸研究談話会	●	●	●				
11月1日(土)～11月2日(日)	8	第9回応用倫理国際会議：安全、サステイナビリティ、人性の涵養 主催：文学研究科応用倫理研究教育センター		●		●				
11月2日(日)	9	特別講演会：サステイナビリティの倫理 主催：文学研究科応用倫理研究教育センター		●		●				
11月3日(月・祝)	24	ようこそ！　ヘルスサイエンスの世界へ 主催：保健科学研究院			●	●	●			11/3 まで
11月4日(火)	20	RECCA北海道 北海道における気候変動とその適応ワークショップ 主催：工学研究院	公益財団法人　日本気象学会 北海道支部(後援)	●	●	●	●			
11月5日(水)～11月7日(金)	10	協定校企画　フィンランド―日本　ジョイントシンポジウム 主催：ラップランド大学,オウル大学,北海道大学,札幌市立大学		●	●	●	●			
11月6日(木)	27	REBNシンポジウム：北海道における新しい「ものづくり」の可能性を考える　主催：経済学研究科　地域経済経営ネットワーク研究センター	日本生産管理学会・北海道東北支部 / 札幌コワーキング・サポーターズ(後援)	●	●	●		●		
11月8日(土)	11	GiFT - Global issues Forum for Tomorrow - 主催：北海道大学		●	●	●				
11月8日(土)	28	JICA PARTNER 国際協力人材セミナー in 北海道 主催：国際協力機構(JICA)	国際本部	●	●	●				
11月8日(土)	21	安全でｻｽﾃﾅﾌﾞﾙな社会の土台をつくるには?：社会基盤学からの多様な視点 主催：工学部　環境社会工学科　社会基盤学コース・国土政策学コース			●	●	●			
11月9日(日)	12	第5回学生企画　サステナブル・キャンパス・コンテスト 主催：SCSD(The Student Council for Sustainable Development in Hokkaido University)	サステイナブルキャンパス 推進本部		●	●				
11月17日(月)	13	国際シンポジウム 環境と健康と科学コミュニケーション 主催：環境健康科学研究教育センター	保健科学研究院 / 医学研究科 / 教育学研究院 / 高等教育推進機構 / 札幌市(後援) / 札幌市教育委員会(後援) / 札幌市保健所(後援)	●	●	●				
11月18日(火)	29	北大アフリカ研究会シンポ：アフリカで活躍する北大の研究者たちII 主催：北海道大学アフリカ研究会			●	●	●			
11月25日(火)	14	サステイナブルキャンパス国際シンポジウム2014 主催：サステイナブルキャンパス推進本部		●	●	●				
12月19日(金)	15	日露共同で行う教育プログラム開発プロジェクト 主催：RJE3コンソーシアム国際運営委員会セントラル・オフィス	北海道大学 / 北海道(後援) / 札幌市(後援)	●	●	●	●			
12月20日(土)～12月21日(日)	16	先住民文化遺産とツーリズム：文化的景観と先住民遺産をめぐる諸問題 主催：アイヌ・先住民研究センター	観光学高等研究センター	●	●	●				
未定	22	新しい農業生産のやり方：エコロジー農業の日仏交流 主催：札幌日仏協会/札幌アリアンス・フランセーズ,在日フランス大使館,アンスティチュ・フランセ日本	農学研究院	●	●	●				

会場案内図

札幌キャンパスマップ

A 学術交流会館

1 10/25[土] 5 10/26[日]
7 10/30[木] 18 10/31[金]
20 11/4[火] 27 11/6[木]
21 11/8[土] 12 11/9[日]
13 11/17[月] 14 11/25[火]
16 12/20[土]~12/21[日]

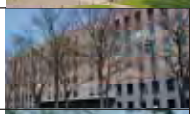
B クラーク会館

19 10/16[木]~10/19[日]

C 図書館本館

3 10/8[水] 4 10/20[月]~11/3[月]

D 人文・社会科学総合教育研究棟



8 11/1[土]~11/2[日] 9 11/2[日]

E 保健科学研究院

24 11/3[月]

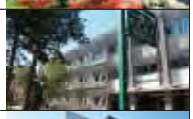
F 歯学部

23 10/19[日]

G 工学部

29 11/18[火]

H 国際本部

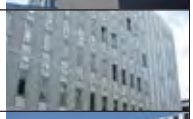


6 10/28[火]

I フロンティア応用科学研究棟

2 10/8[水] 15 12/19[金]

J 情報教育館



25 9/28[日]

K 創成科学研究棟

26 9/30[火]

L 札幌市時計台

17 10/29[水]

M 北海道立道民活動センター かでる2.7

28 11/8[土]

サステナビリティ・ウィーク 2014 事務局

北海道大学国際本部内

〒060-0815 北海道札幌市北区北15条西8丁目
電話: 011-706-8031 FAX: 011-706-8036
E-mail: sw1@oia.hokudai.ac.jp

■詳しい情報、最新の情報はウェブサイトで公開しています。

http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/jp/

古紙配合率100%再生紙を使用しています。

PRINTED WITH SOYINK

2014年8月発行

サステナビリティ・ウィーク2014を振り返って

サステナビリティ・ウィーク2014 実行委員長
国際担当理事・副学長 上田 一郎

G8北海道洞爺湖サミット2008の開催を見据え2007年に開始した「北海道大学サステナビリティ・ウィーク」は今年で第8回を迎えました。今年は10月25日（土）から11月9日（日）の16日間に19企画、この前後数週間に開催された13企画を合わせて合計32企画を実施しました。

本学のこれまでの歩み

本学は2005年に北海道大学「持続可能な開発」国際戦略を策定し、「持続可能な開発（Sustainable Development: SD）」をテーマに掲げて各種の取り組みを行ってきました。2005年は「国連持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development: ESD) の10年」が開始された年です。国際的な動きに呼応する形で本学では各学問分野において、または分野横断的にSDもしくはESDが取り組まれてきました。その歩みの中で、前述のG8北海道洞爺湖サミットが開催されるのと並行して、本学が中心的な役割を果たしてG8大学サミットを開催し、世界の主要な大学と共に「札幌サステイナビリティ宣言」を2008年に採択しました。その宣言をひとつずつ具現化させながら本学は今日に至っています。

開催テーマ「持続可能な開発のための教育」

「国連ESDの10年」が最終年を迎える2014年には，名古屋市で「ESDユネスコ世界会議」が11月10-12日に開催されたのをはじめ、世界の各地で数多くの教育機関がこれまでのESDの取り組みを振り返り、将来計画について議論をしました。本学においても、サステナビリティ・ウィーク2014のテーマをESDと定め、様々な観点からSDのための教育について、学生、市民、教育者、地域、大学、民間団体が議論をしました。

教育の未来を考える多角的な議論の実施

テーマに即して開催された16の企画は実に多様です。
「ESD国際シンポジウム- 次世代のESD戦略」「専門家国際ネットワークを用いたサニテーション教育」「協定校企画 フィンランド―日本 ジョイントシンポジウム」「日露共同で行なう教育プログラム開発

プロジェクト」では、中国、韓国、タイ、アフリカ、北欧、ロシアの大学との協働教育の在り方について議論しました。
「サステイナブルキャンパス国際シンポジウム2014」では、大学と地域の連携について議論が行われ、「第5回サステナブル・キャンパス・コンテスト」では学生の視点から教育を提供する／受ける大学という環境に対し、改善アイデアが提案されました。
また、障害を持つ人が大学で学び、社会で働くためには教育や大学がどうあるべきかを議論した「障害をもつ大学生の就労を目指して」、環境倫理の観点から教育のあり方を議論した「第9回応用倫理国際会議：安全、サステイナビリティ、人性の涵養」、文化的景観を守り継承するための教育プログラムを検討した「先住民文化遺産とツーリズム」など、持続可能な社会の創造に向けた教育のあり方を考える機会が提供されました。

ウェブ・メディアを通じた世界同時議論

サステナビリティ・ウィーク事務局は毎年、新しい事にチャレンジしてきました。今年はインターネット・フォーラム「GiFT: Global issues Forum for Tomorrow」においてUstreamやYoutubeによる動画配信のみならず、ソーシャル・ネットワーク・システム(SNS)の一つであるFacebookを活用して、世界中の若者が動画を観ながらFacebook上で議論する機会を提供したところ、世界各地から253名もの参加を得ました。
世界から人が集まるまたは集めることを考えたときに北海道は決して地理的に優位な場所ではありません。だからこそ、このようなウェブ・メディアを活用して議論の場を世界へ提供することは、遠隔地に住む10代の学生や仕事に忙しい社会人が議論に加わることを可能にし、サステナビリティ・ウィークをいっそう「世界に開かれた議論のプラットフォーム」へと機能させることに繋がります。今後、他の企画でも積極的にウェブ・メディアを活用していくことが期待されます。

2015年に向けて

第9回のサステナビリティ・ウィークは、2015年10月24日（土）から11月8日（日）を中心に開催します。
「国連ESDの10年」は2014年で終了しますが、2015年9月の国連総会で「持続可能な開発目標（Sustainability Development Goals）」が採択される予定であり、本目標の達成に向けて世界中が取り組んでいくことになります。
北海道大学も引き続きサステナビリティ・ウィークを開催することを通じて、SDGsへ貢献してゆく所存です。皆様のご理解とご参加をお願い申し上げます。

２. 開催行事のウェブサイト

日中記者交換協定 50年 日本報道、中国報道の半世紀

行事内容

開催日時	2014年9月28日(日)開場:9:30 開始:10:00 終了:17:00 (終了しました)
主催者	メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター
共催	法学研究科附属高等法政教育研究センター
会場	情報教育館３Ｆ(北区北17条西８丁目)
言語:日本語(通訳なし)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要　1964年9月、北京と東京に常駐する日中双方の記者がはじめて、両国の地を踏みました。それから半世紀の月日が経ちました。日本の記者の眼に建国からわずか15年しか経たない中華人民共和国はどのように映り、記者はいかに報じたのでしょうか。中国の記者は、東京五輪の開催に沸く日本をどのように眺め、その様子を本国にどのように伝えていたのでしょうか。本企画は、日本と中国のジャーナリストをお招きし、日中双方の報道の50年の歴史を振り返る試みです。ご承知の通り、2012年以降、日中間においては領土主権をめぐる問題で深刻な摩擦が生じております。メディアという側面から日中関係の半世紀を振り返り、これからの両国関係、さらには東アジアの未来への示唆を得たいと考えます。

会場はこちら

情報教育館３Ｆ（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター長 渡邉浩平
事前申し込み	必要（こちらから）
参加費	無料
問い合わせ先	メディア・コミュニケーション研究院附属東アジアメディア研究センター 渡邉浩平

実施報告

今から50年前の1964年、日本と中国の間に記者交換協定が締結され、日中双方の記者が互いの国に常駐するようになりました。この年には、東京オリンピックが開催され、その期間中に中国が初の原爆実験を行うなど、大きな出来事が重なった年でした。それから半世紀の月日が経ったいま、報道という視点から日本と中国の関係を振り返り、未来への示唆を得るために、本企画を行ないました。企画の実現に際しては、北海道大学法学研究科附属高等法政教育研究センターと同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の協力を得ました。なお、シンポジウムを開催した9月28日は、50年前、日本の記者が香港から中国に入国した日です。

シンポジウムでは午前に、東アジアメディア研究センターの渡邉浩平教授が1964年の日本メディアの中国報道を、西茹准教授が同年の中国メディアの日本報道の分析を発表し、桜美林大学高井潔司教授（北海道大学名誉教授）より、「中国報道50年の変化」が報告されました。そして、同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科加藤千洋教授から、渡邉教授、西准教授、高井教授による報告へのコメントがなされました。

午後の部では、1964年の第一期特派員として北京に赴任された東京放送の大越幸夫氏と国交回復前に北京日報記者として東京に滞在された王泰平氏による特別講演を行ないました。最後に、法学研究科附属高等法政教育研究センター長の鈴木賢教授の司会のもと、加藤教授、高井教授、さらに、日本僑報社編集長段躍中氏、メディア・コミュニケーション研究院藤野彰教授が加わり、ディスカッションを行ないました。

現在，日中関係は極めて悪く、首脳会談も行えない状態にありますが、半世紀の日中双方の報道を当時の時代背景を振り返りつつ冷静に語る場を設けたことは、極めて意義のあることと考えます。なお、記者交換協定40年の際は、日中双方で記念行事が開かれましたが、50年にあたっては、この北海道大学のシンポジウム以外に現在のところ行われてはいないようです。シンポジウムの様子は、10月9日（木）22時からのNHKのBSニュース「国際報道2014」で紹介されました。

渡邉教授による発表の様子

ディスカッションの様子

CRC国際シンポジウム 生体分子をモチーフとした機能性分子の創製と応用

行事内容

開催日時	2014年9月30日（火） 開場：12:00 開講：12:50 終了：18:50 （終了しました）
主催者	北海道大学触媒化学研究センター
共催	日本化学会北海道支部、高分子学会北海道支部、有機合成化学協会北海道支部、北海道大学フロンティア化学教育研究センター
会場	創成科学研究棟 4F セミナー室 B, C
言語：英語（通訳なし）	対象：専門家・大学生・院生
行事概要	生体分子は有機化学の中でも特に重要な研究対象化合物である。生命現象の理解、疾病・感染の克服を目的とした研究のみならず、生体分子を利用する有用分子・材料・システムの創出や、微量な生理活性物質の新しい検出法の開発など、多岐に渡る研究が盛んに行われている。今回、生体分子をキーワードとして各分野の6人のエキスパートを招聘し、研究異分野間の意見交換と、生体分子関連の研究開発における持続的な成長を目標とし、国際シンポジウムを開催する。

北海道大学側の実施責任者	北海道大学触媒化学研究センター集合機能化学研究部門准教授 小山 靖人
事前申し込み	必要：メールにて7月31日まで（当日参加も可能ですが、できるだけ事前にお申し込みください）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学触媒化学研究センター集合機能化学研究部門 Catalysis Research Center, Hokkaido University 小山 靖人 Yasuhito Koyama
URL	http://www.cat.hokudai.ac.jp

実施報告

研究分野の持続的な発展と、分野間の意見交換を目的に、生体分子をキーワードとして様々な分野の６人のエキスパートを世界から招き、国際シンポジウムを開催しました。本シンポジウムは北海道大学触媒化学研究センターが主催し、４団体（日本化学会北海道支部、高分子学会北海道支部、有機合成化学協会北海道支部、北海道大学フロンティア化学教育研究センター）の共催支援により実現しました。
シンポジウムでは、口頭発表６件（招待講演４件、特別講演２件）と27件の学生によるポスター発表を行いました。招待講演者からは、「生体高分子を用いる機能性材料の創製」、「生体分子の分子認識機構の解明」、「生体分子からの有用物質創製」、「生理活性天然物の全合成」、「天然の微量成分の新しい構造決定法」、「生体分子をモチーフとした新しい触媒系の開発」という多岐に渡る分野の講演が行なわれ、生体分子をめぐる研究開発の未来を議論しました。
参加者は学生88名、教職員28名で、合計116名であり、予想を超える多数の学生の参加とともに成功裡に終了しました。イベント終了後に行ったアンケートでは、英語の授業を受けることができる貴重な体験だった、多分野の講演が刺激的だった、といった回答が多く見られました。

学生によるポスター発表の様子

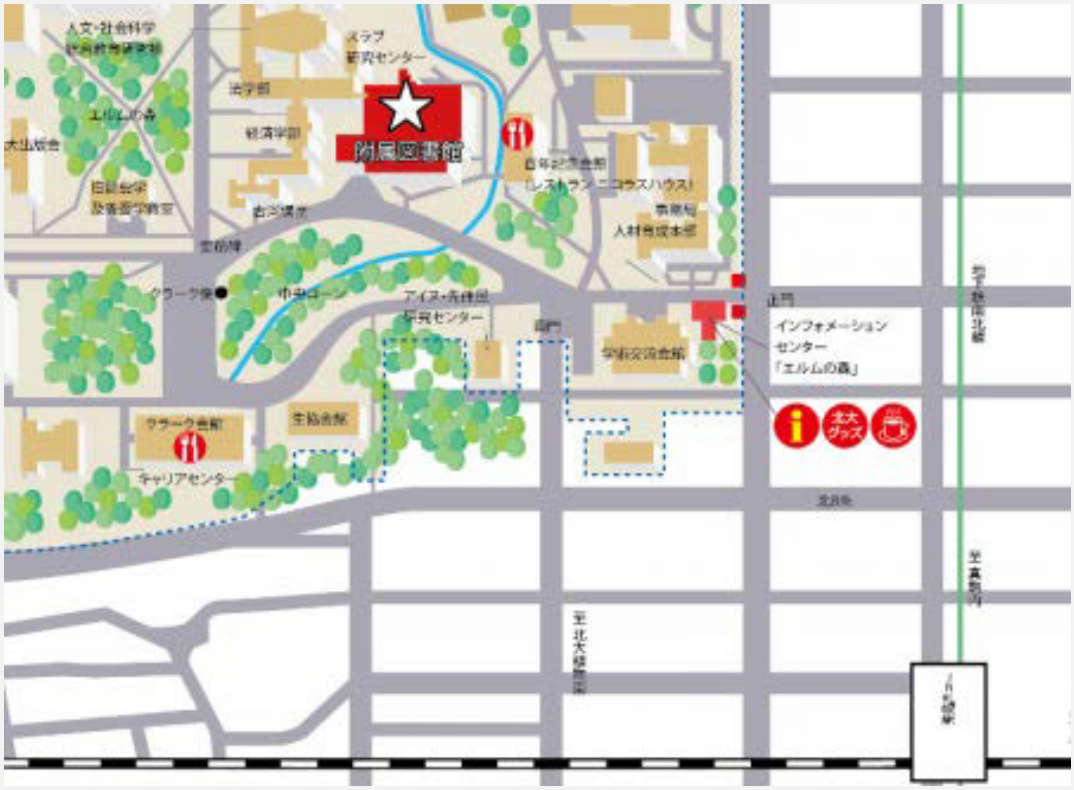
口頭発表時の様子

STAND UP TAKE ACTION in Hokudai

行事内容

開催日時	2014年10月8日（水） 開場：18:00 開始：18:30 終了：19:30 （終了しました）
主催者	北海道大学附属図書館/国連寄託図書館
共催	北大マルシェ
後援	独立行政法人国際協力機構北海道センター（JICA北海道），北海道（予定），公益財団法人札幌国際プラザ，日本国際連合協会北海道本部（予定）
会場	北海道大学附属図書館 本館 メディアコート（予定）
言語：日本語	対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	北大図書館は国連寄託図書館として、国連のミレニアム開発目標達成のために「立ち上がる」世界的なキャンペーン・STAND UP TAKE ACTION に参加します。2014年は国連が定める「国際家族農業年」であることから、北海道の農業・食料について学ぶイベント「北大マルシェ」の取り組みを取り上げ、「北大マルシェ」がめざすもの、「北大マルシェ」で学んだことなどを、農学研究院・小林国之先生と学生さんから発表していただきます。図書館職員によるミレニアム開発目標を巡る状況についてもご紹介します。北海道の「食」や「農」、「サステイナブルな未来」について一緒に考えてみませんか？

会場はこちら



附属図書館（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	附属図書館・利用支援課長 豊田裕昭
事前申し込み	不要（直接会場へお越しください）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学附属図書館/国連寄託図書館 城恭子 E-mail: ref[at]lib.hokudai.ac.jp
URL	http://www.lib.hokudai.ac.jp/standup/

実施報告

附属図書館は、10月8日(水)午後6時30分から、本館メディアコートにおいて「STAND UP TAKE ACTION in Hokudai 」を開催しました。
「STAND UP TAKE ACTION」とは、国連の「ミレニアム開発目標」達成のために「立ち上がる」世界的なキャンペーンです。附属図書館は、道内で唯一の国連寄託図書館に指定されており、国連及び関係機関の資料の所蔵・提供のみならず、国連の広報活動にも貢献してきました。当イベントは、その広報活動の一環として行ったものです。
当日は学生、教職員、市民の方を合わせて36名の参加がありました。まず、イベントの冒頭に図書館職員が本イベントの背景や趣旨を説明しました。
続いて、農産物生産者と消費者の交流を通して北海道の「食」や「農」について考えるイベント「北大マルシェ」の関係者として、小林国之先生(北海道大学農学研究院)と若林諒さん(北海道大学農学院修士1年生)にご講演いただきました。
小林先生からは、北大マルシェを取りまとめる立場から、マルシェの意義や位置付けの講話、マルシェに参加している農産物生産者についてのエピソードの紹介がありました。
若林さんからは、北大マルシェ2014 実行委員長としての活動を通して学んだこと、北大生をはじめ多くの大学生を取りまとめることでやりがいを得たことの発表がありました。
最後に新田孝彦附属図書館長の「スタンド・アップ!」の掛け声のもと、参加者全員で立ち上がり、国連の「ミレニアム開発目標」達成に対する意志をアピールしました。
「STAND UP TAKE ACTION 」の趣旨のひとつは、国際的な課題について身近なできることから実践する点にあります。参加者に実施したアンケートの中には、「行動」や「経験」が重要であるとのご意見があり、イベントの趣旨が参加者に浸透した様子が窺われました。

小林助教の発表

参加者全員でスタンド・アップ

専門家国際ネットワークを用いたサニテーション教育

行事内容

開催日時	2014年10月8日（水） 開場：13:00 開講：14:00 終了：16:00（終了しました）
主催者	次世代都市代謝教育研究センター
共催	国際水環境学院（2iE），ザンビア大学（UNZA）水資源管理センター
会場	フロンティア科学研究棟 セミナールーム
言語：英語（通訳なし）	対象：専門家・大学生・院生

行事概要　2010年の国連によるMDGレポートによれば，2008年現在で26億人の人が適切なトイレを持っておらず，2015年にはその数が27億人に達するとされている．特に，サブサハラのアフリカ地域と南アジアでは人口の69%，64%の人が適切なトイレを持っていない．この中で，サニテーションに関わる人材育成が急務である．本セミナーでは，サニテーション人材育成の国際ネットワーク形成活動の一環として，人材育成コースの導入部に相当する，現状の把握に関する講義をザンビアとインドネシアの都市スラムとブルキナファソの農村部の現状を例に試行的に実施し，学生諸君のアンケートにより教育内容の向上を目指す．

会場はこちら

フロンティア科学研究棟（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	船水 尚行
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	工学研究院サニテーション工学研究室 船水 尚行 E-mail: funamizu[at]eng.hokudai.ac.jp ([at]を＠に置き換えて送信してください）

実施報告

専門家の国際ネットワークを有効に利用してサニテーションに関する教育プログラムを作る取組の一環として開催しました。今年はサニテーションに関わる社会的・文化的な面をとりあげ、3人の講師に講演をお願いしました。また、ザンビア大学の教員と学生、2iE（ブルキナファソ）の教員と学生、インドネシア科学技術院の研究者を交えて、講演についての議論を行い、サニテーションに関する教育プログラムのカリキュラムやコンテンツについて意見交換を行いました。また、講演に参加した学生諸君からも講義の内容に関するコメントや、教育プログラムに対する意見等をもらいました。
今回は、サニテーションの政治学的側面、文化人類学的側面、ならびに経営学的側面に関する3つの講義の e-Learnig 教材を作ることができました。また、各国の学生からの意見を聞くこともできました。
今後は、e-Learnig 教材の充実に一層努力し、サニテーションの教育プログラムの完成を目指していきます。

参加者の集合写真

船水教授による講演の様子

CLARK THEATER 2014

行事内容

開催日時	2014年10月15日(水)～10月19日(日)（終了しました）
主催者	北大映画館プロジェクト
会場	クラーク会館
言語：日本語	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	2006年よりスタートしましたCLARK THEATERも今年で9年目を迎えます。 今年も“映像・映画を通じたコミュニケーションの場の創造”を目指し、文化的に優れた映画を楽しむことのできる映画館を期間限定で開催します。 また2009年度より始まった、サステナビリティウィークへのCLARK THEATERの参加も今年で6年目となりました。そして参加後の来場者数の伸びにより、この4年間では延10,700人もの方々がCLARK THEATERに足を運んでいただきました。 持続可能な社会の構築のためには、異なる環境にいる人々が交流を持ち複数の分野から広く考える視点で議論しなければなりません。 私たちは映画館で「映画」を観るという共通の経験を介して、様々な人が持続可能な社会構築に向けた学びや交流をする機会を提供します。大学と学生と市民の方々がめぐり逢うことで、サステナビリティを促すコミュニケーションへと発展すると共に、大学内に映画館があることの意味や映像教育の実践という視点からも議論することにつながると思います。 このような考えのもとで、その実現に向け、長編プログラムや短編プログラム、企画プログラムなど多種多様な企画を取り揃えます。 今年もスタッフ一同皆様のご来場を心よりお待ちしております。

会場はこちら

クラーク会館（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	北大映画館プロジェクト実行委員長　川端宣志
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	一部有料（詳細は後日決定）
問い合わせ先	北大映画館プロジェクト mail: info[at]clarktheater.jp
URL	http://www.clarktheater.jp/

実施報告

北海道大学の施設であるクラーク会館の講堂・大集会室を使用し、学生や市民に開放した期間限定の映画館を運営しました。全期間を通じて全11プログラム、20作品を上映しました。シネマコンプレックスでは公開していない短編作品や、名作と言われる白黒映画など幅広いコンテンツを提供することが出来ました。様々なジャンルの作品を楽しんでいただくことで、商業映画館では提供することのない楽しさを実感していただけました。また監督をお招きしたトークショーをご覧いただくことで、制作現場の話や、制作者の思いを知っていただく機会を設けることが出来ました。北大カフェプロジェクトや、北海道大学映画研究会とも協力し、足を運んだお客様だけではなく、協力いただいた他団体の学生スタッフにも映像の世界に興味を持つ一助としての場を提供することができました。
今後も私たち映画館プロジェクトは映像文化を今以上に発展させるべく、北大での常設映画館の創設に向けて活動を続けていきます。その中で現代社会が内包する問題を様々な切り口で訴えていき、また教育機関としての大学に常設映画館が存在することの可能性を私たちの活動を通して訴えていければと思います。

第二会場の様子

トークショーの様子

メンバーの集合写真

食事はどうして楽しいの？

行事内容

開催日時	2014年 10月19日（日） 開場：9:00 開講：9:30 終了：12:30（終了しました）
主催者	歯学研究科
会場	歯学部講堂
言語：日本語・英語（同時通訳）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	食事はとても楽しいもので、ただ料理を味わうだけでなく歯から得られる食感（堅さや弾力）や、咀嚼する神経と筋肉の相互作用、さらには食事中の談笑や審美性と、色々な要素が影響を与えます。本講演会はこれら「食事を楽しくする要素」について、世界的に有名な先生方をお招きして紹介することを目的として開催します。そしてみなさんの現在の食事をより楽しくする為の秘訣などについて討論し、より「健やかに生きる」ことに貢献したいと思います。
北海道大学側の実施責任者	歯学研究科 助教 有馬 太郎
事前申し込み	必要（こちらから：10月17日（金）まで）
参加費	無料
問い合わせ先	歯学研究科 Graduate School of Dental Medicine 有馬太郎 TARO ARIMA mail: tar[at]den.hokudai.ac.jp

実施報告

秋晴れの中、歯学部講堂にて「食事はどうして楽しいの？」は開催されました。
本会の趣旨は「食事」という、日常生活で欠かすことのできない活動について科学的知見をふまえて紹介することでした。
最初に本企画責任者の横山敦郎歯学部長より企画内容についての紹介が行われ、ついで「噛むことの重要性」について本学兼平 孝 講師よりお話がありました。非常に平易な言葉で、親しみやすい雰囲気の中でお話いただき、聴衆も冗談に笑ったりしながら聞き入っていました。続いて「味覚とその機能」について、姉妹校であるオーフス大学よりお越し頂いたPeter Svensson教授よりお話がありました。ワインや日本発祥の「うまみ」についてのお話を科学的な知見より紹介され、大変興味深いものでした。珈琲ブレイクを挟んで「唾液の働き」について、北海道歯科衛生士会 原田 晴子 理事がお話されました。原田先生は患者へお話されるように説明されましたので非常に分かりやすく、また人形を使いながら舌の運動法を実演され、聴衆者らも一緒に舌を動かして練習しました。ついでカロリンスカ研究所という、医学系大学世界第二位の教育機関よりMats Trulsson 学部長にお越し頂き、「歯根膜」という「咬んでいることを理解するセンサー」の働きを説明してくださいました。本講演は世界でもめったに聞くことのできない内容で、特に専門家にとって貴重な内容でした。最後に本学の上田 康夫 講師よりCAD/CAM（コンピュータが歯のデザインをアシスタントしてくれ、コンピュータにコントロールされたドリルで歯を彫刻する手法）による歯のかぶせ作製法の紹介がありました。これは審美性が非常に高く、かつ今年より保険が適用された治療法なので非常にタイムリーな内容でした。
すべての講演終了後、質疑応答の場が設けられ、ここで活発な意見交換がなされました。特に興味深かったのは農学部の外国人留学生からの質問で、固形物でも味覚を感じることがあるのか、というものでした。学部を超え、かつ食物を作る側の農学部学生からの興味でありましたので、Peter Svensson先生もMats Trulsson先生も「こういう研究者を捕まえて一緒に研究して行くべきだね」と本行事後に振り返っていました。

会場の様子

原田理事の講演の様子

学術成果のオープンアクセスと HUSCAP

行事内容

開催日時	2014年10月20日(月)～2014年11月3日(月・祝)　平日9:00-22:00　土日:9:00-19:00 (図書館本館の開館時間に準じます)　(終了しました)
主催者	北海道大学附属図書館
会場	北海道大学附属図書館 正面玄関ホール
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	持続可能な社会を実現するためには、そのために必要となるさまざまな学術成果を広く世界で共有することが重要です。HUSCAP(北海道大学学術成果コレクション)では、本学の学術成果を電子的に保存するとともに、ウェブ上で本文を無料公開してその可視性を高めることを目指しています。今回の展示では、学術成果を誰もが読めるようにしよう、というオープンアクセス運動のご案内とともに、現在HUSCAP で公開されている北大の学術成果をご紹介します。

会場はこちら

附属図書館(クリックで拡大)

北海道大学側の実施責任者	附属図書館学術システム課 片桐 和子
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 附属図書館学術システム課
URL	http://eprints.lib.hokudai.ac.jp

実施報告

持続可能な開発の為の教育に向けて、学術成果を世界の人々と共有することができるオープンアクセスとHUSCAP(北海道大学学術成果コレクション)についてのポスター展示を開催しました。展示では「未来をつくる知の共有」をテーマに、研究者へのインタビューの他、HUSCAPによる博士論文のインターネット公表など、北大における学術成果のオープンアクセスの状況について紹介しました。HUSCAPで公開されている多様な学術成果と、教育研究成果を誰もが読むことができるオープンアクセスの意義を、図書館を訪れる学内外の方々へご案内することができました。
附属図書館では今後も学術成果のオープンアクセスと、それを実現するHUSCAPについての理解を深める取り組みを進めていきます。

展示風景 _1

展示風景 _2

第５回ESD 国際シンポジウム 次世代の ESD 戦略

行事内容

開催日時	2014 年10月25日（土） 開場 :12:30 開講 :13:00 終了: 18:30 (終了しました)
主催者	北海道大学
会場	学術交流会館（全体会のみ Ustream により配信）
言語:日本語・英語（同時通訳）	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	ESD国際シンポジウム特設サイトは こちら です

フライヤー（PDF）をダウンロード

世界の課題解決に取り組む北海道大学は、国連の「持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」に呼応して2005年から、持続可能性について考え、行動するための教育（ESD）をカリキュラムの中に取り込んできました。中でも、教育学研究科は、日中韓タイの大学と協働で「ESDキャンパス・アジア」プログラムを展開してきました。

国連DESDが最終年を迎えるにあたり、5回目となる「ESD国際シンポジウム」を拡大して開催します。

大学生／大学院生、研究者、高等学校や市民団体の関係者が集まり、高等教育、高校教育、市民教育の連携による北海道とアジアの次世代ESDについて議論します。

講演者

基調講演

ESD10年の総括

マリオ タブカノン
Mario T. Tabucanon

国際連合大学高等研究所 客員教授

主題講演 1

ESDの将来展望

韓 龍震
Yong Jing Hahn

高麗大学校師範大学長

主題講演 2

ESDの再構築

河口 明人
Akito Kawaguchi

北海道大学教育学研究院 教授

プログラム		
13:00- 会場：大講堂	開催挨拶　上田 一郎 （北海道大学 副学長理事/SW実行委員長） 開催趣旨説明　小内 透 （北海道大学 教育学研究院長） 基調講演　マリオ タブカノン （国際連合大学高等研究所 客員教授） 主題講演 1　韓 龍震 （高麗大学校師範大学長） 主題講演 2　河口 明人 （北海道大学教育学研究院 教授）	
16:00-	分科会	
	分科会 1 ESD Campus Asia の 成果と展望	分科会 2 北海道UNESCOスクール・ コロキウム
	分科会 3 ESD 学生フォーラム	分科会 4 大学と地域社会が 協力するESD
18:00-18:30 会場：大講堂	総合討論	

※会場の都合上、事前にWEB予約された方を優先いたします。

会場はこちら

学術交流会館（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	北海道大学大学院教育学研究院 教授 水野 眞佐夫
事前申し込み	こちらから
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 教育学研究院 E-mail: shomu[at]edu.hokudai.ac.jp 北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局 E-mail: sw1[at]oia.hokudai.ac.jp ([at]を＠に置き換えて送信してください)

実施報告

国連の「持続可能な開発のための教育の10年（DESD）」が最終年を迎えるにあたり、サステナビリティ・ウィークではその全体テーマとして「持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development, ESD）」を掲げました。その特別行事として「第5回 ESDシンポジウム 次世代のESD戦略」を開催しました。シンポジウムの全体会はインターネットにて世界生配信され、参加者数は 165名（学内49名、学外48名、オンライン参加68名）であり、専門的な内容が少なくない中で、多くの参加を得ることができました。

本シンポジウムは教育学研究院によって過去４回にわたり開催されてきた「ESD国際シンポジウム」を拡大して開催したものです。開催の目的は、北海道・アジアにおけるESD推進の10年間を総括し、次代の教育の在り方について展望を得ることです。そのために、日中韓タイの海外協定校教員、道内ユネスコスクールの教員・研究者、環境省機関、また学生による分科会の開催など、北海道とアジアの次世代ESDについて多角的かつ総合的な情報提供と議論を行なう場を設けました。さらに基調講演者としてお招きした国際連合大学高等研究所（UNU-IAS）マリオ・タブカノン客員教授は、DESDに呼応する形で作られたUNU-IASにおいて指導的立場におられるESD研究者であり、国際的なESD情勢についても熟知される、世界的な第一人者です。ESDについて、規模・内容ともに非常に充実したシンポジウムとなりました。

シンポジウムは上田一郎理事・副学長による開催挨拶、教育学研究院小内透院長による趣旨説明によって開始されました。全体会では、UNU-IAS マリオ・タブカノン客員教授から「ESD10年の総括」、高麗大学校師範大学韓龍震学長から「ESDの将来展望」、本学教育学研究院河口明人教授から「ESDの再構築」と題した講演が行なわれました。
分科会「ESD Campus Asiaの成果と展望」では日中韓タイの各大学と共に過去４年間取り組んできたESD国際協働教育について、参加大学による報告と今後の展望について討議しました。
分科会「北海道ユネスコ・スクールコロキウム」では、北海道におけるESD実践を中核的に担ってきたユネスコスクール活動について報告が行なわれ、ポストDESDの展望について議論を行いました。
分科会「ESD学生フォーラム」では、ESDの取組みに参加してきた学生によるプレゼンテーションとディスカッションが行なわれ、会場からの質問を含む活発な議論となりました。
分科会「大学と地域社会が協力するESD」では2つの報告とパネルディスカッションによって、RCE（Regional Centre of Expertise on ESD: ESD推進の地域拠点のこと）の設立など、大学を含めた地域社会全体としてのESD推進のための必要策が討議されました。
最後には再び大講堂に全参加者が集まり、総括セッションとして各分科会の代表者が登壇し、それぞれが行った議論について報告しました。

シンポジウム終了後に実施したアンケートでは、「様々な角度からESDについて知れたことが良かった」「国際的な視野を持つことの重要さがわかった」「北海道のRCE設立の動向が興味深かった」との回答が多くみられました。開会から閉会まで通しての参加をいただいた参加者も多く、全体で議論への認識を深めていけたことに、関係者一同、大きな満足感を得ました。様々な立場でESDの発展に携わる参加者が一堂に会し今後の展望を議論できた、大変貴重な機会となりました。（文責：国際本部サステナビリティ・ウィーク事務局）

基調講演後の質疑応答の様子

総括セッションの様子

参加者集合写真

障害をもつ大学生の就労をめざして

行事内容

開催日時	2014年10月26日(日) 開場:10:00 開講:10:30 終了:12:00 ※終了後、15:00まで分科会を予定(別途申込)(終了しました)
主催者	北海道大学 特別修学支援室
後援	札幌学院大学
会場	学術交流会館 小講堂
言語:日本語(手話通訳、要約筆記あり)	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	わが国も、2014年2月19日をもって障害者権利条約への批准が叶い、効力を持つ時代となった。教育の場において、働く場において、障害者も健常者もともに活動する環境の提供が求められるようになったのである。そこで、このような法の整備がされていない時期から、障害者があたりまえに大学で学び、社会で働いていく道を拓いてきた先達に、その体験を聴く企画を立ち上げたい。さらに、就労支援に携わる職員の立場から、そして障害者雇用を積極的に受け入れている雇用の立場から、その実際を聴き、学ぶこと、働くことへの希望を紡ぎだす企画とする。

シンポジスト紹介

登り口 倫子氏 (DPI北海道ブロック会議 理事)

福島 太郎 氏 (公益社団法人 札幌聴覚障害者協会 理事)

片岡 聡 氏 (NPO法人リトルプロフェッサーズ理事長/NPO法人東京都自閉症協会当事者スタッフ)

上村 差知 氏 (NPO法人コミュネット楽創 就業・生活相談室からびな室長)

藤枝 幸子 氏 (生活協同組合コープさっぽろ人事本部 人事部 人事マネージャー)

シンポジウム分科会ポスター

北海道大学特別修学支援室主催シンポジウム企画

障害をもつ大学生の就労をめざして

2014年10月26日（日）

北海道大学 学術交流会館

第1部　シンポジウム　｜10:30 - 12:00（開場10:00）

障害をもつ社会人シンポジスト3名（肢体不自由、聴覚障害、発達障害）からは、大学生活や就労の経験をご講演いただきます。就労支援事業所の方、障害者雇用を行っている企業の方からは、障害者の就労を応援する側としてどのようなことを実践されてきたのかをご講演いただきます。

＊シンポジウムの詳細はこちらへ　http://sustain.ola.hokudai.ac.jp/sw/jp/2014/udl/

第2部　分科会（※要予約）｜13:00 - 15:00

4つの分科会があります。障害をもつ大学生を中心とした3つの分科会（肢体不自由、聴覚障害、発達障害）では、学生と障害をもつ社会人が修学や就労の経験に関する情報・意見交換を行います。教職員を中心とした分科会では、大学教職員、就労支援関係者、障害者雇用を積極的に行っている企業関係者で障害学生支援や社会資源に関する情報・意見交換を行います。

＊シンポジウムおよび聴覚障害分科会には、要約筆記と手話通訳による情報保障を行います。他の分科会も、お申込み記載内容に応じ情報保障をご準備いたします。

北海道大学 サステナビリティウィーク2014

主催　北海道大学特別修学支援室

後援　札幌学院大学

概要

わが国も、2014年2月19日をもって障害者権利条約への批准が叶いました。教育の場において、働く場において、障害者も健常者もともに活動する環境の提供が求められるようになりました。そこで、このような法の整備がされていない時期から、障害者があたりまえに大学で学び、社会で働いていく道を拓いてきた先達からその体験を聴く機会を設けました。さらに、就労支援に携わる職員の立場から、そして障害者雇用を積極的に受け入れている事業主の立場から、その実際を伝えていただきます。今回のシンポジウムが、参加者ひとりひとりにとって、学び働くことへの希望を紡ぎだす場となることを期待しています。

企画実施責任者　松田　康子
北海道大学教育学研究院　准教授
特別修学支援室相談員（兼任）

参加申し込み方法

第1部シンポジウム｜申し込みは不要です。情報保障が必要な場合は、下記問い合せ先までご相談ください。

第2部分科会｜申し込みが必要です。
氏名・所属・連絡先（電話番号またはメールアドレス）・参加希望分科会（肢体不自由、聴覚障害、発達障害、教職員）・必要な情報保障を明記した上で、下記の分科会申し込み専用メールアドレスまでお申し込みください。
分科会申し込み締め切りは、2014年10月6日（月）です。

＊会場の収容人数の関係で、申し込み締め切り日前に締め切る場合もあります。
＊申し込み時の個人情報は、本企画の運営及び進行を行う目的のみに使用させていただきます。

本企画問い合わせ先

北海道大学 特別修学支援室
〒060-0817　札幌市北区北17条西8丁目
高等教育推進機構1階 N144,N145
電話/FAX　011-706-7473
Email
企画全般：udl@jimu.hokudai.ac.jp
（半角英数字：ユー・ディー・エル）
分科会申し込み専用：
shuro1026@jimu.hokudai.ac.jp
（半角英数字：エス・エイチ・ユー・アール・オー・ワン・ゼロ・ツー・シックス・ゼロ・ゼロ・ゼロ・ゼロ）

会場：北海道大学学術交流会館

学術交流会館（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	教育学研究院 准教授 松田 康子
事前申し込み	不要（情報保障が必要な方は、事前にご連絡ください）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 特別修学支援室 mail: udl[at]jimu.hokudai.ac.jp （[at]を＠に置き換えて送信してください。）

実施報告

5名のシンポジストを招いて、特別修学支援室主催シンポジウム「障害をもつ大学生の就労をめざして」を開催しました。
肢体不自由のあるシンポジスト、ろうのシンポジスト、自閉症をもつシンポジストからは、大学で学び社会で働く経験を語っていただきました。就労支援事業所のシンポジストからは地域の社会資源について、ご発表いただきました。障害をもつ人を積極的に雇用している企業のシンポジストからは、企業での支援体制を中心にお話していただきました。参加者は約160名でした。アンケートの集計（回収率60%）によると、参加内訳は学生が30%を占め、次いで教育関係者とその他（福祉関係者等）がそれぞれ21.7%、市民14.1%となりました。参加者からは「当事者の話を聴くことができて勉強になった。」「今後も続けて欲しい。」「他の障害への理解を深めたいので、次の企画に期待する。」等の感想がありました。
特別修学支援室は、障害のある学生に対して合理的配慮に基づいた学びの環境整備を行う組織です。平成28年度より障害者差別解消法施行が決定している中、本シンポジウムにおいて「働く」という普遍的なテーマを共有できたことは非常に意義深いものでした。

講演の様子

北大×JICA 連携企画 青年海外協力隊トークイベント
～持続可能な社会をつくる日本のボランティア～

行事内容

開催日時	2014年10月28日（火） 開場：18:00 開講：18:15 終了：19:30（終了しました）
主催者	独立行政法人 国際協力機構 北海道国際センター（札幌）
共催	北海道大学 国際本部
会場	北海道大学 国際本部 大会議室
言語：日本語	対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	

（上）アフリカのマラウイ共和国にて、約500人の子ども達を前に
サイエンスショーを公演している様子。

青年海外協力隊として開発途上国の教育現場に携わってきたJICAボランティアが、自分の目で見て、耳で聞いた2年間についてお話します。また、その経験を今後どのように日本の教育・社会に還元できるのか、国際理解教育の視点からみなさんと考えます。協力隊に興味のある方、教員を目指している方、ぜひご参加ください！

北海道大学側の実施責任者	北海道大学 国際本部 国際連携課 国際協力マネージャー榎本宏
事前申し込み	不要（直接会場へお越しください）
参加費	無料
問い合わせ先	JICA北海道（札幌）市民参加協力課

実施報告

本イベントは、JICA 青年海外協力隊経験者による体験談と、教育関係者による「持続可能な開発のための教育」をテーマとしたパネルトークという2部構成で行いました。
前半の体験談は北大 OGで、青年海外協力隊としてアフリカのマラウイ共和国で理数科教師として現地の中高等学校で活動された、新江梨佳氏にお話しいただきました。
同国は水道普及率8%、電気普及率9%、平均寿命47歳という国である反面、そこで新氏が見た物はアフリカのステレオタイプとなっている「貧しさ・悲惨さ・苦しみ」ではなく、現地の人々の「笑顔・エネルギー・可能性」だったと言います。新氏は、普段の授業に加え、サイエンスクラブの設立、マラウイ国の科学コンテストへの参加、同僚教員の授業・研修のサポートを通し、生徒や子どもたちが可能性を伸ばせる機会を作ること、同僚の先生が力を活かせる場をつくることを目標に活動しました。「自分たちでできる!」と目覚めた生徒の中には、卒業後、自分の村で風力発電を作る人も出たそうです。
後半のパネルトークには、新氏に加え北広島市西部中学校の渡邉圭教諭をお招きし、「これからの教育」と「海外の経験をそこにどう生かすかことができるか」についてお話しいただきました。お2人がこれからの教育に必要なこととして共に言及されたのは「受け身からの脱却」と「周囲の人と積極的に関わっていく力」を育てていくことでした。そのための具体的な方法として、地域に目を向け、地域の課題を大人と共に考え行動できるような教育という提案がありました。
アンケートでは「日本で過ごしていて、日本の常識は世界の常識だと思っていましたが、今回のお話で視野を広げることができました」「今の日本は何もなくても生きていける時代です。途上国は不便ですが、逆に生きる方法を考える人間になる気がしました」「本当の内なる力を引き出すにはどんな教育が必要なのか考えさせられます」などのコメントが寄せられ、これからの教育について考える機会を提供できたと感じました。
今回は講義形式で終わってしまいましたが、次回は参加者と自由に意見を交換できる参加型のイベントにできるように工夫を凝らしたいと思います。

現地で行った実験を披露する新氏

マラウイでの経験を伝える新氏

時計台サロン 農学部に聞いてみよう ～北海道の絶滅危惧種を保護する試み～

行事内容

開催日時	2014年10月29日（水） 開場：17:30 開講：18:00 終了：20:00 （終了しました）
主催者	北海道大学大学院農学研究院
共催	北海道新聞社
後援	札幌国際プラザ、札幌農学同窓会
会場	札幌市時計台
言語：日本語（通訳なし）	対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	「時計台サロン」は、市民の皆さんに北大農学部などの研究を広く知っていただくと同時に、一緒に考え討論する場として平成24年4月から始まった市民公開セミナーです。本サロンは、北海道新聞社との共催、札幌国際プラザおよび札幌同窓会の後援の下で企画、運営されています。 毎回の講演は、旧札幌農学校演武場の雰囲気を色濃く残した二階にあるホールで行われており、現在までに20回開催されました。 今回は北海道内の固有動植物数が減少し、絶滅危惧種となっている現状と保護の取り組みに関する話題を取り上げます。

北海道大学側の実施責任者	農学研究院 家畜生産学分野 家畜改良増殖学研究室 教授 高橋 昌志
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学農学事務部 庶務担当
URL	http://www.agr.hokudai.ac.jp/

実施報告

「時計台サロン」は、市民の皆さんに北大農学部などの研究を広く知っていただくと同時に、一緒に考え討論する場として平成24年4月から始まった市民公開セミナーです。
毎回の講演は、旧札幌農学校演武場の雰囲気を色濃く残した二階にあるホールで行われており、平成24年度は毎月開催の12回、平成25年度になってからは各月開催になり、26年度の現在までに21回開催されました。
このたび22回目となる本セミナーは「北海道の絶滅危惧種を守るために」をテーマに開催されました。講演では、北海道に生息する固有種であるシマフクロウや礼文島にしか生育しないレブンアツモリソウについての個体数の減少の現状と保護のための調査研究についての話題がそれぞれ札幌大学の早矢仕有子教授、北海道大学農学研究院の志村華子から提供されました。
参加者は市民の方々、本学の OBや学生の計72名であり、終了後に実施したアンケートでは、「アマチュアの動物写真愛好家や自然愛好家の増加によるシマフクロウの巣への無思慮な接近や、植物愛好家による盗掘など、人による状況悪化の程度の大きさが実感できた」なとの回答が多くみられました。
時計台サロン実行委員会では、農学部から市民への情報発信の場として引き続き時計台サロンを開催していく予定です。

早矢仕教授による発表の様子

志村助教による発表の様子

北海道／防災・減災リレーシンポジウム　―冬の防災・危機管理を考える―

行事内容

開催日時	2014 年 10 月 30 日（木）　開場：13:00　開講：13:30　終了：17:00（終了しました）
主催者	北海道大学公共政策大学院（協力／大学院附属公共政策学研究センター）
共催	一般社団法人国立大学協会、北海道新聞社
会場	学術交流会館 講堂
言語：日本語（通訳なし）　対象：専門家・一般市民・大学生・院生	
行事概要	冬の北海道では、暴風雪による交通障害のほか、地震・津波や火山災害等の被害拡大も懸念されます。住民の暮らしや経済活動の安全を確保するため、大学・行政・マスコミが連携し、地域の特性に合った防災・減災対策と市民教育を進めることが欠かせません。本企画は、北見・室蘭とのリレー方式のシンポジウムにより、総合的な討論を行います。 また、10月28日（火）～10月30日（木）には、学術交流会館1Ｆホールにて、災害対応に関するポスター展（入場無料）も開催します。ぜひお立ち寄りください。 ★当日は、多数のご来場をいただき、ありがとうございました。 このシンポジウムの報告を、下記ＵＲＬにて紹介しておりますので、どうぞご参照ください。

会場はこちら

学術交流会館（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	北海道大学公共政策大学院 特任教授 高松 泰
事前申し込み	要（こちらから）10月27日（月）までに申し込みをしてください。 会場定員300名。（座席に余裕がある場合には、当日ご入場もお受けいたします）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学 公共政策大学院　院長室 E-mail:office@hops.hokudai.ac.jp
URL	http://www.hops.hokudai.ac.jp/research/sustain.html

実施報告

10月30日（木）13時30分より、学術交流会館講堂にて「北海道／防災・減災リレーシンポジウム―冬の防災・危機管理を考える― プログラムC（札幌会場）」を開催しました。このシンポジウムは、「防災・日本再生シンポジウム」行事の一環として国立大学協会の助成を得て企画したもので、北見工業大学（10月17日）、室蘭工業大学（10月23日）での会議に続く、包括的な議論の場となりました。

シンポジウム前半では、本学理学研究院教授・谷岡勇市郎、工学研究院教授・岡田成幸、前気象庁長官の羽鳥光彦の三氏が基調講演を行いました。北海道において注意すべき地震発生のメカニズムや、積雪寒冷な気候に配慮した住宅が防災の面でも優れた特性を持っていること、また近年の地球温暖化・異常気象の傾向を受け、気象庁が取り組んでいる防災気象情報発信の改善・活用等について、各分野最前線の専門的知見が報告されました。

後半は、農学研究院・南哲行特任教授、北海道開発局事業振興部・高橋公浩部長、北海道総務部・加藤聡危機管理監、札幌市危機管理対策室・相原室長にも加わっていただき、パネルディスカッションを行いました。異常気象時における情報提供や避難勧告発令のあり方や「帰宅困難者対策」などについての行政面からの話題提供と、それに基づくディスカッションにつづき、会場からの発言も得て、地域住民の意識向上や北海道の防災教育に関する優れた取組みが紹介されました。

リレーシンポジウム全体では、基調講演8件、延べ時間10時間を越えるボリュームとなり、産業界・自治体関係者、一般市民の方々等、500人以上の方に参加いただくことができました。ご協力くださった関係諸機関の皆様にお礼を申し上げるとともに、参加者からいただいた意見や要望を参考に、今後も継続した取組みとして行えるよう努めてまいります。

パネルディスカッションにおける意見交換

パネルディスカッション全景

市民公開シンポジウム都市でも農的生活　―植物の面白さと豊かな生活―

行事内容

開催日時	2014年10月31日（金）開場：12:00　開講：13:00　終了：16:00（終了しました）
主催者	北方生物圏フィールド科学センター
共催	北海道園芸研究談話会
会場	学術交流会館 小講堂
言語：日本語（逐次通訳あり）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要

日常的に「競争」を感じる現代社会において、植物栽培や家庭菜園は生活に潤いを与えるもので、さらに一歩進んで都市圏においても農的生活の志向は増大している。このような状況を背景に、植物のもつ面白さ、今回は植物同士が化学物質により相互の生育を制御している現象を解説してもらう。札幌（近郊）や海外都市での市民農園や農的テーマパークを紹介する。さらに、道内各地での農業６次化のユニークな事例を紹介し、都市圏でも農業や農的生活への市民参加の道について議論する。

講演予定者は以下である。

植物同士で成長を制御するしくみ（藤井義晴教授・東京農工大学）

上海氏における農的テーマパーク（ザン・ユーピン助教・中国江西省花野菜研究所）
（北海道６次会会長）（札幌市経済局農政部）

会場はこちら

学術交流会館(クリックで拡大)

北海道大学側の実施責任者	荒木 肇
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料

実施報告

2014年10月31日に学術交流会館で、北方生物圏フィールド科学センターと北海道園芸研究談話会との共催で開催され、111名が参加しました。このシンポジウムでは近年、札幌市内での市民農園の希望者の増加や学生農業サークル活動の活発化を背景に、潤いのある生活のために、都市における農的生活の状況や将来について、学術性や国際性も織り込んだ話題提供をベースに討論を行ないました。
講師の話題概要は以下です。
① 東京農工大学 藤井義晴教授は「植物同士で成長を制御するしくみ」について話され、化学物質が植物相互の生育を阻害または促進させているアレロパシーという現象を紹介しました。この関係を上手に活用すると雑草抑制になり、有機農業や農作業効率化や新規生物農薬の創出につながると説明されました。
② 中国江西省花野菜研究所 ザン・ユーピン助教は、「中国上海市における農業テーマパーク」について説明され、そこでは植物工場、バイオテクノロジーや近代庭園等による中国における農業発展と将来像を展示し、毎年30万人が見学に来ていると報告されました。
③ さとみらいプロジェクトグループ 奥山 誠副施設長は「サッポロさとらんどにおける農的生活の支援活動」と題して、サッポロさとらんどが「人と農業・自然とのふれあい」や「都市と農業の共存」をテーマに、市民が農業や自然を身近に感じながら憩い・楽しむことが出来る魅力的な緑地空間の提供を理念に運営されており、1995年のオープン以降来年者は1,000万を超えたと報告しました。園内で農業体験の場を提供し、市民農園も194区画設置したものの、4倍競争率となり、農業のある暮らしに関心が高まっていると説明しました。
④ さっぽろ農学校吉岡宏直主任講師は「定年後にめざす農業活動」として、農業へ一歩進みたい人を対象にさっぽろ農学校が開講され、4月～11月上旬までの毎土曜日に農業実習（栽培技術の実践）と講義（農業全般基礎知識）が取りこまれて、50才代の受講生が多いと報告しました。また、さっぽろ農学校の卒業生がさっぽろ農学校倶楽部やグリーンライフサッポロのNPOを設立して、そこには北大生も参画している事例も報告されました。
討論では、多様な農業へのふれあいについて意見が出され、講師の吉岡氏から札幌市の「いきいきファー マー育成支援事業」が平成26年度から始まり、中高年世代が農業技術を習得し、農的活動を通じて生きがいのある暮らしを実践できるために研修ほ場を設置する計画（1人が約10aを耕作）も披露されました。北海道園芸研究談話会の支援に感謝します。

質疑応答時の様子

会場の様子

留学希望者向けセミナー SD on Campus

行事内容

開催日時	2014年10月31日（金） 開場：17:40 開講：18:10 終了：20:10 （終了しました）
主催者	北海道大学 国際本部
会場	北海道大学 国際本部
言語：英語（通訳なし）	対象：大学生・院生
行事概要	本企画は、協定大学においてサスティナブル・ディベロプメント(SD)についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを北海道大学短期留学プログラム (HUSTEP)で交換留学している留学生等に依頼し、学生の目線での情報提供を行ってもらう。
北海道大学側の実施責任者	文学研究科 教授 瀬名波 栄潤
事前申し込み	必要（申込サイトにて）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学国際本部国際教務課 Division of International Academic Programs, Office of International Affairs 河野 公美 Kumi KONO Mail: jryugaku@oia.hokudai.ac.jp

実施報告

国際本部は、昨年に引き続き、留学希望者向けセミナーを実施しました。参加大学は、フィリピン・デラサル大学、インドネシア・ガジャマダ大学、ベトナム・ベトナム国家大学ホーチミン校 International University、中国・西安交通大学、オーストラリア・シドニー大学の 5 大学でした。2013 年から、学生の目線での情報提供を目的に、発表者を北海道大学短期留学プログラム (HUSTEP) で交換留学している留学生に依頼しました。

イベントでは、各大学がサスティナブル・ディベロプメント(SD) についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外で SDにどのように関わっているかを発表してもらい、それぞれの特徴的な取り組みが紹介されました。

本イベントは本年で 6 度目の開催ですが、参加した学生達に実施したアンケートでも「協定大学への留学について興味を持てた」、「北大生の活動も協定大学の取組にならって盛んになれば良い」などの回答がみられました。また、発表した留学生も自らの大学を直接アピールできる貴重な機会ととらえて十分な準備を重ね、当日も満足感を抱いていたようでした。参加学生のアンケートでは、来年度に講演してほしい大学の希望についても聴取することができたので、可能な限り希望を取り入れていきたいと考えています。

国際本部からの説明

参加者の発表風景

第9回応用倫理国際会議
「安全、サステイナビリティ、人性の涵養～気候変動に対する道徳義務～」

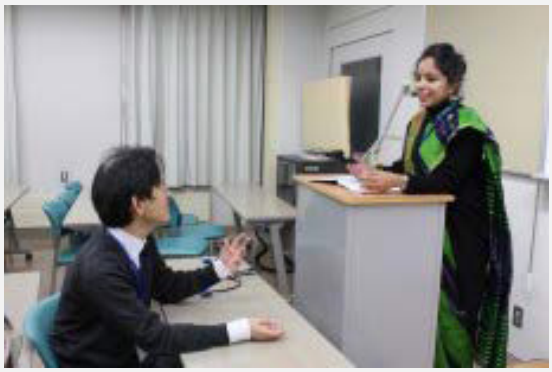
行事内容

開催日時	11/1 (10:00～17:00), 11/2 (10:00～12:30)　（終了しました）
主催者	北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター
会場	人文・社会科学研究教育棟 W409 室
言語：英語（通訳なし）	対象：専門家・大学生・院生
行事概要	本行事は、ニューヨーク大学教授のデール・ジェイミソン博士による、第9回応用倫理国際会議（2014年10月30日～11月2日）での基調講演とその前日（2014年10月30日）の特別講演会を開催することにある。今回の会議のテーマは「安全、サステイナビリティ、人性の涵養」であり、特に気候変動に対する私たち市民の道徳義務を倫理学的に問うという内容となっており、まさにサステイナビリティウィークの行事としてふさわしいものである。ジェイミソン博士は環境倫理における世界的な権威であり、サステイナビリティの倫理についての研究の第一人者である。第9回応用倫理国際会議では「気候変動に対する道徳義務」というタイトルで基調講演を行う。主に学術的な内容になるが、必ずしも予備知識を必要とするものではない。 受付開始： 11/1 9:30～11/2 9:30～
北海道大学側の実施責任者	文学研究科 准教授 眞嶋 俊造
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	文学研究科応用倫理研究教育センター Center for Applied Ethics and Philosophy 西川深雪 Miyuki Nishikawa

実施報告

本行事では、ニューヨーク大学教授のデール・ジェイミソン博士を含む3名の全体講演と50件の一般発表を行いました。応用倫理国際会議は2007年に始まり、2008年より毎年行って参りました。今回の会議のテーマは「安全、サステイナビリティ、人性の涵養」でした。
ジェイミソン博士は環境倫理における世界的な権威であり、サステイナビリティの倫理についての研究の第一人者です。ジェイミソン博士の講演は 'Moral Responsibility for Climate Change' という題名で、気候変動に対する私たち市民の道徳義務を倫理学的に問うという内容でした。本講演は、気候変動の問題が私たちの倫理的な行動にかかっていることを指摘し、倫理的判断と倫理的行動をとる重要性を私たちに突きつける内容でした。
講演は特に予備知識を必要としない平易な語り口で進められ、なぜ私たちが気候変動に対して道徳的義務を負うのかという理由が分かり易く説明されました。また、その責任というものが私たちに実際の行動を求めるということが説明されました。
次年度以降においても、サステイナビリティの倫理を応用倫理国際会議の主要なテーマのひとつとしていく基盤を作ることができました。

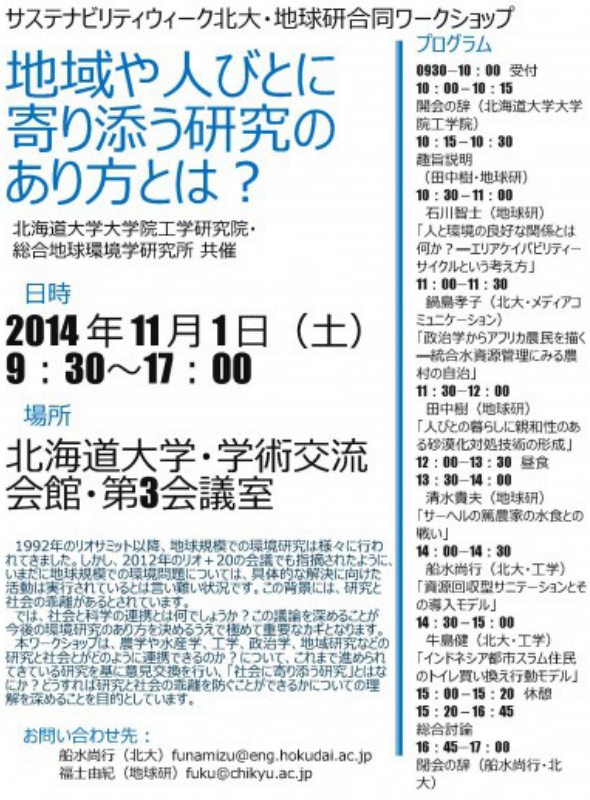
全体講演の様子


一般発表での質疑応答の様子

サステナビリティウィーク北大・地球研合同ワークショップ「地域や人びとに寄り添う研究の在り方とは？」

行事内容

開催日時	2014年11月1日（土）　開場：9:00　開講：9:30　終了：17:45　（終了しました）
主催者	北海道大学工学研究院
共催	総合地球環境学研究所
会場	学術交流会館 第３会議室
言語：日本語・英語（通訳なし）　対象：専門家・大学生・院生	
行事概要	1992年のリオサミット以降、地球規模での環境研究は様々に行われてきた。しかし、2012年のリオ＋20の会議でも指摘されたように、いまだに地球規模での環境問題については、具体的な解決に向けた活動は実行されているとは言い難い。この背景には、研究と社会の乖離があるとされ、ICSUは、社会と科学の連携を謳ったFuture Earth プログラムを推進している。では、社会と科学の連携とは何か？この議論を深めることが今後の環境研究の在り方を決めるうえで極めて重要なカギとなる。本ワークショップでは、公衆衛生や地域文化ならびに工学の研究と社会とがどのように連携できるのか？について、これまで進められてきている研究を基に意見交換を行い、「社会に寄り添う研究」とはなにか？どうすれば研究と社会の乖離を防ぐことができるかについての理解を深めることを目的としている。 ポスターデータ (PDF)をダウンロード


サステナビリティウィーク北大・地球研合同ワークショップ

地域や人びとに寄り添う研究のあり方とは？

北海道大学大学院工学研究院・総合地球環境学研究所 共催

日時

2014年11月1日（土）
9：30〜17：00

場所

北海道大学・学術交流会館・第3会議室

1992年のリオサミット以降、地球規模での環境研究は様々に行われてきました。しかし、2012年のリオ＋20の会議でも指摘されたように、いまだに地球規模での環境問題については、具体的な解決に向けた活動は実行されているとは言い難い状況です。この背景には、研究と社会の乖離があるとされています。
では、社会と科学の連携とは何でしょうか？この議論を深めることが今後の環境研究のあり方を決めるうえで極めて重要なカギとなります。
本ワークショップは、農学や水産学、工学、政治学、地域研究などの研究と社会とがどのように連携できるのか？について、これまで進められてきている研究を基に意見交換を行い、「社会に寄り添う研究」とはなにか？どうすれば研究と社会の乖離を防ぐことができるかについての理解を深めることを目的としています。

お問い合わせ先：
船水尚行（北大）funamizu@eng.hokudai.ac.jp
福士由紀（地球研）fuku@chikyu.ac.jp

プログラム
0930−10：00　受付
10：00−10：15
開会の辞（北海道大学大学院工学院）
10：15−10：30
趣旨説明
（田中樹・地球研）
10：30−11：00
石川智士（地球研）
「人と環境の良好な関係とは何か？―エリアケイパビリティーサイクルという考え方」
11：00−11：30
鍋島孝子（北大・メディアコミュニケーション）
「政治学からアフリカ農民を描く―統合水資源管理にみる農村の自治」
11：30−12：00
田中樹（地球研）
「人びとの暮らしに親和性のある砂漠化対処技術の形成」
12：00−13：30　昼食
13：30−14：00
清水貴夫（地球研）
「サーヘルの篤農家の水食との戦い」
14：00−14：30
船水尚行（北大・工学）
「資源回収型サニテーションとその導入モデル」
14：30−15：00
牛島健（北大・工学）
「インドネシア都市スラム住民のトイレ買い換え行動モデル」
15：00−15：20　休憩
15：20−16：45
総合討論
16：45−17：00
閉会の辞（船水尚行・北大）

北海道大学側の実施責任者	工学研究院 環境創生工学部門 教授 船水 尚行
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	工学研究院サニテーション工学研究室 Laboratory on Engineering on Sustainable Sanitation 船水 尚行 Naoyuki Funamizu Mail: funamizu@eng.hokudai.ac.jp

実施報告

いまだに地球規模での環境問題については、具体的な解決に向けた活動は実行されているとは言い難い状況です。この背景には、研究と社会の乖離があるとされています。では、社会と科学の連携とは何でしょうか？この議論を深めることが今後の環境研究のあり方を決めるうえで極めて重要なカギと考えました。本ワークショップは、農学、水産学、工学、政治学、地域研究などの専門家が集い、私たちの研究と社会とがどのように連携できるのか？について、これまで進められてきている研究を基に意見交換を行いました。そして、「社会に寄り添う研究」とはなにか？どうすれば研究と社会の乖離を防ぐことができるかについて意見交換を行いました。

ワークショップでは6件の発表が行い、総合討論を約1時間30分にわたって行いました。これらの発表・討論から結論がでるようなテーマではありませんが、「人びとの暮らしを中心に据える」、「資源の利用者が守ろうとしないと自然は守れない」、「人々の目線による地道なフィールド調査」、「人々の価値の連鎖を中心にする」等の意見が出されました。

発表の様子

総合討論の様子

特別講演会「サステイナビリティの倫理」

行事内容

開催日時	2014年11月2日（木）　開場：16:00　開講：16:30　終了：18:00 (終了しました)
主催者	北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター
会場	人文・社会科学研究教育棟 W409室
言語：英語（通訳なし）	対象：専門家・大学生・院生
行事概要	本講演会は、ニューヨーク大学教授のデール・ジェイミソン博士をお招きし、サステイナビリティの倫理についてお話しいただきます。サステイナビリティが大事だということは自明なことかもしれません。しかし、「なぜ、どうして大事なのか？」という理由を知ることもまた同じく重要でしょう。本講演会ではサステイナビリティが大事な理由について理解を深めたいと考えております。
北海道大学側の実施責任者	文学研究科 准教授 眞嶋 俊造
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	文学研究科応用倫理研究教育センター Center for Applied Ethics and Philosophy 西川深雪 Miyuki Nishikawa

実施報告

本講演会では、ニューヨーク大学教授のデール・ジェイミソン博士をお招きし、サステイナビリティの倫理についてお話しいただきました。講演の題目は、' Sustainability and Beyond ' でした。本講演の趣旨は以下の通りでした。「私たちの多くはサステイナビリティが大事であり、重要であるということを信じています。しかし、私たちは「なぜ、サステイナビリティが大事であり、重要なのか？」という問いについて考える機会はあまりないのではないでしょうか。「サステイナビリティが大事であり、重要であることの理由」を理解して初めて、私たちはサステイナビリティを実現していくことの価値、またサステイナブルな社会を構築していくことの重要性について、現実の重みをもって認識することができます。
そして、そのような認識は、サステイナビリティの実現、サステイナブルな社会の構築に向けて実践していく動機づけとなるのです。勿論、サステイナビリティには問題が伴わないわけではありません。その一例として、世代間の正義と世代内の正義との間のトレードオフを挙げることができます。つまり、希少資源の分配を私たち現在世代の人々の間の地球規模での正義（グローバルな正義）と、私たち現在世代と私たちの子孫にあたる未来世代との間の正義（世代間の正義）はトレードオフの関係にあるということです。とはいえ、まずはサステイナビリティの道徳的重要性を理解し、さらに議論を発展させていくことに意義があるのです。
本講演会は「第9回応用倫理国際会議」のポスト・カンファレンス・セミナーという位置づけでもあり、有機的に連動した行事として行うことができました。次年度以降においても、サステイナビリティの倫理の講演会を継続的に開催していきたいと考えております。

デール・ジェイミソン教授の講演の様子①

デール・ジェイミソン教授の講演の様子②

保健科学研究院公開講座ようこそ！ ヘルスサイエンスの世界へ

行事内容

開催日時	2014年11月3日（月）　開講：13:00　終了：16:00（終了しました）
主催者	北海道大学大学院保健科学研究院
言語：日本語（通訳なし）	対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	保健科学研究院の公開講座は、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、3名の講師陣が専門分野の紹介を分かりやすく行います。講演予定については、次のとおりです。 第1限目は、「環境と健康－次世代への影響を考える」と題して、齋藤健教授が環境変化の健康影響、特に世代をこえた影響について話題提供いたします。 第２限目は、「光”を通して今見えること、そして将来出来ること～医療へ、そして日常へ～」と題して、尾崎倫孝教授が現代のストレス社会を強くしなやかに生きるために、体に優しい“光”が私達の生活にどのように貢献できるかについてお話します。 第３限目は、「パーキンソン病のリハビリテーションについて」と題して、髙橋光彦准教授が最新の知見も含め平易に解説し、デモンストレーションを行います。
北海道大学側の実施責任者	保健科学研究院 教授 浅賀 忠義
事前申し込み	10月24日（金）まで受け付け。電話（011-706-3315）およびメール（shomu[at]hs.hokudai.ac.jp）にて（[at]を＠に置き換えて送信ください）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学大学院保健科学研究院 Faculty of Health Science,Hokkaido University 医学系事務部保健科学研究院事務課 General Affairs Section,Faculty of Health Science,Hokkaid University mail: shomu[at]hs.hokudai.ac.jp ([at]を＠に置き換えて送信ください）

実施報告

保健科学研究院の公開講座では「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」というテーマのもと、3名の講師陣が専門分野の紹介を行い、63名の参加がありました。
第1限目は「環境と健康－次世代への影響を考える」と題して、齋藤健教授が環境変化の健康影響、特に世代をこえた影響について話題提供をしました。
第2限目は「“光”を通して今見えること、そして将来出来ること～医療へ、そして日常へ～」と題して、尾崎倫孝教授が現代のストレス社会を強くしなやかに生きるために、体に優しい“光”が私達の生活にどのように貢献できるかについて解説しました。
第3限目は「パーキンソン病のリハビリテーションについて」と題して、髙橋光彦准教授がパーキンソン病のリハビリテーションについて、最新の知見も含め平易に解説し、デモンストレーションを行いました。
講演者はサステナビリティ・ウィーク2014のテーマである「持続可能な開発のための教育」をキーワードとして、保健科学の視点から詳しくかつ分かりやすく解説しました。
参加者からはさまざまな質問があり、3人の各講師はわかりやすく丁寧に解説を行いました。
今後も毎年同じ時期に、その時の時代を反映するようなテーマを設定して、公開講座を開催していく予定です。

挨拶をする伊達研究院長

尾崎教授の話に聞き入る参加者

RECCA 北海道 北海道における気候変動とその適応ワークショップ

行事内容

開催日時	2014 年 11月4日（火） 15:00～17:00 (終了しました)
主催者	工学研究院
後援	公益社団法人 日本気象学会 北海道支部
会場	学術交流会館 大講堂
言語：日本語（通訳なし）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	文部科学省「気候変動適応研究推進プログラム」、北海道を対象とした総合的ダウンスケーリング手法の開発と適用では、2010年から５か年で、北海道地域における気候変動予測研究を実施してきました。その研究成果は、北海道の自治体をはじめ各産業セクターの近未来における気候変動対応にかかせない基礎情報となると考えています。本行事では、研究者・実務者・一般市民が対話と交流を通じて、地域の気候変動情報を共有し、それに対する適応のために、どうすればよいのかを議論します。 ポスターをダウンロード(PDF)

北海道大学側の実施責任者	工学研究院 准教授 山田 朋人
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	工学研究院 山田 朋人 mail: tomohito@eng.hokudai.ac.jp

実施報告

2010年度から文部科学省気候変動適応研究推進プログラム(RECCA)の一環で「北海道を対象とする総合的ダウンスケール手法の開発と適用（通称 RECCA-北海道、代表：工学研究院 山田朋人）」が実施されています。

気候変動への対策は温室効果ガスの排出量の抑制を目的とする緩和策と気候変動下における持続可能な発展を目的とする適応策に大別されます。緩和策は国もしくは地球規模で取り組むものであるのに対して、適応策は各地域の特徴や状況を考慮しなければなりません。欧米各国では適応策の更新を数年に1度の頻度で義務づけるようになりつつあるものの、我が国では環境省が中心となり来年度の閣議決定を目指している段階です。本研究プログラムが開始されてから4年半が経過した現在、今後北海道が取るべき適応策について近年の豪雨災害や気候変動が農業分野に与える影響をあわせて議論することを目的に本ワークショップを開催しました。

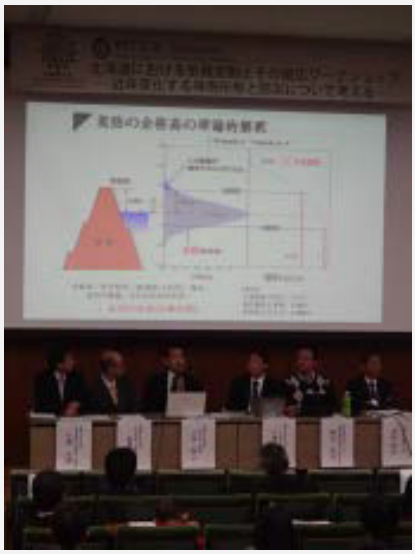
RECCA- 北海道の研究成果として、複数の全球気候モデルと領域気象モデルによる世界の気温が2℃上昇した際の北海道の気温、降雨、積雪深等の特徴を紹介しました。その後、気候モデル、将来予測手法、さらには RECCA- 北海道によって予測された将来データをウェブ上で公開する「近未来ビューワ」についての説明がなされました。

基調講演として、札幌管区気象台長の高野清治氏からは2014年9月に道央を襲った線状降水帯による豪雨の気象特性および豪雨発生前後の各行政機関の取り組みを含めた内容を頂戴し、室蘭工業大学大学院教授の中津川誠氏からは水文現象の変化が積雪地域に及ぼす影響について水資源の観点から最新の研究成果をご紹介頂きました。北海道農業研究センター上席研究員の廣田知良氏からは気候変動が北海道の農業活動に与える影響の正負両面について主要品目ごとに興味深い研究成果をご説明頂きました。

最後に上記の講演者と RECCA-北海道の参画者である理学研究院の稲津將准教授と地球環境科学研究院の佐藤友徳准教授を含めた6名によるパネルディスカッションが実施され、豪雨、豪雪、水資源、農業の観点から北海道が取り組むべき適応策について活発な議論がなされました。

本ワークショップの参加者は161人であり、大学関係者、学生、関係分野の実務者に加え、多くの一般市民の方々にもご参加頂きました。イベント終了後に実施したアンケートでは、「今後の北海道における気候や各分野の適応策を考えるのに役立った」との回答が多くみられました。

会場全体の様子



パネルディスカッションの様子

雑紙削減プロジェクトPAPER SPACE ～身近なところから見つめなおそう～

行事内容

開催日時	2014年11月5日(水)～ 11月9日(日)　開場:9:00　終了:17:00（終了しました）
主催者	PAPER SPACE
後援	北大元気プロジェクト
会場	学術交流会館
言語:日本語	対象:一般市民・大学生・院生
行事概要	雑紙を利用した立体作品の展示を行ないます。 北大のキャンパスからは毎日膨大な量の紙が捨てられています。この紙ゴミを活用し、建築的な空間を作り出すこと(PAPER SPACE)によって、北大生・教職員一人ひとりが普段無意識に紙を捨ててしまっている問題を提起します。紙ゴミという身近な存在を通し皆でサステイナビリティを考える機会を創出します。 予定プログラム ※屋外展示の場所が変更されました。 11/5～11/9: 屋外展示 @ 共用レクリエーションエリア(メインストリートと銀杏並木の交差点) 11/5～11/9: 学術交流会館 ホール 屋内展示
北海道大学側の実施責任者	工学研究院 尾門あいり
事前申し込み	不要(直接会場へお越し下さい)
参加費	無料
問い合わせ先	PAPER SPACE　坂本 mail: sakamoto.masa4@frontier.hokudai.ac.jp
URL	https://www.facebook.com/groups/1487970088155343/

実施報告

私たちの活動の目的は、サステナブルキャンパス実現に向けて先進的な取り組みを行っている北海道大学と、短い期間しかキャンパスで過ごさない学生・北大を訪れる市民・観光客といった大学の取り組みに無関心な大学利用者との乖離を埋め、両者の理解や認識を高めるきっかけづくりです。
本行事は、企画・準備・本番まで、すべて学生（北海道大学で建築を学ぶ学部２年生から修士２年生の学生を中心に、他学、他分野の学生合わせた33人。）で行い、北大のサステナブルキャンパス推進を知るきっかけとして、構内から大量に排出される雑紙を活用し、私たちが普段どれだけ無意識に雑紙を排出しているか、を実際に体感できる“空間作品”として再構成・提示しました。また、作品に活用した雑紙は、北大農場で牛の敷料・バイオマス原料として再活用・処理し、北大構内で排出されたゴミを北大構内で処理する、というサステナブルなシステムモデルの構築・提案も行いました。
期間中、建物内外の作品合わせて800人程度の来場者があり、うち、７割程度が学生でした。来場者からは作品に対する意見とともに、北大キャンパスに対して、「こういうアート展示を大学でやってほしいと思っていた！(学生)」「すごい量の雑紙ですね(学生)」「学生と触れ合えて面白い！（観光客）」「こんなに楽しい公園は初めて！（幼稚園児)」との意見もいただきました。また、企画側の学生からも、「普段の授業で実際の空間を作ることができないので楽しい」「色々な人の捉え方を知ることができて面白い」「これからもやりたい」との意欲的な感想も得ることができ、自分たちの作品を外部の人々に見てもらい反応を体感できたことに達成感を感じることができたようです。新聞社１社、テレビ局２局から取材を受けることができたのも、その反響から、実際に足を運んでいない人たちに私たちの活動を認識してもらえたことを実感しました。
今後も学生の活動がキャンパス内の様々な場所で行われることにより、活動とキャンパスとが呼応し、より魅力的で付加価値の高いサステナブルキャンパス空間の形成、豊かな自然環境の積極的な活用や保全、活動を行う人々の人間関係の醸成、などにつながっていくでしょう。私たちの活動がそのような北大キャンパスの創造に貢献できるよう、次年度以降も継続していきたいと考えております。

紅葉を見に来た市民と学生の交流

説明に耳を傾ける市民の方と製作中の学生

協定校企画 フィンランド―日本ジョイントシンポジウム

行事内容

開催日時	2014年11月5日（水）～11月7日（金）（終了しました）
主催者	ラップランド大学、オウル大学、北海道大学、札幌市立大学
会場	ラップランド大学（フィンランド）
言語：英語（通訳なし）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	オープニングセッションでは、ラップランド大学（フィンランド）、オウル大学（同）、北海道大学、札幌市立大学等の代表者が相互交流の更なる充実と発展を目指して、発表・討論を行います。また、分科会では「サービス・デザイン」「高齢化社会」「コミュニティー・プランニング」等を切り口に、最新の研究成果を共有し、今後の共同研究、共同教育の可能性について議論します。 【参考】 「フィンランド―日本ジョイントシンポジウム」特設ホームページ （外部サイト：英語のみ） http://www.ulapland.fi/InEnglish/About-us/News--Events/Events/Events-2014/SUSTAINABILITY-WEEKS-2014---Finnish-Japanese-Joint-Symposium
北海道大学側の実施責任者	北海道大学 国際本部長 上田一郎
事前申し込み	必要
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学国際本部国際支援課 Division of International Services, Office of International Affairs, Hokkaido University Mail: gi-core@oia.hokudai.ac.jp

実施報告

11月5日（水）から7日（金）までの3日間の日程で、ラップランド大学（フィンランド）において、「フィンランドー日本 ジョイントシンポジウムー Innovation and Well-being through Multidisciplinary Dialogueー」が開催されました。本シンポジウムは、本学「サステナビリティ・ウィーク」企画のひとつとして開催されたものであり、ラップランド大学、オウル大学、札幌市立大学、本学を中心に、約80名の参加がありました。

初日のオープニングセレモニーでは、ラップランド大学 マウリ・ユラコトラ学長の歓迎挨拶の後、オウル大学ウリ・ラユネン学長、及び本学 上田一郎 副学長から、来賓挨拶がありました。

その後、観光・ヘルスケア・都市デザイン等、テーマごとに5つの分科会に分かれて、2日間の議論や事例発表等が行われました。今回すべての分科会で「サービス・デザイン形式」という統一した手法が取り入れられました。サービス・デザイン形式とは、サービス・デザイン※1の過程で開発された、多様なステークホルダーから意見を効率的に聴取するための対話方式です。サービス・デザインが、ホスト校であるラップランド大学の研究を特徴づける学際融合分野のひとつであることから、分科会運営の共通手法として採用されました。参加者は、慣れない手法に最初は戸惑いつつも、普段はあまり接点がない異分野の研究者とも交流する等、よい感触を得ている様子でした。

最終日には、各参加大学からの基調講演が行われました。続いて行われたパネルディスカッションでも、参加者同士の活発な意見交換が進められ、本シンポジウムは成功裡に終了することができました。

今後は、本シンポジウムをきっかけとして、本学とフィンランドの協定大学、及び北極圏大学※2との間での研究者交流、共同研究の実施等、さらなる連携強化が期待されています。なお、来年の本シンポジウムは札幌で開催される予定です。

※1サービス・デザイン（Service Design）
サービス・デザインとは、あるサービスが供給者から需要者へ最も効果的に提供される仕組みの設計のこと。情報ネットワークシステムの構築、行政サービスの向上等にも応用されている。

※2 北極圏大学（University of the Arctic）
カナダ、デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、ロシア、スウェーデン、及びアメリカ合衆国（Arctic8）を中心とした北方圏における課題（環境問題、先住民、サステナビリティなど）にかかる教育・研究を推進するための教育機関ネットワーク。

シンポジウム関係者と意見交換する
上田理事・副学長

基調講演の様子

パネルディスカッションの様子

経済学研究科 REBN シンポジウム ―北海道における新時代の「ものづくり」：IT×農業の試み―

行事内容

開催日時	2014年11月6日（木） 開場:13:00 開講：13:30 終了：17:00（終了しました）
主催者	経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター
共催	日本生産管理学会・北海道東北支部
後援	札幌コワーキング・サポーターズ（SCS）
会場	学術交流会館 大講堂
言語：日本語（通訳なし）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	北海道は、「ものづくり」の後進地と言われて久しい。道内には、製造業におけるオンリーワン企業がいくつか散見されるものの、ものづくり集積地としての強みには乏しい。他方、近年急速に注目度が高まりつつある「メイカームーブメント」は、従来型のものづくりのあり方を革命的に変える可能性を秘めている。ものづくりに関しては大きく周回遅れだとされる北海道が、新しいタイプの「ものづくり」で強みを持つ可能性はどこにあるのだろうか。北海道の地域特性や産業特性を考える時、農業（酪農業や水産業など1次産業全般）、ITそしてメイカームーブメンのコラボレーションにこそ、その活路を見いだせるのではないだろうか。北海道における新しい「ものづくりの可能性を、北海道の地域特性との関連で考えたい。

会場はこちら

学術交流会館（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	経済学研究科 教授 平本健太
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター事務局 塚田 久美子 E-mail: sacade[at]econ.hokudai.a.cjp
URL	http://rebn.econ.hokudai.ac.jp/

実施報告

11月6日（木）、学術交流会館大講堂において、経済学研究科地域経済経営ネットワーク研究センター・日本生産管理学会北海道東北支部共催、札幌コワーキングサポーターズ後援によるシンポジウム「北海道における新時代のものづくり —IT×農業の試み」が開催されました。
本シンポジウムでは、慶應義塾大学の田中浩也氏、（株）イーラボ・エクスペリエンスの島村博氏、（株）SUSUBOX・FabLab つくば相部範之氏の３名を講師にお迎えし、それぞれご専門の立場から講演いただきました。具体的には、「ウェブ社会からファブ社会へ」「Fab社会の到来：食と農業のかしこい暮らし方」「FabLabつくばの歩み」に関する、刺激的で有意義な内容でした。
シンポジウムの後半では、経済学研究科の平本健太教授をコーディネーターとするパネルディスカッションが行われました。パネルセッションでは、フロアのオーディエンスから提出された多くの質問にもとづいて、講師の先生方とのディスカッションを行い、問題点や解決策を探りました。メイカームーブメントやファブ社会において、われわれの価値観がどのように変わっていくのか、ファブ社会が到来しつつある現状において、北海道はいかなるポジションでものづくりに関わっていけるのか、ITとのコラボレーションによる北海道農業や酪農業についての可能性はいかなるものかなど、あたらしい時代のものづくりを巡り、熱心で濃密な議論が展開されました。

パネルディスカッションの様子

会場の様子

GiFT2014 ～ Global issues Forum for Tomorrow～

行事内容

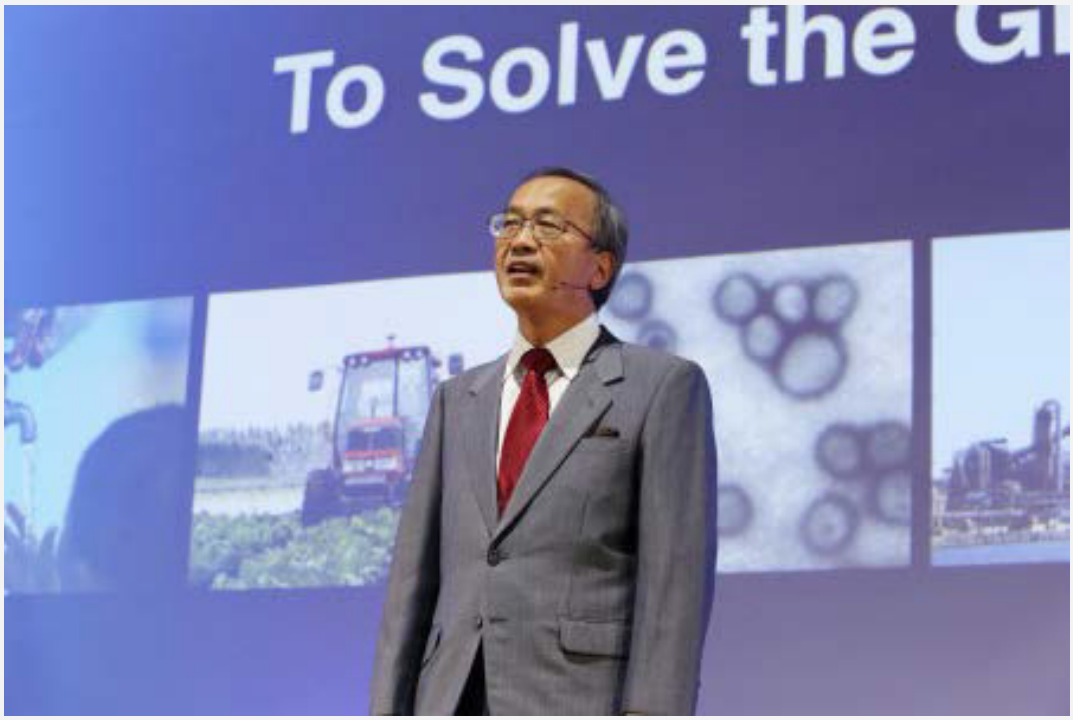
開催日時	2014年11月8日（土）　配信開始：20:00　終了：21:45 (終了しました)
主催者	北海道大学
会場	Ustream 配信（http://www.ustream.tv/channel/gift2014）
言語：英語	対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	GiFTのサイトが リニューアルしました！ UstreamとFacebookでGiFTに参加しよう! Ustream 配信: 11月8日（土）20:00-21:45 配信URL (Ustream): http://www.ustream.tv/channel/gift2014 Facebook URL:https://www.facebook.com/SW.Hokkaido.u 持続可能な社会の実現に挑んでいる研究者５名のプレゼンテーションをインターネットで見て、英語と日本語で議論するインターネット・フォーラムです。 11月8日、夜８時からの放送に合わせ、Facebookと連動し、視聴されている方からのご意見や感想も募集します。 世界中の高校生と大学生に向けた、「一緒に世界の重要課題に挑もう!」との熱い呼びかけに、応答してください。

北海道大学側の実施責任者	サステナビリティ・ウィーク実行委員会実行委員長 上田 一郎 （北海道大学理事・副学長）
問い合わせ先	北海道大学 サステナビリティ・ウィーク事務局 （国際本部国際連携課内） E-mail: sw1[at]oia.hokudai.ac.jp *[at]を@に変えて送信ください。
URL	http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/gift/

実施報告

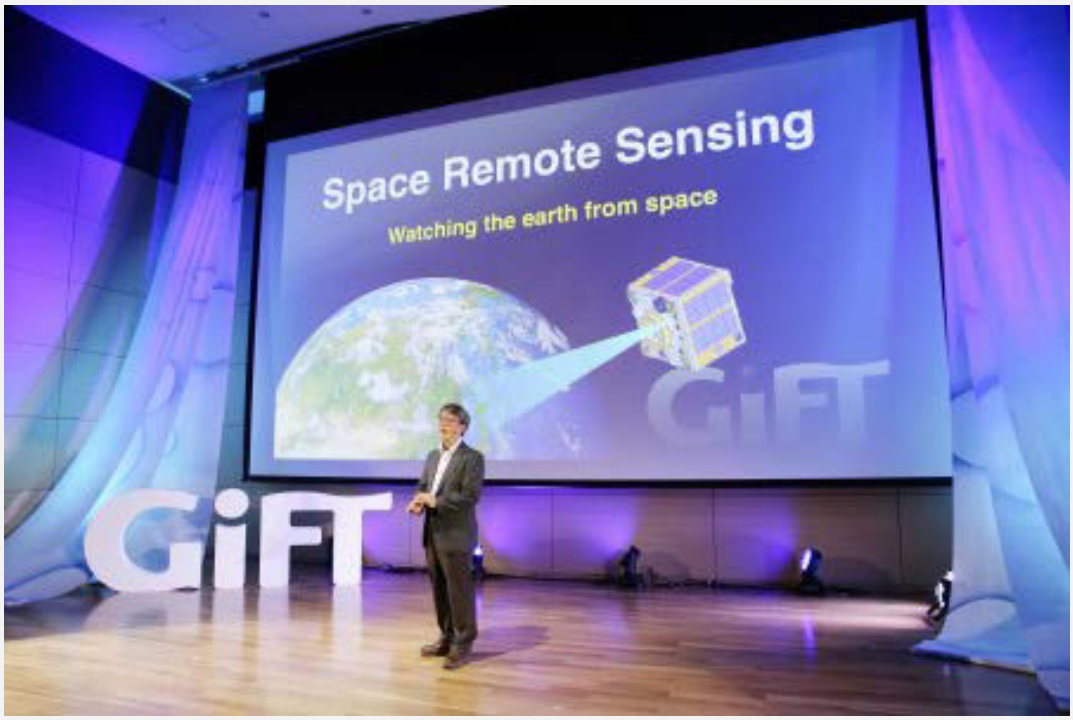
サステナビリティ・ウィークの主要行事として毎年開催しているインターネット・フォーラム「GiFT」は今年で4回目を迎えました。今年は「教育」をテーマに5人の本学教職員がプレゼンターとして参加し、これからの教育の在り方、研究の在り方、大学の在り方などについて最新の研究成果と共に課題解決の展望を各自12分間、英語で講演しました。山口佳三総長によるプレゼンテーションでは、スペシャル対談として鈴木章名誉教授にも登壇いただきました。
インターネットを駆使した海外広報を進化させようと毎年新たなチャレンジを重ねているGiFTは今年、世界各地に住む高校生、大学生、高校教師とインターネットでつながり、北大のプレゼンテーションをパブリック・ビューイング（同時視聴）し、感想をFacebookでやり取りする双方向フォーラムを実現させました。11月8日に行なわれた2時間のGiFT番組への参加者は253人。わかる範囲だけでも、インドネシア、マレーシアといったアジアの国々や英国やスウェーデンなどの欧州の国々、カナダ、アメリカといった北米の国々、ナイジェリアなどのアフリカの国々から大学生・高校生問わず参加があり、交わされたメッセージは約200件に及びました。
生配信以降、YouTube および Ustream で閲覧可能となったアーカイブ動画は、公開から1か月間弱で日本はもちろんのこと世界各地から1800回以上（昨年のおよそ2倍）視聴され、その数は毎日増えています。

来年度もサステナビリティ・ウィークの主要行事として開催する予定です。



プレゼンテーション：北海道大学 総長 山口佳三

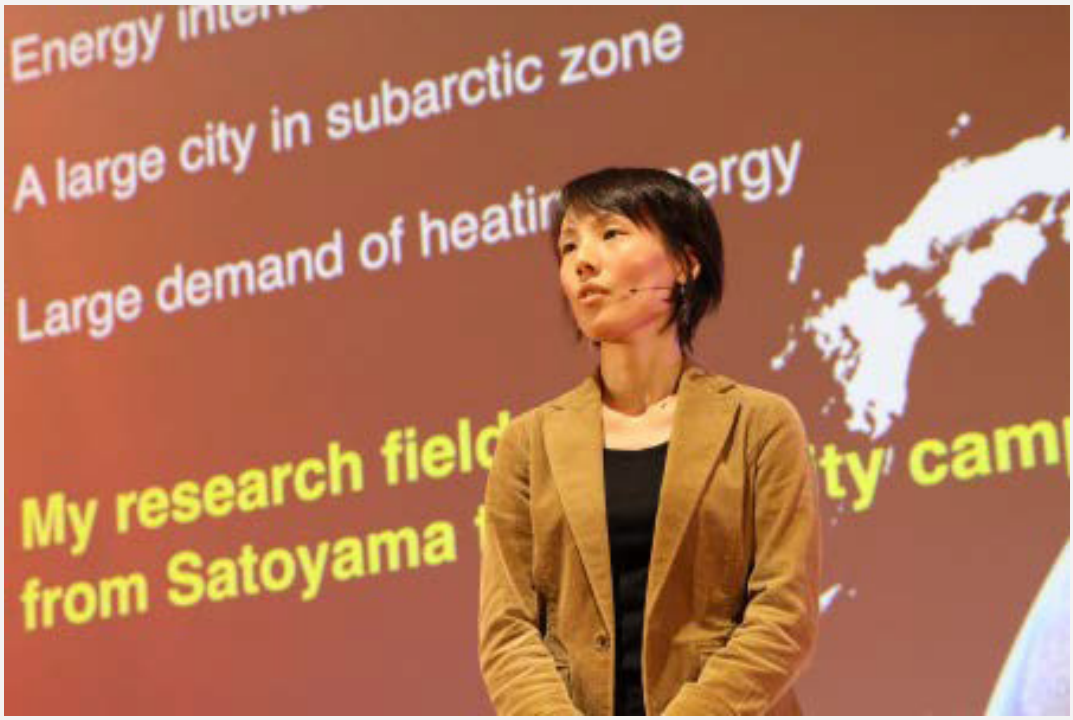
山口総長と鈴木名誉教授の対談の様子



プレゼンテーション：理学研究院 教授 高橋幸弘

プレゼンテーションCOSTEP 大津珠子

プレゼンテーション：工学研究院准教授 渡邊直子



プレゼンテーション：サステイナブル・キャンパス推進本部 池上真紀

Ustream 配信の様子

北大×JICA 連携企画 国際協力人材セミナーin 札幌

行事内容

開催日時	2014年11月8日(土) 開場:9:10　開講:9:30　終了:16:30 (終了しました)
主催者	国際協力機構(JICA)
会場	北海道立道民活動センター(カデル2・7)
言語:日本語	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	JICA国際協力人材部では、外務省国際機関人事センター、国際機関、及び開発コンサルタント企業やNPO/NGO等の協力により、社会人や大学院生等を対象に「国際協力人材セミナー」を開催します。 JICAをはじめとする国際協力実施機関が会場に集結。セミナーでは、人材に求める資質や能力等について紹介するとともに、JICA及び各機関・団体の業界動向等についても解説します。また、国際協力分野で勤務されている講師をお招きし、現場の生の声や実態、仕事のやりがいなどを赤裸々にお話しいただきます。 1日で国際協力業界の様々な仕事・キャリアについて知ることができます! 《プログラム》(注)プログラムは予告なく変更となる場合がありますのでご了承ください。 時刻 本プログラム 10階 1060会議室 10階1070会議室 09:30 〜10:50 (A) 全体セッション ・開会、進行説明 ・開催挨拶 ・国際協力の全体像 ・JICA人材の紹介 ・JICA公募案件についての説明 ・PARTNERサイトの紹介 講師:JICA国際協力人材部 過去のセッションレポートはこちら – 休憩10分 –

11:00～12:00 (B)JICAセッション (1) 公募型企画調査員

・JICA 公募案件についての説明

・体験談 公募型企画調査員

講師：JICA 国際協力人材部

JICA 企画調査員経験者

過去のセッションレポートはこちら

(C)NGOセッション

・NGOで働くということ

講師：北海道 NGO 相談員

過去のセッションレポートはこちら

– お昼休み –

13:00～14:00 (D) 開発コンサルタントセッション

・開発コンサルタント業界の概要について

・開発コンサルティング企業が求める人材像

講演団体：一般社団法人 海外コンサルティング企業協会（ECFA）、アイ・シー・ネット株式会社

過去のセッションレポートはこちら

– 休憩10 分 –

14:10～15:00 (E) JICAセッション (2) 民間セクター

・『JICA 』の取り組み、民間セクターによる国際協力について説明

講演団体：JICA 北海道国際センター、日東建設株式会社

過去のセッションレポートはこちら

– 休憩 10分 –

15:10～15:40 (F) 国際機関セッション (1)※

・国際公務員になるために

講演団体：外務省国際機関人事センター

過去のセッションレポートはこちら

15:40～16:30 (G) 国際機関セッション (2)

・国際機関の仕事について

講演団体：国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)

過去のセッションレポートはこちら

※ JPO派遣制度についての説明がありますが、同制度は35歳以下が対象です。

また、YPP 試験についての説明がありますが、応募は32歳以下となっております。

注：JICA 職員の採用説明会ではありませんので、お間違えのないようご注意ください。

具体的な職業紹介、斡旋などは行っておりません。

北海道大学側の実施責任者	北海道大学 国際本部 国際連携課 国際協力マネージャー榎本宏
事前申し込み	必要（下記参照）
参加費	無料予定
問い合わせ先	国際協力人材セミナーPARTNER 事務局 Email: jicahrp[at]jica.go.jp 下記ウェブサイトからお申し込みの上、ご参加ください（申込受付期間：10/7～11/7 ） http://partner.jica.go.jp/semi/jinzai/20141108_hokkaido.html
URL	http://partner.jica.go.jp/semi/jinzai/20141108_hokkaido.html

実施報告

JICA国際協力人材部では、国際協力の現場で活躍を目指す人材に対する関連情報の提供と国際協力活動への参加促進を目的とした「国際協力人材セミナーin北海道」を実施しました。事前申込153名のうち、最終的に137名の参加があり、うち135名は北海道内からの参加者、また学生・大学院生が約65名を占めていました。

プログラム及び各セッションの概要は、以下のとおりです。

(1)「国際協力のキャリアを目指す方へ」と題した国際協力業界の動向説明及び国際協力の仕事全般の解説

(2) JICA人材の紹介（公募案件）及び北海道在住の公募型企画調査員の体験談

(3)「ODAを活用した中小企業海外展開支援事業」についての解説と事例紹介及び日東建設株式会社からナイジェリアにおける取り組み事業紹介

(4)「NGOで働くということ」をテーマに、一般財団法人北海道国際交流センター所属のNGO相談員の講演

(5)「開発コンサルタント業界の概要」、「開発コンサルタントに求められる人材像」をテーマに、それぞれ一般社団法人海外コンサルティング企業協会（ECFA）及び同協会の会員企業であるアイ・シーネット株式会社の講演

(6) 外務省国際機関人事センターより「国際公務員になるために」、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）より「国際機関の仕事について」の講演

参加者全員に対して実施したアンケートは115名から回収し、112名より「非常に満足」又は「満足」の回答を得るなど、非常に満足度の高い（98％）セミナーを提供することができたと考えています。

参加者からは、「国際協力に関する様々な立場の方からお話を伺うことができ、多角的に具体的に自身のキャリアプランを考えるよい情報をたくさん頂けました。」「普段関わることがない大人の方たちの話を聴くことができて貴重な時間を過ごすことができました。今後も定期的に実施して頂きたいです。」「国際協力人材セミナーは将来国際機関で働きたいと思っている私にとってすごく良い機会となりました。ただ、このようなセミナーなどが東京に集中し、札幌で聞く機会が少ないのは残念です。今後、数を増やすことはできないのでしょうか。」などのコメントが寄せられました。

当日は、会場と同時に多数の人が詰めかけ、またセミナー終了後も講師の方に熱心に質問する参加者も多数見受けられるなど、参加者の熱意に触れました。JICAとしては、引き続き国際協力に関する情報提供の必要性を実感しました。

講演の様子

安全でサステナブルな社会の土台をつくるには？ ―社会基盤学からの多様な視点―

行事内容

開催日時	2014年11月8日（土）　開場：12:30　開講：13:00　終了：15:30 (終了しました)
主催者	工学部 環境社会工学科 社会基盤学コース・国土政策学コース
会場	学術交流会館 小講堂
言語：日本語（通訳なし）	対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	気温の上昇、自然災害の激化、枯渇の一途をたどる天然資源、水や空気の汚染… 地球規模で進む自然環境の変化に立ち向かわざるを得ない状況に世界中の科学者は立たされています。「社会基盤学」とはこれらの自然環境の変化がもたらす影響を予測すると共に、安全、安心、健康に人々が暮らせる社会の土台を構築するための学問です。そのため社会基盤学がカバーする範囲は水や大気、地盤、材料、交通システムなど多岐に渡り。社会の持続可能な発展のために不可欠な要素を網羅しています。本プログラムでは、人々の日々の生活をより良くするために本学問がどう貢献しているかについて紹介すると共に、安全でサステナブルな社会を支える社会基盤学の重要性についてお話しします。

学術交流会館（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	工学研究院環境フィールド工学部門 助教 Michael HENRY（ヘンリーマイケル）
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	工学研究院環境フィールド工学部門 猿渡亜由未 mail: saruwata[at]eng.hokudai.ac.jp
URL	http://www.eng.hokudai.ac.jp/edu/course/civileng/index.html

実施報告

本シンポジウムは、自然環境の変化がもたらす影響を予測すると共に、安全、安心、健康に人々が暮らせる社会の基盤を構築するための学問である社会基盤学が、持続可能な社会の構築にどのように貢献しているかを紹介する為のイベントとして開催したものです。
社会の持続可能な発展について長く研究されてきた日本サステイナビリティ研究所 堺教授に基調講演をして頂いた後、北海道大学工学部社会基盤学コース、国土政策学コースにおいてコンクリート工学、地盤工学、海岸工学、水文学、交通計画学を専門として研究を行う若手教員7名が10分間ずつ各専門分野と社会の持続可能性との関わりについて講演を行いました。
参加者の6割は大学生～大学院生であり、皆メモを取りながら熱心に話を聞いていました。イベント終了後に実施したアンケートでは「色々な分野からの視点が分かりやすく解説されており面白かった」、「社会基盤学を学ぶ上で環境、経済、社会との関わりを考える重要性がわかった」等の反応が多く見られ、参加者は概ね満足していたものと考えます。一方「もっと大々的に告知を行った方がいい」との意見も多く寄せられ、来年のイベント時にはPR方法を工夫するべきとの課題も明らかになりました。
我々を取り巻く様々な自然現象のメカニズムを解明し、持続可能な社会の構築に貢献する社会基盤学の取り組みを、広く一般に知ってもらう為に、来年以降も本イベントを継続してきたいと思います。

講演の様子

講演者の集合写真

第５回学生企画 サステナブル・キャンパス・コンテスト ―サステナブルな明日への架け橋―

行事内容

開催日時	2014年11月9日（日） 開場：12:00 開講：13:00 終了：18:00 (終了しました)
主催者	SCSD(The Student Council for Sustainable Development in Hokkaido University)
共催	北海道大学 サステイナブルキャンパス推進本部
会場	学術交流会館 第一会議室
言語：日本語	対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	北大生の手により、北大を世界1サステナブルなキャンパスにすることを目的に今年もサステナブルキャンパスコンテスト(11月９日土曜日)を開催します。コンテストでは、「北大の持続可能な“環境（自然環境・施設環境・人間環境）”作りに貢献する実践的な活動」を広い分野で審査します。対象は北大の学生に限らず他大生・市民とし、応募資格はプロジェクトに主体となって取り組むことの可能な人であることです。最優秀賞を取られた場合には実行予算とSCSDの学生及び各方面の協力を約束します。審査は北大教授・北大事務職員・生協職員他、当日の一般参加者の投票により行われ当日の発表とその場でのディスカッションから総合的な評価で行われます。今年のテーマは「“自然な”北大」とし、自然保護だけでなく日頃、変だなと思うところ、もっとこうできるという改善点、或いはこういう姿であるべきだという広い意味での“自然な”北大の姿を募集します。

会場はこちら

学術交流会館（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	北海道大学 理学部２年 小山田伸明
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	SCSD(The Student Council for Sustainable Development in Hokkaido University) mail: scsdmail[at]gmail.com
URL	http://scsdhome.web.fc2.com/

実施報告

本コンテストは今年度で5回目となり、北大で活動するあるぼら、北大畑くらぶ、雑紙削減プロジェクトの3組の学生に大学をサステナブルにするプロジェクトを提案して頂きました。今年度初の取り組みとして、本イベントの1か月ほど前に中間報告会を実施し、SCSDや教職員、提案者と共に議論し、案のブラッシュアップを行いました。そのため、本イベントでは非常に質の高い提案がなされました。
今回は接戦の結果、北大畑くらぶが最優秀賞を受賞し、その内容は全学の学生が任意で使えるような農場を作ろうというものでした。全学農場を通して学生が体験によって、普段おろそかにしがちな“食”というものについて真剣に考える機会を作ることができるというメリットに加え、その際のアシストや情報発信の方法までをカバーして考えられていたことが評価されました。このプロジェクトはSCSDと共に畑クラブが実行して行く予定で、状況経過はFacebookなどで発信していきます。
今後もサステナブルキャンパスコンテストを学生の意見を大学へ届ける窓口としての機能を充実していくために、今後も知名度の向上や応募しやすい環境整備などを進めていきます。

授賞時風景

北大畑くらぶ（最優秀賞）の発表風景

国際シンポジウム 環境と健康と科学コミュニケーション

行事内容

開催日時	2014年11月17日(月) 開場：13:00　開講：13:30　終了：17:00（終了しました）
主催者	環境健康科学研究教育センター
共催	保健科学研究院、医学研究科、地球環境科学研究院
後援	札幌市、札幌市教育委員会、北海道、北海道教育委員会、環境省北海道地方事務局
会場	学術交流会館 小講堂
言語：日本語・英語（同時通訳）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生

行事概要

科学技術の発展は、人類に繁栄と豊かな生活をもたらす一方、環境や安全、生命倫理など、国際規模で解決しなければならない問題も生み出しています。基礎研究や先進的な研究開発の成果を社会に提供し、科学技術と社会との双方向のコミュニケーションを確立する必要性が説かれています。そこで本シンポジウムでは、近年の環境変化が人びと、特に子どもや高齢者など弱い人びとの健康に与える影響を題材に、持続可能な社会のための教育や科学技術コミュニケーションにおける課題について、研究者自身のコミュニケーション活動への関わりと、地域住民との対話や学び合いの場の創出に取り組むコミュニケーターとが集い、諸外国の事例も交えて人々の知識を深め、討論の機会とします。

■司会

山内太郎 (北海道大学大学院保健科学研究院・環境健康科学研究教育センター兼務)

田中俊逸 (北海道大学大学院地球環境科学研究院・環境健康科学研究教育センター兼務)

■講演および、パネルデイスカッション (日英同時通訳)

1.「 科学コミュニケーションの話を始める前に～これだけは押さえておきたい三つの視座～」

三上直之 (北海道大学高等教育推進機構・環境健康科学研究教育センター兼務)

2.「子ども・社会がより健康になるための、韓国におけるリスクコミュニケーション戦略」

Jonghan Leem (Department of Occupational & Environmental Medicine, Inha University Hospital, Korea)

3.「北海道に住む人々のよりよい生活環境を目指して～北海道スタディの成果から～」

伊藤佐智子 (北海道大学環境健康科学研究教育センター)

4.「科学コミュニケ―ションの技術：子宮頸癌ワクチンの受容が、英国・豪州・日本で異なるのは何故か」

Sharon J. B. Hanley（北海道大学大学院医学研究科・環境健康科学研究教育センター兼務）

5.「受け手からみた健康研究と成果発信～市民やジャーナリズムの視点から」

大島 寿美子（北星学園大学文学部 心理・応用コミュニケーション学科）

会場はこちら

学術交流会館（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	環境健康科学研究教育センター 特任教授 岸玲子
事前申し込み	必要（当日参加も受け付けます）（こちらから）
参加費	無料
問い合わせ先	環境健康科学研究教育センター荒木・高橋 E-mail: Aaraki[at]cehs.hokudai.ac.jp , mtakahashi[at]cehs.hokudai.ac.jp
URL	http://www.cehs.hokudai.ac.jp

実施報告

「環境と健康と科学コミュニケーション」のテーマのもと、近年の環境変化が人々、特に子どもの健康に与える影響を題材とした講演を行い、持続可能な社会に向けた、教育や科学コミュニケーションにおける課題について、諸外国の事例を交えて参加者様の知識を深め、ディスカッションを実施する機会とした。

1. 北海道大学 高等教育推進機構 三上 直之准教授「科学コミュニケーションの話を始める前に～これだけは押さえておきたい三つの視座～」
2. Inha University、Korea Jonghan Leem「子ども・社会がより健康になるための、韓国におけるリスクコミュニケーション戦略」
3. 環境健康科学研究教育センター伊藤 佐智子特任助教「北海道に住む人々のよりよい生活環境を目指して～北海道スタディの成果から～」
4. 北海道大学大学院 医学研究科 Sharon J. J. Hanley 特任助教「科学コミュニケーションの技術：子宮頸癌ワクチンの受容が、英国・豪州・日本で異なるのは何故か」
5. 北星学園大学 大島 寿美子教授「受け手からみた健康研究と成果発信～市民やジャーナリズムの視点から」

最初に三上直之准教授（北海道大学高等教育推進機構）が、リスク社会に生きる我々に今なぜコミュニケーションが必要か、コミュニケーションの目的の多様性、またコミュニケーションへのステークホルダーの参加が欠かせない点に関して講演した。次いで仁荷大学校のJonghan Leem 教授が、韓国における子どもの健康に関する問題とリスクコミュニケーションについて講演した。同じく子どもの研究に関して、伊藤佐知子特任助教（環境健康科学研究教育センター）が、環境化学物質曝露による影響に関する「環境と子どもの健康に関する北海道スタディ」の紹介と、研究結果に関して地域社会とのコミュニケーションのあり方について講演した。Sharon J. J. Hanley 特任助教（医学研究科）から、子宮頸癌ワクチン接種導入に当たり、イギリス政府が行った啓発・教育・リスクコミュニケーションの事例に関して、続いて大島 寿美子教授（北星学園大学）より、科学研究者による情報発信を、受け手である市民やメディアが理解を共有する重要性や手法について講演があった。続く、パネルディスカッションでは、フロアからの質問や意見を交え、司会の山内太郎教授（保健科学院）・田中俊逸教授（地球環境科学院）及び講演者による討論が行われた。研究成果発信に於いては、Leem 教授による発表にみられた①科学的証拠（エビデンス）の確立、②正直・率直な情報の開示、③政策決定の協力者としての国民参加の必要、④国民の不安の共有といった4つの科学コミュニケーション戦略に見習う点が多かった。最後に、北海道スタディ研究の代表者でもある岸副センター長から、これまでも参加者コミュニケーションとして継続的に行ってきたこと、今後北海道の地域のデータで世界に貢献していくことの重要性に関する発言があり閉会となった。
参加者のアンケートからは、「新たな視点を得た」「海外の事情を知ることができて有意義だった」「研究者が市民とのコミュニケーションに取り組んでいることを知ることができた」といったコメントが得られた。今後も引き続き科学コミュニケーションに関する討論の場を提供する意義を再認識するシンポジウムとなった。

三上准教授による講演

パネルディスカッションの様子

北大アフリカ研究会シンポ　アフリカで活躍する北大の研究者たちⅡ
～アフリカに展開する北大研究ネットワーク～

行事内容

開催日時	2014年11月18日（火）開場：15:00　開講：15:30　終了：17:30（終了しました）
主催者	北海道大学アフリカ研究会
共催	日本アフリカ学会北海道支部（2014年度第2回例会）
会場	工学部 A101 会議室
言語：日本語（通訳なし）	対象：一般市民・大学生・院生
行事概要	今まさに目覚ましい発展を遂げようとしているアフリカ。アフリカにおける持続可能な社会の構築は、まさにこれからの重要なトピックです。しかし、ひとたび現地に入れば、まだまだ貧困、政治、環境をはじめ様々な問題が山積し、しかもそれらは複雑に絡まりあっていることがわかります。アフリカのサステイナビリティを議論するには、分野横断的な学際的アプローチが求められます。北大では2012年4月、アフリカ研究に関わっている北大の研究者が集まり、北大アフリカ研究会（HURNAC）を立ち上げました。さまざまな専門をもつ北大研究者がネットワークを作り、アフリカの課題に取り組んでいます。本イベントでは、HURNACのメンバーがそれぞれのアフリカでの取り組みを多様な視点から紹介します。
北海道大学側の実施責任者	工学研究院 特任助教 牛島 健
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学大学院工学研究院 牛島 健 mail: uken@eng.hokudai.ac.jp
URL	http://aa.vetmed.hokudai.ac.jp/africa/

実施報告

目覚ましい発展を遂げようとしているアフリカ。しかし、ひとたび現地に入れば、まだまだ貧困、政治、環境をはじめ様々な問題が山積し、しかもそれらは複雑に絡まりあっていることがわかります。アフリカのサステイナビリティを議論するには、分野横断的な学際的アプローチが求められます。北大では2012年4月、アフリカ研究に関わっている北大の研究者が集まり、北大アフリカ研究会（HURNAC）を立ち上げました。さまざまな専門をもつ北大研究者がネットワークを作り、一筋縄ではいかないアフリカの課題に取り組もうとしています。本年度からは、日本アフリカ学会北海道支部との連携が実現し、本行事も共催となっています。
昨年に引き続き、第2 回となる本イベントでは、観光学高等研究センター、経済学研究科、保健科学院、獣医学研究科に属するメンバーが、アフリカでの取り組みをそれぞれの視点から紹介しました。多様な専門性からの話題・内容でしたが、どの講演者もわかりやすい言葉で伝える努力をしていましたので、十分に理解していただけたようです。参加者は合計25名で、そのうち学生7名を含む15名が学内関係者、10名が一般もしくは未記入でした。一般の中には、市民の方（7名）や JICA 関係者（1名）が含まれていました。
こじんまりとした雰囲気の中、通常の HURNAC 会合時のように突っ込んだ議論が、一般参加者といっしょに展開されたことは価値があると感じました。
アンケート（有効回答 21件）では、「あなたの今後の活動に有益となりそうですか？」の問いに対し、10名が「大変そう思う」、11名が「そう思う」と回答していて、参加者の満足度は高かったものと思われます。また、昨年度のアンケートで「アフリカ出身者（留学生など）による発表も聞くことができるとよい」という趣旨の意見を複数いただいていましたが、今回、経済学研究科に所属するコンゴ人学生の発表が実現したことも大きな成果でした。
今後とも、こうしたイベントを通じてHURNAC の取り組みを大学内外にアピールできるよう努めていきます。

西山徳明教授による発表の様子

大学改革シンポジウム　サステイナブルキャンパス国際シンポジウム 2014
サステイナブルキャンパス構築のための思想と実践－大学にとって「地域」とは－

行事内容

開催日時	2014年11月25(火)　開場：12:30　開講：13:00　終了：17:45（終了しました）
主催者	サステイナブルキャンパス推進本部
共催	一般社団法人 国立大学協会
後援	北海道, 札幌市, 一般社団法人　日本建築学会北海道支部
会場	学術交流会館 大講堂
言語：日本語・英語（同時通訳）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	サステナビリティ・ウィークの一環として行われるサステイナブルキャンパス国際シンポジウムは2011年から始まり、今回で4回目を迎えます。 昨年のシンポジウムでは、「地域と連携したサステイナブルキャンパスの構築」をテーマに、大学キャンパスの役割を地域計画の中でどう位置づけるかが主題となり, 本学札幌キャンパスは, 市街中心部において他との明解な境界を持つにも関わらず, 市民, 観光客との相互作用が起きやすい環境にあるとの指摘から, その“浸透膜”のような柔らかい境界を活かしたキャンパスづくりを目指すべきであるとの意見で議論が締めくくられました。 これを踏まえ, 今回は「サステイナブルキャンパス構築のための思想と実践－大学にとって地域とは－」をテーマに, なぜサステイナブルキャンパスが必要なのか, 諸外国において, 大学の地域連携はサステイナブルキャンパス構築の文脈の中でどのように位置づけられているのか, といった思想的・実践的話題について講演を行います。さらにその後のパネルディスカッションでは、北大にとっての「地域」を想起しながら, 地域連携のためにキャンパスがどのように活用できるか, その可能性を議論します。

会場はこちら

学術交流会館（クリックで拡大）

※駐車場はありませんので，公共交通機関のご利用をお願い致します。

北海道大学側の実施責任者	サステイナブルキャンパス推進本部 横山 隆
事前申し込み	必要（こちらから）
参加費	無料
問い合わせ先	サステイナブルキャンパス推進本部 E-mail:osc[at]osc.hokudai.ac.jp
URL	http://www.osc.hokudai.ac.jp/

実施報告

本シンポジウムは「サステイナブルキャンパス構築のための思想と実践ー大学にとって「地域」とはー」をテーマに開催しました。
最初に、京都大学経済学研究科の植田和弘教授の講演があり、Human development（人間発達）を促す場としての大学の役割を強調されました。特に、持続可能な社会の担い手育成には、地域との協働を含む社会的学習が不可欠であり、従来の大学キャンパスもそのための場として変化していく必要性を示されました。
続いて、ルクセンブルク大学アリアネ・ケニック博士は、そのような変化が、海外の大学でどのように起きているか、実際の例を交えた講演を行って下さいました。ルクセンブルク大学では、まさにHuman developmentを目指し、学生自らが太陽光発電組合のビジネスモデルを検証する等、地域課題に根差した教育プログラムの実践例を紹介して下さいました。
その後のパネルディスカッションでは、文部科学省大臣官房文教施設企画部計画課の森政之整備計画室長、札幌市の生島典明副市長、本学の吉見宏経済学研究科長らがパネリストとして加わり、地域連携のためにキャンパスがどのように活用されうるか、その可能性について議論しました。ブリティッシュコロンビア大学のCIRS（Center for Interactive Research on Sustainability）やルクセンブルク大のベルバル新キャンパスにおける計画手法が，海外のキャンパス計画・開発の事例として紹介されました。これらの事例は，さまざまなステークホルダーを巻き込んで計画の改善を行っているという点がこれからの日本のキャンパス計画・開発において新しい切り口となる可能性の示唆がありました。

ケニック教授による講演の様子

植田教授による講演の様子

集合写真

新しい農業生産のやり方 ―エコロジー農業の日仏交流―

行事内容

開催日時	2014年12月10日(水)　開始:14:00　終了:16:30 (終了しました)
主催者	札幌日仏協会 / アリアンス・フランセーズ札幌, フランス大使館,アンスティチュ・フランセ日本
共催	北海道大学農学研究院, 北海道大学国際本部
会場	農学部4階大講堂
言語:日仏同時通訳	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	気候変動を始めとする地球環境の変化は、農業生産のプロセスに決定的な変化をもたらしています。地域の特性に適し、環境に配慮しつつ、経済的に競争力を持つ農業システムとはどのようなものでしょうか。フランスと北海道における優れた事例にあたり、市民・専門家・大学関係者等さまざまな立場から共に考え、議論しましょう。 ※ 昨年の様子はこちら 【司会】 * 林美香子(北海道大学大学院農学研究院客員教授、 慶応義塾大学特任教授) 【ファシリテーター】 * 内田義崇(北海道大学大学院農学研究院助教) 【パネリスト】 * エティエンヌ・アンズラン(農学開発研究国際協力センター理事長顧問、オタワ大学客員教授) * エリック・ジリ(農業・農産加工政策及び国土総局農産加工戦略及び持続可能な発展部部長) * 小谷栄二(ファームエイジ株式会社代表取締役) * 前多幹夫(北海道十勝地区農協青年部協議会副会長) * 三谷朋弘(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター学術研究員) * 久田徳二(北海道大学大学院農学研究院客員教授、北海道新聞) 【参加予約】 https://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/application/

【PDFチラシ】

http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/upload/agriculture_flyer.pdf

事前申し込み	参加申込サイト からお申し込みください。 12月9日（火）まで受付。定員に達し次第締切ります。
参加費	無料
問い合わせ先	札幌アリアンス・フランセーズ 平岡智成 E-mail: bureau[at]afsapporo.jp ([at] を＠に置き換えて送信してください)

実施報告

エコロジー農業の今とこれからについて、政策的な視点および現場的な視点から幅広く議論するべく、フランスと日本・北海道のそれぞれにて最前線に立つ農業関係パネリストによる公開討論会を開催し、研究者、農業者、市民、学生を含む155名が参加しました。
フランスからは、農村環境の様々な変化等を中心に40カ国以上での研究経験を持つ農学者エティエンヌ・アンズラン氏と、国土総局にて持続可能な農業の実践を指揮されるエリック・ジリ氏をパネリストとしてお招きし、日本からは、電気柵等による革新的な放牧システムをはじめとするニュージーランドのローコスト・ファーミングの導入に長年取り組まれるファームエイジ株式会社 小谷栄二代表取締役と、現役の畑作農家である北海道十勝地区農協青年部協議会 前多幹夫副会長に加え、農学研究院の久田徳二客員教授、北方生物圏フィールド科学センターの三谷朋弘学術研究員がパネリストとして参加しました。
農学研究院 林美香子客員教授による司会進行と、同 内田義崇助教によるファシリテーションのもとパネルディスカッションが開始されました。
討論では、それぞれのスピーチを受けて、エコロジー農業の定義について、単独の農業技術ではなく農業生産に関する考え方の変化自体であることや、エコロジー農業を普及していくために必要な政策や消費者の理解などについて議論がなされました。
テーマとしては大きく以下の3つに分けて議論を行いました。1）日本とフランスにおける農業とエコロジー、2）新たな取り組み事例、3）有効な公共政策。
テーマ1ではエコロジー農業の定義について、単独の農業技術ではなく農業生産に関する考え方の変化自体であること等が議論されました。テーマ2では、エコロジー農業の取り組みの実態や日本における糞尿の有効利用などについて議論されました。テーマ3では、個々の農家や農家グループが、利用することの出来る政策や（フランス側）や消費者教育等についての議論がなされました。
最後の質疑応答では、時間一杯まで多くの質問が会場中から行なわれ、また、終了後においても来場者が個人的な質問をパネリストに直接行なっている様子がしばらく見受けられました。

スケジュール

ウェルカム・リマーク：北海道大学農学研究院教授（本討論会企画担当代表） 大崎 満
オープニング・リマーク ：フランス大使館経済部農務副参事官 ニコラ・ベルトレ
イントロダクション：北海道大学農学研究院 客員教授 林美香子

パネリストスピーチ（5分/人）
・フランス農業・農産加工業・林業省農業・農産加工業政策・国土総局
農産加工業戦略・持続可能開発部門長
エリック・ジリ
・オタワ大学 社会科学部 国際開発・グローバルスタディーズ大学院（研究科）客員教授
農業開発研究国際協力センター (CIRAD) 理事長顧問
エティエンヌ・アンズラン
・株式会社ファームエイジ代表取締役 小谷栄二
・北海道十勝地区農協青年部協議会 副会長 前多 幹夫
・北海道大学北方生物圏フィールド科学センター研究員 三谷 朋弘

討論

・ファシリテーター：北海道大学農学研究院 助教 内田義崇

・進行サポート：林美香子氏

会場からの質疑応答

クロージング・リマーク：内田義崇

質疑応答の様子

参加者の集合写真

日露共同で行なう教育プログラム開発プログラム
～極東・北極圏における持続的発展を未来へつなぐ～

行事内容

開催日時	12月19日（金） 開始：13:00　終了：17:15（終了時間が変更になりました）（終了しました）
主催者	RJE3 コンソーシアム国際運営委員会セントラル・オフィス
共催	北海道大学
後援	北海道、札幌市、札幌市教育委員会
会場	フロンティア応用科学研究棟
言語：日本語・ロシア語（同時通訳あり）	対象：専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する人材を育成すべく、数十年の共同研究実績を有する北海道大学とロシアの大学が協力して教育プログラムを開発します。環境評価、文化的多様性、土壌と生産、地域資源開発、防災管理に係る文理融合プログラムについて議論します。

プ|ロ|グ|ラ|ム

■ ご挨拶
13:00
北海道大学総長
山口 佳三

■ 基調講演 1
13:05–13:35
「極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する専門家育成プログラム」
(East Russia -Japan Expert Education Program (RJE3 program))
北海道大学副学長・RJE3プログラム事業推進責任者
望月 恒子

■ 基調講演 2
13:40–14:10
「ロシア太平洋地域：長期的視点で見た開発、国際共同のための地理学的・地政学的な強みと課題」
ロシア科学アカデミー極東支部太平洋地理学研究所長
パクラーノフ、ビョートル・ヤーコヴレヴィチ

■ パネルディスカッション
14:20–17:15
途中10分の休憩あり
【第一部】 RJE3に関係するパネリスト5名が、シンポジウムテーマについて「行政・経済界の交流の現状と実例」「大学交流を通じた人材育成」の観点から、各人15分程度のコメント。
【第二部】 北大に留学中（留学予定）のロシア人学生2名及びロシアに留学経験がある（留学予定の）北大日本人学生2名による簡単な研究紹介と、パネリストとの対談。

〈司会〉 北海道大学 アイヌ・先住民研究センター 加藤 博文 教授

〈パネリスト〉 北海道庁 経済部総務支部局 国際経済室 小玉 俊雲 室長
北海道銀行 国際部ロシア室 中川 文敏 調査役
在札幌サハリン州代表部 クトヴォイ、アンドレイ 代表
北海道大学 工学研究院 瀬戸口 剛 教授
北東連邦大学 ブリシヤズニ、ミハイル 副学長

岩波 遼 （北海道大学大学院理学院：動物考古学 博士後期課程2年）
岩渕 真由子 （北海道大学大学院文学研究科：日本史 修士課程1年）
パンコフ、オレグ （北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院：医療ツーリズム 研究生、サハリン国立大学出身）
ラヂレワ、アニシア （北東連邦大学経済学研究科：経済 修士2年相当）

事前申し込み	事前申込が必要です。こちら からお申し込みください。 （申込受付期間：11月17日～12月18日）
参加費	無料
問い合わせ先	北海道大学国際本部 サステナビリティ・ウィーク事務局 mail: RJE-3@oia.hokudai.ac.jp

実施報告

今年度採択された北大の世界展開力強化事業「極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する専門家育成プログラム（East Russian-Japan Expert Education Program, RJE3プログラム）」関連シンポジウムが開催されました。

本シンポジウムには、RJE3プログラムのロシア連携５大学である極東連邦大学、北東連邦大学、イルクーツク国立大学、サハリン国立大学、太平洋国立大学の学長・副学長・教員等15名を含む90名が参加しました。

始めに山口佳三総長から挨拶が行なわれ、当プログラム構想責任者である望月恒子副学長、および本学と長期にわたり様々な共同研究実績を持つロシア科学アカデミー極東支部太平洋地理学研究所のピョートル・バクラーノフ所長に基調講演をいただきました。望月副学長からは、RJE3プログラムで育成する人材のビジョンと体制、および本学の戦略との関係性などを含め概要についてお話いただきました。

バクラーノフ所長からは「ロシア太平洋地域：長期的視点で見た開発、国際共同のための地理学的・地政学的な強みと課題」として、本プログラムが対象とする地域における様々なデータを元に、その可能性と課題についてお話いただきました。

続くパネルディスカッション第一部では、本プログラムのコンセプトにご賛同いただいている日露の学術、産業、経済各界を代表する方々（北海道庁経済部経営支援局国際経済室 小玉俊宏室長、北海道銀行国際部ロシア室 中川文敏調査役、在北海道サハリン州政府代表部 クトヴォイ・アンドレイ代表、北東連邦大学 プリシヤズニ・ミハイル副学長、北海道大学工学研究院瀬戸口剛教授）にご登壇いただき、各人の経歴等とともにプログラムに対する期待や可能性についてお話いただきました。

パネルディスカッション第二部では、RJE3 に関連した研究を行う日露の学生（理学院博士二年：動物考古学専攻 岩波連さん、文学研究科修士一年：日本史専攻 岩渕真由子さん、国際広報メディア研究生：サハリン国立大学出身：医療ツーリズム専攻 オレグ・パンコフさん、北東連邦大学経済学研究科修士二年相当：経済学専攻 アニシア・ラザレワさん）による自己紹介の後、パネラー全員でディスカッションを行いました。育成される人材に求められること、これまでの交流と今後の展望、また学生の立場からの質問や希望等について、会場も巻き込みつつ活発な議論が行われました。

次回本学にて実施される2015年3月の基礎科目（試行）に向けて、関係者一同既に準備を進めているところです。

参加者集合写真

山口総長による開催挨拶

先住民文化遺産とツーリズム ―文化的景観と先住民遺産をめぐる諸問題―

行事内容

開催日時	2014年12月20日(土)～2014年12月21日(日)　(終了しました)
主催者	アイヌ・先住民研究センター
共催	観光学高等研究センター
後援	WAC-Japan(世界考古学会議京都大会実行委員会)
会場	学術交流会館 小講堂
言語:日本語・英語（逐次通訳）	対象:専門家・一般市民・大学生・院生
行事概要	人間の営みは、その生活する環境に大きな影響を及ぼしてきました。現在、私たちをとりまく景観にも、そこに生きた人々の様々な関与の痕跡が残されています。本シンポジウムでは、持続可能な資源管理の側面から近年注目を集めている先住民社会における景観利用について、スウェーデン、アメリカ北西海岸、旭川、平取、白老の事例を参照しながら広く議論します。また、先住民文化遺産の特質と、その保護・管理方法のあり方、そして地域資源として活かす可能性について検討します。 シンポジウムのポスターはこちらです

プログラム

12月20日(土) 13:00～17:00 (開場12:30)

「岩と水が創り出す文化的景観」

ニール・プライス(ウプサラ大学考古学部・教授、スウェーデン)カール＝ゴスタ・オジャラ(ウプサラ大学考古学部・講師、スウェーデン) 友田哲弘(旭川市教育委員会社会教育部・主査／旭川市博物館・学芸員) 吉原秀喜（平取町役場アイヌ施策推進課・主幹）

12月21日(日) 10:00～16:00 (開場 9:30)

「海と湖が創り出す文化的景観」

スヴェン・ハーカンソン(ワシントン大学バーク博物館人類学部・准教授、アメリカ)
リック・ネヒト(アバディーン大学考古学部・上級講師、イギリス)
八幡巴絵（アイヌ民族博物館・学芸員）

会場はこちら

学術交流会館（クリックで拡大）

北海道大学側の実施責任者	アイヌ・先住民センター教授　加藤 博文
事前申し込み	不要（直接会場へお越し下さい）
参加費	無料
問い合わせ先	アイヌ・先住民研究センター 岡田真弓 E-mail: m-okada[at]let.hokudai.ac.jp

実施報告

本シンポジウムは、「先住民文化遺産とツーリズム」というテーマで2012年から実施している国際シンポジウムの1つです。今年の副題は、「文化的景観と先住民遺産をめぐる諸問題」でした。
シンポジウムでは、持続可能な資源管理の側面から近年注目を集めている先住民社会における景観利用について、スウェーデン、アメリカ北西海岸、平取、旭川、白老の事例を参照しながら広く議論しました。また、先住民文化遺産の特質と、その保護・管理方法のあり方、そして地域資源として活かす可能性について、観光や地域おこしの側面からも検討を行いました。
講演者として、国内外において先住民族の文化的景観もしくは先住民族の考古学に携わる大学の研究者、博物館業務従事者、埋蔵文化財行政従事者の方々にご登壇いただきました。
スウェーデンのウプサラ大学の2名の研究者は、サーミと考古学あるいは考古学遺跡から読み取れる先住民の景観利用について講演されました。また、ワシントン大学バーク博物館およびアバディーン大学からの報告者には、アメリカ北西海岸で出土したネイティブ・アメリカンに関する考古学遺物などを活かした博物館活動についてご報告いただきました。
北海道の事例として、旭川市と平取町の埋蔵文化財行政従事者にご登壇いただき、地域内にあるアイヌ文化に関わる資源をどのように再発見し、継承していくかについてご発表いただきました。白老町のアイヌ民族博物館の学芸員の方からは、白老の景観にまつわる口承伝承をご紹介いただくとともに、自然と深く関わりを持ちながら発展してきたアイヌ文化の継承に関する博物館の取り組みをご報告いただきました。
最後には、講演者全員によるパネルディスカッションが行われ、アイヌや先住民の文化遺産を特徴づける景観や自然利用を、まさに現代および未来の課題として考えることの重要性が確認されました。

プライス教授による講演の様子

文化的景観をめぐる総合討論の様子

３. 実施報告

Hokkaido University

5th International ESD Symposium
Strategic ESD in the Next Generation

Report

北海道大学

第5回 ESD国際シンポジウム

次世代のESD戦略

報告書

Saturday, October 25, 2014
Sapporo, Japan
Hokkaido University Conference Hall

Hokkaido University Sustainability Weeks 2014
北海道大学 サステナビリティ・ウィーク2014

Hokkaido University

5th International ESD Symposium
Strategic ESD in the Next Generation

Report

北海道大学

第5回 ESD国際シンポジウム

次世代のESD戦略

報告書

Saturday, October 25, 2014
Sapporo, Japan
Hokkaido University Conference Hall

Hokkaido University Sustainability Weeks 2014
北海道大学 サステナビリティ・ウィーク2014

Contents
もくじ

Preface
はじめに 3

Session Time Schedule
タイムスケジュール 4

Report of Plenary Session
全体会の報告 6

Opening Address
開催挨拶 8

Symposium Background
趣旨説明 10

Keynote Speech 1
基調講演 12

Keynote Speech 2
主題講演 1 22

Keynote Speech 3
主題講演 2 28

Report of Parallel Session
分科会の報告

1. Outcomes and Prospects of ESD Campus Asia
1. ESD Campus Asia の成果と展望 34

2. Hokkaido UNESCO School Colloquium
2. 北海道 UNESCO スクール・コロキウム 50

3. ESD Student Forum
3. ESD 学生フォーラム 64

4. ESD based on Society-University Collaboration
4. 大学と地域社会が協力する ESD 80

Report of Wrap-up Session
総括セッションの報告 90

Preface

This report summarizes the discussions held at the 5th International ESD Symposium on Strategic ESD in the Next Generation on October 25, 2014. The symposium featured representatives from Hokkaido University's Faculty of Education, Faculty of Environmental Earth Science and Office of International Affairs, Korea University and Seoul National University (both in Republic of Korea), Chulalongkorn University in Thailand, Beijing Normal University in China, the Environmental Partnership Office Hokkaido within Japan's Ministry of the Environment, the Department of Environmental and Symbiotic Sciences within Rakuno Gakuen University's College of Agriculture, Food and Environment Sciences, and the Hokkaido University ESD Student Forum Organizing Committee.

The symposium was held in the final year of the UN Decade of Education for Sustainable Development (DESD) to provide a platform for a review of 10 years of ESD promotion and discussions on the future of education. The event attracted a total of 165 attendees consisting of 97 audience members and 68 online viewers of the Plenary Session broadcast live on the Internet.

The symposium organizer hopes that the report will help people who were not present to share in the discussions held at the event, and that this will support accurate assessment for the current situation of ESD promotion in Hokkaido and Asia as well as future ESD prospects.

はじめに

本報告書は北海道大学大学院教育学研究院、地球環境科学研究院、国際本部、韓国・高麗大学校、同・ソウル大学校、タイ・チュラロンコン大学、中国・北京師範大学、環境省北海道パートナーシップオフィス、酪農学園大学農食環境学群環境共生学類、ESD 学生フォーラム実行委員会によって平成 26 年 10 月 25 日に開催された第 5 回 ESD 国際シンポジウム「次世代の ESD 戦略」での議論内容をまとめたものです。

本シンポジウムは国連「持続可能な開発のための教育の 10 年 (Decade of Education for Sustainable Development: DESD)」が最終年を迎えるにあたり、ESD 推進の 10 年間を振り返り、教育の未来を議論するべく開催され、来場参加 97 名と、インターネットによって生中継された全体会へのオンライン参加 68 名の合計 165 名の参加がありました。

当該シンポジウムでの議論内容を共有し、参加ができなかった方々にも、北海道およびアジア地域における ESD 推進の現状理解と将来展望の一助として本報告書を活用いただければ幸いです。

13:00- Plenary Session (languages: Japanese and English with simultaneous interpretation)

13:00 Opening Address, Symposium Background

Ichiro Uyeda
Executive and Vice President, Hokkaido University
Chairperson, the Committee for Sustainability Weeks 2014
Toru Onai
Dean, Faculty of Education, Hokkaido University

13:10 Keynote Speech 1: Reflections on the United Nation Decade of ESD

Mario T. Tabucanon
Visiting Professor
United Nations University Institute for the Advanced Study of Sustainability

14:00 Keynote Speech 2: Future Prospects for ESD

Yong Jin Hahn
Dean, Faculty of Education, Korea University

14:45 Keynote Speech 3: Reconstruction of ESD

Akito Kawaguchi
Professor, Faculty of Education, Hokkaido University

15:30 Coffee Break

16:00- Parallel Session

1) Outcomes and Prospects of ESD Campus Asia (language: English)

Co-host Korea University (Republic of Korea), Seoul National University (Republic of Korea), Chulalongkorn University (Thailand), Beijing Normal University (China), Hokkaido University

2) Hokkaido UNESCO School Colloquium (language: Japanese)

Host Faculty of Education, Hokkaido University

3) ESD Student Forum (languages: Japanese and English with simultaneous interpretation)

Host Hokkaido University ESD Student Forum Organizing Committee

4) ESD based on Society-University Collaboration (language: Japanese)

Co-host Ministry of the Environment's Environmental Partnership Office Hokkaido, Faculty of Environmental Earth Sceince, Hokkaido University, Rakuno Gakuen University College of Agriculture, Food and Environmental Sciences

18:00 -18:30 Wrap-up Session (languages: Japanese and English with simultaneous interpretation)

13:00〜　全体会（言語: 日英同時通訳）

13:00 開催挨拶／趣旨説明

上田一郎（北海道大学 理事・副学長／サステナビリティ・ウィーク2014実行委員長）
小内透（北海道大学 教育学研究院長）

13:10 基調講演: ESD10年の総括

マリオ タブカノン（国際連合大学高等研究所 客員教授）

14:00 主題講演1: ESDの将来展望

韓 龍震（高麗大学校 師範大学長）

14:45 主題講演2: ESDの再構築

河口 明人（北海道大学教育学研究院 教授）

15:30 コーヒーブレイク

16:00〜　分科会

① ESD Campus Asiaの成果と展望（言語: 英語）

共催　高麗大学校（韓国）、ソウル大学校（韓国）、チュラロンコン大学（タイ）、北京師範大学（中国）、北海道大学

② 北海道UNESCOスクール・コロキウム（言語: 日本語）

主催　北海道大学教育学研究院

③ ESD学生フォーラム（言語: 日英同時通訳）

主催　北海道大学 ESD学生フォーラム実行委員会

④ 大学と地域社会が協力するESD（言語: 日本語）

共催　環境省北海道環境パートナーシップオフィス、北海道大学地球環境科学研究院、酪農学園大学農食環境学群環境共生学類

18:00〜18:30　総括（言語: 日英同時通訳）

Report of Plenary Session

By Akito Kawaguchi, Professor, Faculty of Education, Hokkaido University

Amid the ongoing globalization of environmental, social and economic sustainability issues and in the final year of the UN Decade of Education for Sustainable Development (DESD), attendees of the 5th International ESD Symposium summarized the DESD and discussed future ESD prospects prior to the UNESCO World Conference on ESD scheduled to take place later in the year.

Visiting Professor Tabucanon of the United Nations University Institute for the Advanced Study of Sustainability, who has played an essential role in the DESD campaign, gave a presentation titled Reflections on the United Nations Decade of ESD. He highlighted how the DESD has provided numerous outstanding examples and programs of community-based ESD, enhanced public recognition of SD, and steadily improved environments surrounding ESD. He also underlined the significance of the Promotion of Sustainability in Postgraduate Education and Research Network (ProSPER.Net), in which HU has played a leading role, in efforts to strengthen global ESD networks. UNESCO's Global Action Programme on ESD was highlighted as a future priority along with the need to strengthen environmental learning, educator capacity, the authority of young people, community activities and other areas.

Speaking on the theme of Future Prospects for ESD, Prof. Yong Jin Hahn (Dean of the Graduate School of Education at Korea University) outlined Foundationism as a concept by which character is built through efforts to harmonize tradition with reform. The presentation was based on his critical analysis of today's situation, in which growth is observed in a variety of social gaps. He also stressed that the ESD's aim of further harmonization for the freedom of those involved, social order and the consciousness of historical time will serve as guidelines in the shaping of tomorrow's society and education.

The last keynote speech was given by Prof. Kawaguchi of HU, who has been involved in the implementation of the ESD Campus Asia Project along with other leading universities in Asia. Under the theme of Reconstruction of ESD, he stressed the importance of cultivating broad-thinking ability to overcome areas where short-sightedness affects individual branches of science and developing the capability to systematize enormous amounts of scientific knowledge as a focus of ESD in the next generation. This approach is intended to help people examine and critically assimilate modernist concepts that control the behavior of people today, such as individualism, economic rationalism and scientific rationalism, in consideration of points for the improvement of educational institutions in their role as providers of individuals capable of supporting sustainability crisis resolution.

All speakers commonly viewed ESD as a form of education that encourages students to consider global issues regardless of national interests as global citizens and global human resources. The presenters also shared the opinion that ESD will represent a continuous type of educational reform that is increasingly required worldwide in the mainstream of education to ensure sound sustainability.

報告者：北海道大学大学院教育学研究院教授　河口　明人

持続性にかかわる環境、社会、経済的諸課題がますますグローバル化する中、国連のDESDが最終年を迎えるに際し、本国際シンポジウムは、ユネスコ世界会議に先立って、この10年のDESDの総括と、今後のESDの展望について議論した。

DESDに重要な役割を果たしてきた国連大学のTabucanon教授は「DESDの10年の総括」として、DESDが地域に根ざした多くの優れたESD実践例やプログラムを提供してきたこと、SDへの周知とESDへの環境整備が着実に進んだこと、さらに北大が主導的役割を果たすProSPER.Netが世界的レベルでのネットワークの強化に果たした意義を総括した。その上に立って今後の活動としてユネスコが掲げるグローバルアクションプログラム（GAP）の政策、環境学習、教育者の力量、若者の権限、地域活動などの一連の強化が、優先事項として紹介された。

高麗大学校・師範大学長の韓教授は「持続可能発展教育の展望」と題して、多様な社会格差が拡大する現状の批判的分析を基に、伝統と改革の調和によって新たな人間形成を目指す「基礎主義」を紹介しながら、主体の自由、秩序ある社会、歴史的時間意識の一層の調和を目指すESDが次世代の社会形成と教育の指針であることを説明した。

最後にアジアの有力大学とともにESDキャンパスアジアプロジェクトを実践してきた北大の河口教授は、「ESDの再構築」と題して、多様な人材の供給という点で持続性の危機にも貢献してきた教育機関の反省点を踏まえ、現代人の行動を律する個人主義、経済合理主義、科学的合理主義などの近代精神の歴史的反省を振り返りながら、それらを批判的に継承するため、次世代のESDの焦点として、近視眼的な個別科学を超克すべき俯瞰的思考能力の涵養と膨大な科学的知見を体系化する能力の開発が、次世代のESDには重要であることを強調した。

ESDは、国家利益を超えたグローバルな課題を、世界市民（グローバル人材）として考察する教育であり、健全な持続性を保障するために、今後ますます世界的に要請される間断なき教育の革新であり、また教育の主潮流であることが全演者の共通の認識であった。

Ichiro Uyeda
Executive and Vice President, Hokkaido University
Chairperson, Committee of Sustainability Weeks 2014

[Transcription]

Ladies and gentlemen, and distinguished guests from Asia. On the opening of the International ESD Symposium, I would like to give a brief address. It is a great honor for us that such a special occasion to discuss the future of education is held here in Hokkaido University this year, the final year of UNESCO "Decade of Education for Sustainable Development" which is known as DESD.

Hokkaido University announced its international strategy called “Hokkaido University Initiative for Sustainable Development” in 2005 when DESD began. 10 years ago, the University declared it would accelerate education and research in order to realize a sustainable society.

In the last 10 years, a number of educational programs, research projects and social contribution activities have been launched in accordance with the theme of “Sustainability”. I will give you a number which represents the multitude of those activities.

If you carry out a word search within the website of Hokkaido University typing 4 key words, “Sustainable” and “Sustainability” in both Japanese and English, you will receive 35,860 search results in total, including webpages in either language. Those include an introduction page of educational programs, an announcement of symposiums, various kinds of information such as research papers, and information in multiple disciplines.

Among the number of “Sustainability” initiatives, this symposium and an education program “ESD Campus Asia”, which is a foundation of this symposium, are particularly unique and valuable projects. This is because they are initiatives to collectively develop better programs in collaboration with universities in Asia, academics, students as well as local regions in order to seek a better quality of education in a more tailored and localized way and specific to Asia. These are initiatives to aim high quality education that only we can deliver, and that can only be achieved by collaboration among those of us who are here.

This symposium is held as an expanded version of the ESD international symposium which has been organized by HU’s Faculty of Education over the past four years. This year’s theme is “Strategic ESD in the Next Generation”.
From 2015, the United Nations initiates the “Global Action Programme on ESD”, and the field of education in the world is entering a new phase. With an eye toward the major milestone of its 150th anniversary in 2026, Hokkaido University will also work earnestly on university reform with a vision of “Hokkaido University contributing towards the resolution of global issues”.

As we usher in a new era, I hope that this symposium will provide the energy for us to take the next steps forward and create new collaborative relationships among participants.
Thank you very much for your attention.

上田　一郎
北海道大学
理事・副学長
サステナビリティ・ウィーク2014実行委員長

[採　録]

お集まりの皆様、ESD国際シンポジウムの開会にあたり一言、ご挨拶を差し上げます。国連「持続可能な開発のための教育の10年」、通称DESDが最終年を迎える今年、教育の未来を議論する貴重な機会を北海道大学で開催できることに大きな喜びを感じます。北海道大学は、DESDが始まった2005年にHokkaido University Initiative for Sustainable Developmentという国際戦略を発表しました。10年前に北海道大学は、持続可能な社会を実現する教育研究を加速すると宣言したのです。

そして、この10年間にSustainabilityというテーマに則した教育プログラムや研究プロジェクトそして社会貢献活動が数多く産まれました。その多さを推し量る一つの数字をご紹介します。北海道大学のウェブサイトでキーワード検索を、英語でSustainableとSustainability、日本語で「持続可能な」と「持続可能性」の4つの単語で行うと、日英合計で35,860件のウェブページがヒットします。これらは、教育プログラムの紹介ページや、シンポジウムの開催案内、研究論文など様々な類の情報であると共に、あらゆる学問分野の情報でもあります。

そのような数多くのSustainabilityの取り組みの中で、本シンポジウムならびに本シンポジウムの基盤となっている教育プログラム「ESD Campus Asia」は、ユニークで価値ある取組です。その理由は、我々が位置するアジアという地域で行うのに最もふさわしい教育の在り方をアジアの大学、教員、学生、そして地域が協働で模索し、よりよいプログラムを協働で開発していく取り組みだからです。ここにいる皆さんと協働するからこそ可能な教育、我々でしかできない質の高い教育を目指す取り組みだからです。

本シンポジウムは、過去4年間にわたり教育学研究院が主催してきたESD国際シンポジウムを拡大して開催するものです。今回のテーマは「次世代のESD戦略」です。

2015年から国連ではGlobal Action Programme on ESDが開始され、世界の教育界は新たな局面を迎えます。さらに北海道大学は、2026年に迎える創基150年という大きな節目を見据え「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」というビジョンを掲げ、大学改革に本格的に取り組みます。新しい時代に向け本シンポジウムが、教育に従事する人々の間に新たな協働のつながりと、次なる一歩を踏み出すエネルギーを生み出すよう願っています。ご清聴ありがとうございました。

Toru Onai
Dean, Faculty of Education, Hokkaido University

[Transcription]

Hokkaido University's Faculty of Education has so far organized four International ESD Symposiums with representatives of Asian universities to focus on current global challenges and discuss, from an Asian perspective, the educational roles that universities should play to ensure the sound sustainability of human society and the global environment.

Past symposiums have provided opportunities to reassess ESD, which tends to be seen simply as a type of environmental education, and have acted as platforms for discussions highlighting ESD's future role in the development of a broad range of abilities needed to resolve issues in modern society that have varied causes and backgrounds.

The 5th International ESD Symposium will focus on the future of education based on the main theme of Strategic ESD in the Next Generation, as this is the final year of the UN Decade of Education for Sustainable Development. With an eye on the future beyond the boundaries of individual universities and nations, the event will provide opportunities to explore the form of human resource cultivation for the next generation and the related roles of universities from different perspectives and on different scales – from the past to the future and from regional considerations to Asian matters.

Presently, both Japanese society and the international community are in a historic period of profound change on an unforeseen scale. In this regard, ESD has a primary role to play in overcoming current crises in society, and universities are responsible for spearheading related efforts. I hope this symposium will inspire fresh ideas and support the development of new connections among parties seeking to build a better society through education.

小内　透

北海道大学
教育学研究院長

[採　録]

現代が直面するグローバルな課題をとりあげ、人間社会とそれを取り巻く地球環境の健全な持続性のために、大学が果たすべき教育的役割とは何かをアジアの規模で議論すべく、本部局が主幹となり、アジアの各大学を招き、過去4回に渡りESD国際シンポジウムを開催してきました。

これまでのシンポジウムでは、単なる環境教育として把握されてしまいがちなESDを見つめ直し、さまざまな原因や背景を持つ現代社会の課題解決に必要な俯瞰的能力の涵養こそが、これからのESDが果たすべき役割であると議論してきました。

5回目となる今回のESD国際シンポジウムでは、本年が国連「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」の最終年であることもふまえ、「次世代のESD戦略」をメイン・テーマとし、教育の未来に焦点を当てることにしました。個別の大学や国家の枠を超えた展望の中で、次世代の人材育成のかたちとはどのようなものか、そのなかで大学はどうあるべきかを、過去から未来、地域からアジアへと、さまざまな視点とスケールから探ります。

いま、日本の社会も世界の動向も、これまで考えられなかったような大きな変化と、歴史的変革期を迎えています。現代社会の危機を克服してゆくには、教育（ESD）が第一義的な役割を持っており、それを率先して導いていく責任が大学にはあります。本シンポジウムが、教育によってより良い社会の実現を目指すあらゆる方々に、新しいアイデアと新しいつながりをもたらすことを願っています。

Reflections on the United Nations Decade of Education for Sustainable Development

Mario T. Tabucanon

Visiting Professor
United Nations University Institute for the Advanced Study of Sustainability

Abstract:

The UN Decade of Education for Sustainable Development (DESD) comes to an end and the global education sector reflects on the achievements and lessons learned, as well as on the challenges and ways forward. Reflections are based on achievements with respect to the goals of the UN DESD in the pursuit of its vision to create a world where everyone has the opportunity to benefit from education and learn the values, behaviors and lifestyles required for a sustainable future and for a positive societal transformation. Reflections are based on the various reports made available by UNESCO, as well as from the relevant experiences of the United Nations University Institute for the Advanced Study of Sustainability in carrying out its ESD programme. Many efforts have been made that produced significant advances during the Decade; these need to be up-scaled moving forward into the implementation of the Global Action Programme on ESD.

Profile:

Dr. Mario T. Tabucanon is Visiting Professor at the United Nations University Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS) and Emeritus Professor at the Asian Institute of Technology (AIT) in Thailand. At UNU-IAS, he is affiliated with the Education for Sustainable Development Programme involved in the promotion of Regional Centres of Expertise on ESD and in the alliance of higher education institutions in the Asia-Pacific region known as the Promotion of Sustainability in Postgraduate Education and Research Network (ProSPER.Net) under the auspices of UNU-IAS. He is also involved in various capacity building initiatives of UNU-IAS including the annual offering of the ASEAN-plus-Three Leadership Programme on Sustainable Production and Consumption. At AIT, before joining UNU-IAS, he served in senior administrative positions including provost and president.

ESD 10年の総括

マリオ タブカノン

国際連合大学高等研究所
客員教授

要 旨

国連持続可能な開発のための教育の10年（DESD）が終わりを迎え、世界の教育部門はその成果と学んだことを振り返り、この先の課題や進むべき道を検討している。その省察は、誰もが教育の機会を得て、持続可能な未来の実現や好ましい社会の変革に必要な価値観、行動、生活様式を学ぶことができる社会の創造というビジョン、それを追求する国連DESDの目標についての成果に基づいている。そしてユネスコによって入手可能となった様々なレポート、国連大学サステナビリティ高等研究所でのESDプログラム実施における経験に基づいている。この10年に多くの取り組みが行われ大きな進展が見られた。しかしESDに関するグローバル・アクション・プログラムの実施に向けてさらなる取り組みの強化が必要とされる。

略 歴

マリオ・タブカノン博士は、国連大学サステナビリティ高等研究所（UNU-IAS）の客員教授であり、タイにあるアジア工科大学院（AIT）の名誉教授である。高等研究所では、持続可能な開発のための教育プログラムにおいてESDに関する地域拠点づくりに取り組み、高等研究所が主導するアジア太平洋地域の高等教育機関連合であるアジア太平洋環境大学院ネットワーク（ProsPER Net: プロスパーネット）にも関与している。また毎年、持続可能な生産と消費に関するASEANプラス3リーダーシッププログラムの提供を行うなど、高等研究所の能力開発活動にも関わっている。高等研究所の前の勤務先であるアジア工科大学院では、学部長や学長などの上級管理職を務めた。

Reflections on the United Nations Decade of Education for Sustainable Development
ESD 10 年の総括

UNITED NATIONS UNIVERSITY
UNU-IAS
Institute for the Advanced Study of Sustainability

Reflections on the United Nations Decade of Education for Sustainable Development

Mario T. Tabucanon
Visiting Professor
United Nations University
Institute for the Advanced Study of Sustainability

1

Outline

- UNDESD
- Some Key Findings – Based on UNESCO Reports
- UNDESD Perspectives of UNU-IAS
- ESD in Asia-Pacific – Some Findings
- Global Action Programme on ESD

2

UN Decade of Education for Sustainable Development (UNDESD) 2005-2014

- Proposed in Johannesburg Plan of Implementation in 2002
- Adopted by UN General Assembly in December 2002
- The International Implementation Scheme (IIS) for DESD was approved in September 2005
- Vision: **"A world where everyone has the opportunity to benefit from education and learn the values, behaviors, and lifestyles required for a sustainable future and for positive societal transformation"**
- Governments are invited to consider the measures to implement DESD in their educational strategies and action plans.

3

Major Thrusts of ESD Under DESD

- **Improve access to quality basic education;**
- **Reorient existing education programmes to address sustainable development;**
- **Develop public understanding and awareness on sustainable development; and**
- **Provide training programmes for all sectors of private and civil society.**

4

Education for Sustainable Development (ESD)

Three Pillars of Sustainable Development

- **Society – an understanding of social institutions and their role in change and development**
- **Environment – an awareness of natural resources and the fragility of the physical environment**
- **Economy – a sensitivity to the limits and potential of economic growth and its impact on society and on the environment**

➢ **With Culture – ways of behaving, believing, and acting which differ according to context, history and tradition -- as an underlying and critical dimension**

5

5

Education for Sustainable Development

- ✓ ***Education today does not sufficiently prepare learners to contribute to sustainable development.***
- ✓ ***Themes like climate change or biodiversity need to be integrated into teaching and learning.***
- ✓ ***Teaching and learning needs to be designed in a participatory, learner-centred way.***

6

Education for Sustainable Development

- **Education that enables people to foresee, face up to and solve the problems that threaten life on our planet.**
- **- Education that disseminates the values and principles that are the basis of sustainable development (intergenerational equity, gender parity, social tolerance, poverty reduction, environmental protection and restoration, natural resource conservation, and just and peaceful societies).**
- **- Education that highlights the complexity and interdependence of three spheres, the environment, society – broadly defined to include culture – and the economy.**

7

Key Characteristics of ESD

- **Interdisciplinary and holistic**
- **Values-driven**
- **Focused on critical thinking and problem solving**
- **Multi-methodological**
- **Participatory in decision-making**
- **Locally relevant**

8

8

Leadership for SD and the Change Process

- Visioning
  - Global Vision on SD
  - Translate Global Vision to National/Local Vision
- Communicating
  - Communicate vision/strategy/values/etc. so that people understand how their work contributes to a larger whole.
  - 'Get the message out'
- Challenging
  - Challenge status quo, unsustainable practices, barriers, constraints

9

- Inspiring
  - Inspire stakeholders to work to achieve goals
- Developing capacities of people
  - Education and training; competencies development; ESD
- Motivating people to want to follow
  - Relate personal, organizational and community goals
- Having a Plan
  - To do, check, act, assess, adjust

10

UNESCO and ESD – 'what we do'

- Advocate for ESD at the international level
  - Ensured the presence of ESD at Rio+20
  - Contribute to post-2015 consultations
- Provide support to Member States in reorienting education
  - Climate Change Education country programmes
  - Guidance tool on Disaster Risk Reduction in curricula
  - Learning materials on biodiversity
- Coordinate the UN Decade of ESD and prepare for its follow-up

11

Engaging in International Processes

UN Inter-Agency Committee for Decade of ESD (DESD)

Forum of UN Agencies collaborating towards effective implementation of the Decade
Lead Agency: UNESCO
19 UN Agencies: UNESCO, UNEP, UN-Habitat, UNICEF, UNU, FAO, ILO, UNAIDS, UNCCD, UNDP, UNFCCC, UNFPA, UNHCR, UNDESA, SCBD, WFP, WHO, World Bank and WTO
Activities: Exchange information, organize public events, and contribute to global sustainability processes such as CSD, CBD, Rio+20 and UNFCCC

12

12

UNESCO Reports on UN DESD

- UNESCO has been publishing reports on UN DESD
  - 2007 (The First Two Years)
  - 2009 (Mid-Decade; Bonn Declaration)
  - 2012 (Progress; Focusing of processes & learning in the context of ESD)
  - 2014 (End-of-Decade, pending release)

13

2007 Key Findings

- DESD launches held at regional and national levels accompanied by regional/national planning frameworks and action plans
- Developed national strategies; established national DESD committees
- Put in place, at various levels, the mechanisms to facilitate and guide the implementation of DESD

14

2009 Key Findings

- Countries have made progress in implementing ESD and have designed innovative policy frameworks
- Effort towards better understanding, promotion, implementation and assessment of the quality of ESD underway; a global M&E framework designed
- Learning to improve links between formal, non-formal and informal education

15

2009 Key Findings (continued)

- Science has provided better knowledge of climate change (and other critical issues) and the Earth's life support systems
- Knowledge put into action

16

2012 Key Findings

- ESD emerging as the unifying theme for many types of education related to sustainability (e.g. climate change, disaster risk reduction, biodiversity, etc.)
- ESD increasingly perceived as a catalyst for innovation in education
- ESD is often at the heart of new, creative multi-stakeholder configurations blurring boundaries between schools, universities, communities and the private sector

17

2012 Key Findings (continued)

- As ESD progresses, a co-evolution of pedagogy is occurring; as sustainability content of curricula evolve, pedagogy is evolving simultaneously
- More research is needed to document that ESD is quality education
- Within the UN system, ESD's role is much bigger than it was up to two years before

18

Where do we stand?

"We resolve to promote education for sustainable development … beyond the United Nations Decade of Education for Sustainable Development."

- ✓ ***Increased presence of ESD internationally and nationally.***
- ✓ ***Major challenges:***
  - from pilot to policy
  - from small scale to large scale
  - from margin to mainstream
- ✓ ***A Global Action Programme to scale up ESD.***

19

Engaging in International Processes

Conferences/Seminars

Multistakeholder Learning towards Green Society
15 June 2012
UNU-IAS, Ministry of the Environment, Japan

Aiming Higher, Unlocking Tertiary Education's Potential to Accelerate Sustainable Development and the Transition to a Fair and Green Economy
18 June 2012
15 organizing partners

Higher Education Sustainability Initiative
19 June 2012
UN ECOSOC, UNESCO, UNEP, UN Global Compact, UN-PRME, UNU

UN Multi-stakeholder Strategies for Scaling-up and Mainstreaming Sustainable Development
21 June 2012
UNICEF, UNDP, UNESCO, UNU-IAS

20

Engaging in International Processes

Higher Education Sustainability Initiative

Rio +20 Commitment to Sustainable Practices of Higher Education Institutions

Higher education institution signatories commit to:

1) Teach sustainable development concepts, ensuring that they form a part of the core curriculum across all disciplines.
2) Encourage research on sustainable development issues, to improve scientific understanding through exchanges of scientific and technological knowledge.
3) Green their campuses by: i) reducing the environmental footprint; ii) adopting sustainable procurement practices; iii) providing sustainable mobility options for students and faculty; iv) adopting effective programmes for waste minimization, recycling and reuse, and v) encouraging more sustainable lifestyles.
4) Support sustainability efforts in the communities in which they reside.

21

21

2014 Key Findings

- Expected to be highlighted at the World ESD Conference in Nagoya.
- Some Findings from the "Education for a Sustainable Future: UNESCO Asia-Pacific Regional Consultation on Post-DESD Framework", Bangkok, 2013

ESD Successes (for up-scaling)

- Initiatives related to the environmental dimension of ESD, especially integration of climate change and EE into various levels of education

22

ESD Successes (continued)

- Initiatives related to ESD's economic dimension (green economics, green growth, sufficiency economy), and socio-cultural dimension
- Pedagogical approaches supportive of ESD

23

From the Perspective of UNU-IAS

24

Education for Sustainable Development Programme
UNU-IAS, Japan

UNU strategy to implement ESD within the framework of the UN Decade of ESD (2005-2014)

Two main initiatives:

Regional Centres of Expertise on ESD (129 RCEs in the world)

ProSPER.Net – Promotion of Sustainability in Postgraduate Education and Research Network (regional network for Asia-Pacific, 32 member universities and collaborations with other networks)

ProSPER.Net

25

UNITED NATIONS UNIVERSITY
UNU-IAS

Progress of the Global RCE Network and Activities

UNU Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS)

26

UNU-IAS ESD Programme

- Launched in 2003 as UNU's response to the UN Decade of Education for Sustainable Development (DESD: 2005-2014) with the support of the Ministry of the Environment of Japan
- In 2014, the former UNU-ISP (UNU Institute of Sustainability and Peace) and UNU-IAS (UNU Institute of Advanced Studies) has merged and become UNU Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS)
- 4 Goals of ESD Programme
  - ✓ Advancing ESD through multi-stakeholder Initiative (RCEs)
  - ✓ Contribution of transformation of higher education (ProSPER.Net)
  - ✓ Contribution to international SD/ESD processes
  - ✓ Advancing ESD knowledge

27

27

UNU-IAS ESD Programme

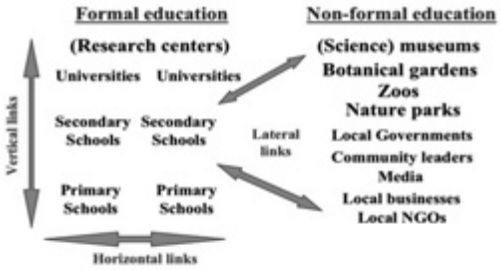
Regional Centres of Expertise on ESD (RCE)

- Proposed by UNU as its contribution to DESD in 2004
- A network of formal, non-formal and informal education and learning-related institutions who are mobilized to promote ESD in regional (sub-national) and local levels
- RCEs aspire to achieve the goals of DESD by translating its global objectives into the regional-local contexts in which they operate.
- Acknowledged by UNU based on the recommendations of the Ubuntu Committee of Peers for the RCEs

28

28

Structure of RCEs



29

29

Functions of RCEs

- Build innovative platforms to share information and experiences and to promote dialogue among local/regional stakeholders through partnerships for Sustainable Development
- Create a local/regional knowledge base to support ESD actors
- Promote 4 major goals of ESD in a resource-effective manner
  1) Re-orient education towards SD
  2) Increase access to quality education
  3) Deliver trainers' training programmes
  4) Lead advocacy and awareness raising efforts

30

30

Development of the RCE Network

Global Network:

- 129 RCEs worldwide
  - Asia-Pacific: 47
  - Europe: 37
  - Africa and Middle East: 26
  - Americas: 19

- The Global RCE Conference is organized annually since 2006.
- 9th Global RCE Conference will be held from **4-7 November 2014 in Okayama, Japan**.
  - → one of the official 'Stakeholder Meetings' of the UNESCO World Conference on ESD (10-12 November)

31

31

Development of the RCE Network

2003 Establishment of ESD Programme at UNU-IAS
2004 Development of the RCE Concept

DESD Launch
Framework for the UNDESD International Implementation Scheme
Annual Global RCE Conference since 2006

Mid-Decade Year
UNESCO World Conference on ESD (Bonn, Germany)

End of the DESD
UNESCO World Conference on ESD (Aichi-Nagoya)

Launch of Global Action Programme on ESD (tbc)

8th International RCE Conference (Nairobi, Kenya)
9th International RCE Conference (Okayama, Japan)

2007 Emergence of continental networks
2008 Emergence of thematic & strategic networks

- Assessment of RCEs/ Engagement with International SD/ESD processes
- Strong emphasis on capacity development

7	47	74	99	120	127
2005	2007	2009	2011	2013	2014 and Beyond

Number in Red: Number of RCEs Acknowledged by UNU

32

The Global RCE Network

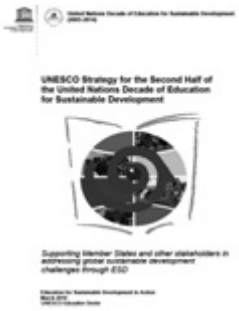
33

UNESCO's Mid-Decade Review Report (November 2009)recognizes RCE as a structure in informal & non-formal education (p. 56).

"The networked Regional Centres of Expertise, supported by UNU-IAS, may serve as an example of how different local groups in society, who do not ordinarily work together but are bound by mutual sustainability issues, find themselves working creatively towards their improvement."

34

34



UNESCO Strategy for the Second Half of DESD
(March 2010)

p.8, A (a)
As a strategy tostrengthen partnerships among ESD stakeholders,the report suggests enhancing cooperation with other UN entities, including UNU

p.12, C (a)
As a strategy togenerate knowledge, share new approaches and enhance evidence-based policy dialogue,the report suggests cooperating with UNU in the framework of RCEs

35

35

About ProSPER.Net

ProSPER.Net

- UNU-IAS ESD Programme contribution to transform Higher Education
- **ProSPER.Net: Pro**motion of **S**ustainability in **P**ostgraduate **E**ducation and **R**esearch
- Network of Higher Education Institutions in Asia and the Pacific Region committed to integrate Sustainable Development (SD) into postgraduate courses and curricula
- Established in 2008
- Currently 32 members

36

Joint Projects

ProSPER.Net

Inter-university completed projects:

- Postgraduate programme in **public policy** and sustainable development (led by TERI)
- Innovative pedagogies for **poverty reduction** (led by AIT)
- **Faculty training** on sustainable development (led by USM)
- Educational programme for SD of regional society with a focus on **biodiversity** (led by Yokohama National University)
- Integrating sustainability education into **engineering and built environment** curriculum (led by RMIT University)

Ongoing project:

- Biodiversity and climate change in **business sustainability education** (led by AIT)

Projects in final stage:

- SUSTAIN – SUStainability Tool for Academic INstitutions (led by Hokkaido University)
- Case studies on **Sustainable Consumption and Production** (led by USM)

Upcoming project:

- **Health** and Food Traditions of Asia (led by USM)

37

ProSPER.Net Forum on Sustainability in Higher Education

- Organized in conjunction with ProSPER.Net General Assembly and Board Meeting:
  - 2013: Universitas Gadjah Mada, Yogyakarta, Indonesia
  - **2014: Hosei University, Tokyo, Japan**

- Annual event to openly discuss the progress and challenges in integrating sustainability paradigm in higher education activities (education, research, governance and outreach) in Asia-Pacific, with a policy perspective
- In 2014, it serves as a forum to prepare for discussions that will take place at the UNESCO World Conference on ESD to celebrate the end of the UNDESD in Aichi-Nagoya, Japan, in November
- Highlight ProSPER.Net project achievements

38

ProSPER.Net Activities

ProSPER.Net Young Researchers' School

- Two-week course to expose Ph.D. students to sustainability issues in Asia-Pacific
- Rotation among ProSPER.Net members

ProSPER.Net Leadership Programme

- 7-day programme
- Lectures on leadership (adaptive leadership, crisis leadership), network (analysis and applications), futures (scenarios), strategic communication

ProSPER.Net-Scopus Young Scientist Award in Sustainable Development

Objective:
To recognize the contribution and outstanding work done by young scientists or researchers, based in the Asia-Pacific region, in the area of Sustainable Development

39

UN DESD Implementation in East and Southeast Asia – Some Limitations

Ref. IGES Policy Report 2012-04 (An evaluation of national implementation during the UN DESD in East and Southeast Asia)

Professional Capacity

- Limited professional capacity for ESD implementation – applying to policymakers, curriculum developers, school administrators, and teachers

40

Leadership Capacity

- Leadership capacity for creating an inspired vision for ESD and the institutional capacity of effectively coordinating implementation need further strengthening

Integration Approaches for ESD

- Lack of integration of ESD across subjects

Application of ESD to Different Educational Systems

- Inflexibility of individual countries' educational systems to adopt innovative approaches and encourage educational reform

41

Global Action Programme on ESD

To mobilize education and learning to accelerate progress towards sustainable development.

a. Reorienting education and learning so that everyone has the opportunity to acquire the values, skills and knowledge that empower them to contribute to sustainable development.

b. Enhancing the role of education and learning in all relevant agendas, programmes and activities that promote sustainable development.

42

Key principles and definitions

- *ESD concerns educational content and methodology*
- *ESD promotes skills like critical thinking and imagining future scenarios*
- *ESD treats the three pillars of SD in an integrated manner*
- *ESD encompasses formal, non-formal and informal education and learning*
- *The Global Programme also encompasses activities that are in line with the above but may not be called 'ESD'*

43

Priority action areas

1. *Advancing policy*
2. *Transforming learning and training environments*
3. *Building capacity of educators and trainers*
4. *Empowering and mobilizing youth*
5. *Accelerating sustainable solutions at local level*

44

Priority action areas

1. Advancing policy

Integrate ESD into international and national policies in education and sustainable development by mainstreaming good practices and bringing about systemic change.

- ✓ Work with Ministry of Education to strengthen ESD policy
- ✓ Connect ESD policy with other sectors (e.g., aligning low-carbon strategies with content of TVET)

2. Transforming learning and training environments

Integrate sustainability principles into institutions through whole-institution approaches.

- ✓ Support education institution to set up a school sustainability plan
- ✓ Work with private companies to transform them into inspiring models of sustainability through education and training

45

Priority action areas

3. Building capacity of educators and trainers

Build capacities of educators and trainers to become learning facilitators for ESD.

- ✓ Introduce ESD into pre-service and in-service education and training.

4. Empowering and mobilizing youth

Support youth in their role as change agents.

- ✓ Design learner-centered ESD opportunities, such as e-learning and mobile learning.
- ✓ Work with youth-driven organizations to enhance youth participation in addressing sustainability challenges.

5. Accelerating sustainable solutions at local level

Develop innovative solutions to sustainable development challenges at the local level.

- ✓ Work with local authorities and municipalities to enhance ESD programmes.

46

Implementation of the Programme

Global coordination mechanism to be put in place, which may comprise:

- ✓ Launch commitments from stakeholders
- ✓ Partners networks for each of the priority action areas
- ✓ A regular forum for key stakeholders
- ✓ A coordination mechanism for UN agencies
- ✓ Support to national focal points
- ✓ A periodic global ESD report
- ✓ A clearinghouse of good practices from the implementation of the Programme

47

Asia-Pacific RCEs Strategy for GAP Implementation

- The strategy for advancing policy is through engaging in policy making processes, from setting policy agenda, policy formulation, policy implementation, to policy monitoring and evaluation.
- The strategy for transforming learning and training environments is through engaging the whole institution, from central to distributed leadership to education actors at all levels, in developing a vision and plan for reorientation of the institution.

48

Asia-Pacific RCE Strategy for GAP (cont'd)

- The strategy for building capacities of educators and trainers is through engaging in conducting courses and training programmes, both formal and informal, and in developing ESD learning materials, and to ensure that educators are open to different epistemologies.

49

Asia-Pacific RCE Strategy for GAP (cont'd)

- The strategy for youth is through giving opportunities for empowering and mobilizing youth leadership, to become change agents in societal transformation through various youth activities and innovative approaches, and to create an environment whereby youth come to RCEs to participate in ESD actions.

50

Asia-Pacific RCE Strategy for GAP (cont'd)

- The strategy for accelerating sustainable solutions at the local level is through widening the diversity of stakeholders, inclusive participation, assisting the socially vulnerable and marginalized groups in society, promoting mutual learning, and working with other like-minded networks.

51

52

Future Prospects for ESD

Yong Jin Hahn

Dean
Graduate School of Education
Korea University

Abstract:

The UN declared DESD (Decade of Education for Sustainable Development) in 2005, nine years ago. In my address, I would like to reexamine the concept of education historically, and investigate the future prospects for ESD starting from 2015. There are two methods to prospect the ESD. One is the descriptive and objective method as a science of educational research, and the other is the intuitive and subjective method as a fundamental principle of education. The former is very practical because it calculates the objective situations in which we are now positioned. The latter is very normative, so the possibility is a little low. But as a scholar of educational history, I hope to prospect the ESD by the latter.

I believe that the ESD can take role as an educational compass. The compass has opened the Era of the Great discovery since 15th century. Now we are living in a globalized era, so we need educational compasses like the ESD. To solve the future prospect of ESD successfully, I'd like to introduce the Foundationism(基礎主義) by Ki-un Hahn(1925-2010), the emeritus professor of SNU(Seoul National University). Foundationism constructs `the educational value system' and proposes `historically conscious human' as educational human beings. So It will help us to get a proper balanced direction for the ESD.

Profile:

Dr. Yong-Jin Hahn has been a professor of Department of Education, at Korea University (KU) since 1996 (assistant prof. in 1996, associate prof. in 1999 and full prof. in 2005). He has an interest about the principles of education, especially the conceptual history of modern education. He was a Moral Education teacher at middle school for 5 years. Not only has he received a B.A., M.A. (1989) and Ph.D., (1993) from KU, he also had a chance to be a research student at Nagoya University (1991-93) provided with a scholarship from Ministry of Education, Japan.
At KU, he was affiliated with the ESD (Education for Sustainable Development) program as one of the teacher training courses. He was the president of the Korean Society for History of Education and the director of Institute of Continuing Education and now he is the Dean of College of Education & Graduate School of Education at KU.

ESDの将来展望

韓 龍震

高麗大学校
師範大学長

要 旨

9年前の2005年、国連はDESD（国連持続可能な開発のための教育の10年）を宣言した。私のスピーチでは教育の概念を歴史的に再検討し、2015年からのESDの将来を展望する。そのためには2つの方法がある。1つは教育研究の科学としての記述的かつ客観的な方法であり、もう1つは教育の基本原理としての直感的かつ主観的な方法である。前者は私たちの現状を客観的に計算する非常に実際的なものであるが、後者は規範的なものであり、実現性はやや低いものとなる。しかし私は教育史の研究者として、後者によってESDの展望を論じたい。

私は、ESDは教育の羅針盤としての役目を担えると確信している。羅針盤は15世紀から偉大な発見の時代を切り開いてきた。グローバル化時代に生きる現代の私たちにはESDのような教育の羅針盤が必要である。ESDの将来を展望するために、ソウル大学校の名誉教授であった韓基彦（1025～2010）の基礎主義を紹介する。基礎主義は教育価値制度を構築し教育人として歴史的意識を持つことを提唱している。それは調和のとれたESDの方向性を示すために役立つであろう。

略 歴

韓龍震博士は、1996年より高麗大学校師範大学で教鞭を執っている（1996年には助教授、1999年には准教授、2005年は教授に就任）。教育原理、特に現代教育の概念的歴史に関心を寄せている。中学で5年間道徳教育を教えたこともある。高麗大学校で学士課程、修士課程（1989）、博士課程（1993）を修了し、日本の文部省から奨学金を得て名古屋大学（1991～93）で研究に携わったこともある。

高麗大学校では、教員の訓練コースの1つとしてESD（持続可能な開発のための教育）プログラムに参加した。韓国教育史学会会長、そして継続教育研究所理事を務め、現在は高麗大学校師範大学および大学院教育学科の学長の任にある。

Future Prospects for ESD
ESD の将来展望

Prospects for ESD

2014. 10. 25
韓龍震(Yong Jin Hahn)
高麗大学(Korea University)

持続可能発展教育の展望
Education for Sustainable Development

1

< contents 目次 >

1. Introduction　序論
2. Diagnosis of Present Circumstances
現状況の分析
3. Prospects for ESD by Foundationism
基礎主義によるESDの展望
4. Conclusion　結びに

2

1. Introduction (1)

Strategic ESD in the Next Generation: HU

Inspire a Generation: London 2012

3

1. Introduction (2)

- Education is an enterprise for the future
  - short term success of individuals
  - long term development of a society
- ESD is a compass for the next generation

4

2. Diagnosis of Present Circumstances

2-1) Two kinds of Crisis on Education

-Week liaison between work & school
=> cooling down the educational fever
(教育熱 ⇓)
- Enthusiasm to get a high level job
=> heating the educational fever
(教育熱 ⇑)

* educational gap ⇔ economic gap

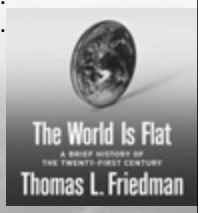
5

2. Diagnosis of Present Circumstances

2-2) Globalization and Education

- Globalization 1.0: 15-18c.
- Globalization 2.0: 19-20c.
- Globalization 3.0: 21c.

*the initiative of develop-ment flows to the individual person at 21st century.

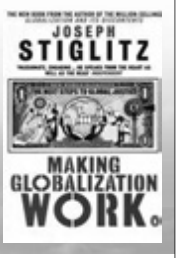


6

2. Diagnosis of Present Circumstances

- **Making Globalization Work: The Next Steps to Global Justice**
  Joseph Stiglitz

* Not only is the world not flat in many ways, it has been getting less flat.



7

2. Diagnosis of Present Circumstances

2-3) three states of Chronicle (公羊三世論)
Kang Youwei(康有爲: 1858-1927)

- *the Book of Great Harmony*
  (大同書)
  Confucianism (儒教)
  + Daoism (道教)
  + Buddhism (佛教)
  + Western Learning (西洋學)

8

2. Diagnosis of Present Circumstances

2-3) 3 states of Chronicle (公羊三世論)

the Age of Disorder (拠乱世)	the Age of Rising Peace (昇平世)	the Age of Great Harmony (太平世)
A turbulent society (乱世)	A tranquil society (小康社会)	A great harmony society (大同社会)

9

2. Diagnosis of Present Circumstances

2-4) the Probability of Realization

Kang's Great Harmony Society (大同社会)	too ideal to realize
Freedman's Flat World: similar to Turbulent Society (乱世)	possibility to lost social justice
a Tranquil Society (小康社会)	possible prospect for ESD

10

3. Prospects of ESD by Foundationism

3-1) What is Foundationism?

- Hahn, Ki-Un(韓基彦: 1925-2010)
- motto; "the formation of a human through the harmonization of tradition and innovation" <伝統と改革の調和による人間形成>

11

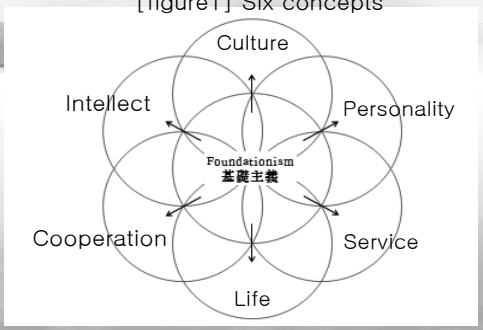
3. Prospects for ESD by Foundationism

3-1) What is Foundationism? (基礎主義)

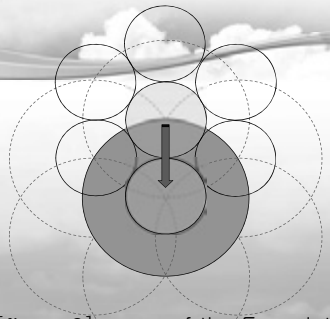
1 core 1核	**Foundation 基礎**		
3 ideas 3理念	**freedom 自由**	**order 秩序**	**time 時間**
6 concepts 6概念	**Culture**	**Life**	**Intellect**
	Personality	**Cooperation**	**Service**

12

[figure1] Six concepts



13



[figure 2] move of the Foundation

14

3. Prospects of ESD by Foundationism

3-2) Three dimensions of ESD & Foundationism

ESD three dimensions	economic 經濟的	social 社会的	environmental 環境的
Hahn's Foundationism <基礎主義>	foundation 基礎		
	freedom 自由	order 秩序	time 時間
Plato's four Virtues <*the Republic*>	justice 正義		
	moderate 節制	courage 勇氣	wisdom 智慧

15

3. Prospects of ESD by Foundationism

3-3) structure of soul & tripartite class structure

individual soul	appetite	spirit	reason
the castes of society	Productive (Workers)	Protective (Warriors)	Governing (Philosopher Kings)
Plato's Virtues	Moderate 節制	moderate of **Courage 勇氣**	moderate love for **wisdom**, the courage to act according to **wisdom**
Maslow's Hierarchy of Needs	Physiological Safety	Love/Belonging Esteem	Self-actualization 自我實現

16

3. Prospects of ESD by Foundationism

3-5) economical dimension（経済的観点）

sustainability	⇐ unsustainable – sustainable ⇒	
Hahn's theory	subject's autonomous freedom 主体の自由	
Plato's virtue	greedy 貪慾	moderate 節制

17

3. Prospects of ESD by Foundationism

3-6) Social dimension （社会的観点）

sustainability	⇐ unsustainable – sustainable ⇒	
Hahn's theory	orderly innovation 秩序ある改革	
Plato's virtue	opportunism	Protective Courage

18

3. Prospects of ESD by Foundationism

3-7) environmental viewpoints （環境的観点）

sustainability	⇐ unsustainable – sustainable ⇒	
Hahn's theory	historical consciousness (time) 歴史的意識	
Plato's virtue	partial knowledge	great wisdom

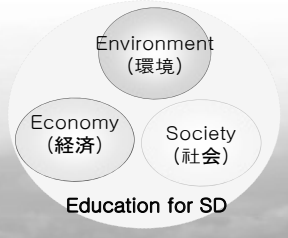
19

4. Conclusion 結びに

* the reestablish the concept
* the harmony of tradition and innovation
* careful concern about foundation of every work
* harmonize the courage realism and optimism

20

4. Conclusion 結びに



21

22

Reconstruction of ESD

Akito Kawaguchi

Professor
Faculty of Education
Hokkaido University

Abstract:

ESD is on the way to ensuring a sustainable future. Although UN-DESD has been successful in raising awareness of agendas of sustainable development (SD), global action program as the outcome of DESD is based on the reflection that ESD activity is still insufficient in integration between policies and practices endorsed by political agreements, financial support and scientific innovations. Furthermore, we have to reflect that the crisis of SD has been derived from modern society sustained by educational system per se, that has produced any kind of professional.

Reconstruction of ESD means strategic modification, that has to be to empower us to research the cause of the crisis of SD. As the crisis ahead of us is inextricably intertwined with conflicts among economic development (economic liberalism), social justice or equity (individualism) and protection of renewable environment (scientific anarchy), it could be no longer overcome by single science. To overcome the crisis, we need to elucidate internal associations of the conflicts, where key issues must be closely associated with the aspects of modern social ideology that unconsciously regulate our behaviors. Any generation is a temporary representative of endless human generations, there ESD must be the only final route to make our fate sustainable.

Profile:

Akito Kawaguchi, MD., PhD is a Project (and Emeritus) Professor of Hokkaido University (HU), Sapporo, Japan. After graduation from School of Letters (European philosophy) of HU and School of Medicine of Asahikawa Medical College (MD), he started his research in National Cardiovascular Center Hospital and Research Institute in Osaka, specializing in atherosclerosis and cardiovascular protection. Since then, he has been affiliated with Graduate School of Education in HU and charged of health science & education, majoring clinical epidemiology and disease prevention, especially life-style related disease. He is also the founder of "ESD Campus Asia project", that is a "global" educative program from 2011 to shape a sustainable future by multilateral student exchanges, focusing on ESD by collaborating with institutions in Korea (Korea University, Seoul National University), China (Beijing Normal University), and Thailand (Chulalongkorn University).

ESDの再構築

河口 明人

北海道大学
教育学研究院教授

要 旨

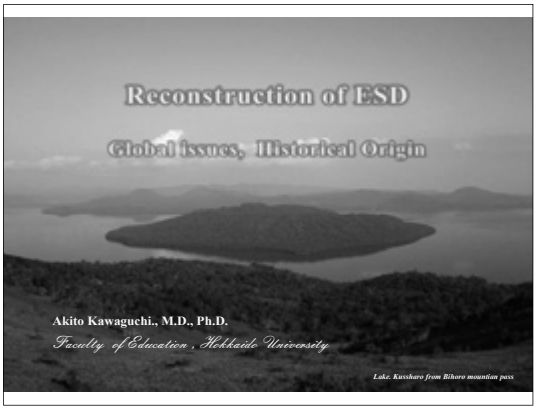
ESDは持続可能な未来の確保へ向かう道の半ばにある。国連のDESDによって持続可能な開発のアジェンダへの認識は高まった。しかしDESDの総括としてのグローバル・アクション・プログラムは、ESDの活動がその方針に対し、政治的合意、資金援助、科学的革新によって支持された政策と実践が十分に連携していないという反省に基づいている。さらに反省すべきことは、持続可能な開発の危機が、専門家を生み出してきた教育制度それ自体に支えられる現代社会に由来していることだ。

ESDの再構築とは、持続可能な開発の危機の原因究明を可能にするための戦略改変である。私たちを待ち受ける危機は、経済的発展（経済的自由主義）、社会正義または公正（個人主義）、そして再生可能な環境の保護（科学的混乱）の間の対立に密接に絡み合っていて、もはや単一の科学で解決することは不可能だ。危機を克服するためには、その対立の内的相互関係を明らかにする必要があるが、そこでの重要な課題は私たちの行動を無意識に規定している現代社会のイデオロギー的側面に密接に関わっている。いかなる世代も終わりなく続く人類の世代の一端を担うに過ぎない。ESDはそこで私たちの運命を持続可能なものにしてくれる唯一、最後の道筋であろう。

略 歴

河口明人博士は、日本の札幌にある北海道大学の特任教授かつ名誉教授である。北海道大学文学部（西洋哲学）と旭川医科大学医学部を卒業後、大阪の国立循環器病研究センターで動脈硬化と心血管疾患予防の研究を開始。その後北海道大学大学院教育学院にて健康科学と教育学を担当し、臨床疫学、疾病予防、特に生活習慣病を専門としている。また多国間の学生交流を通して持続可能な未来を形づくるため、2011年にはグローバルな教育プログラムであるESDキャンパス・アジア・プロジェクトを創設し、韓国（高麗大学校、ソウル大学校）、中国（北京師範大学）そしてタイ（チュラロンコン大学）の教育機関と連携してESDに焦点をあてた取り組みを行っている。

Reconstruction of ESD
ＥＳＤの再構築



1

Content

1. Brief Review ESD & SSD
2. Root Question / Responsibility of University
3. Modern mind (Origin of the crisis?)
4. Function of Science / Orientation of Education
5. Conclusion

2

International Activities

1968	UN Conference on Biodiversity	1972 UNEP
1972	UN Conference on the Human Environment	Only one earth
1977	UN Convention to Combat Desertification	1992 UNCCD
1979	Convention on Long-rage Trans-boundary Air Pollution	1983 UNECE
1982	World Commission on Environment and Development	WCED
1987	UN General Assembly (Brundtland report)	Our Common Future
1987	Montreal Protocol on Substances that Deplete the Ozone	
1988	Intergovernmental Panel on Climate Change	IPCC→COP
1992	UN Conference on Environment and Development (UNCED)	Agenda 21
1994	UN Framework Convention on Climate Change	UNFCCC
2002	UN Conference on Sustainable Development (Rio+10)	Johannesburg
2005	UN DESD (Decades of ESD) started	→2014
2012	World Summit on Sustainable Development (Rio+20)	The future we want

3

1987 "Our common future" (WCED)
SD is a development that meets the needs of the present without compromising the ability of future generation to meet their own needs.

DESD logo

1992 Agenda 21 (Rio de Janeiro)
Reorienting education toward SD has been the focus of many initiative.

2005 DESD (based on Rio+10 Plan 2002)→2014

2005 G8 University Summit initiated by Hokkaido University
Sapporo Sustainability Declaration (SSD)

2012 The future we want
Green economy in the context of SD and poverty eradication

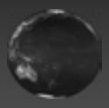
Lake Toya

4

Sapporo Sustainability Declaration (SSD)

2008 at Sapporo

1. Importance of sustainability
2. Sustainability issues have become urgent political concerns
3. The responsibility of universities
4. The need to restructure scientific knowledge
5. The need for a network of networks
6. The need for "knowledge innovation."
7. The role of higher education for sustainability
8. The function of the university campus as an experimental model



SW 2014 Strategic ESD

5

Role & Responsibility of Education

From SSD , 2005

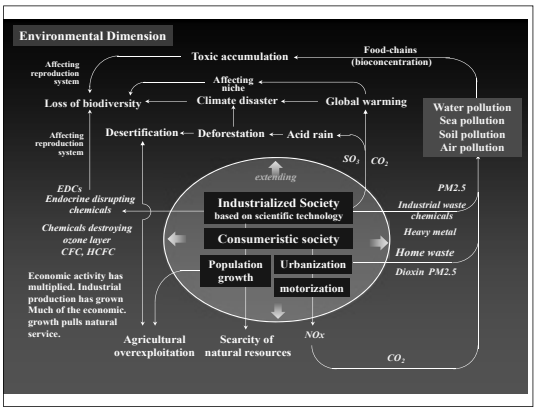
3. The responsibility of universities.
All universities have an important role in problem-solving to bequeath a sustainable world to future generations. Through their research, universities are expected to provide timely solutions to these problems …

4. The need to restructure scientific knowledge.
Sustainability is a broad area that embraces a complex diversity of interrelated factors ranging from the natural environment to socioeconomic systems. Global sustainability can be achieved only through a comprehensive approach that addresses socioeconomic as well as environmental issues.

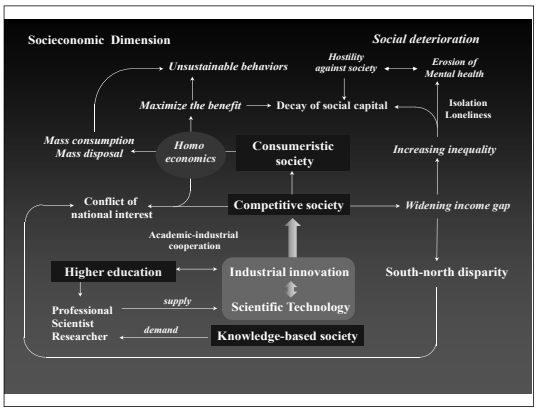
6. The need for "knowledge innovation."
Achieving sustainability requires social change, which is predicated on changing public awareness. Universities and their researchers have a responsibility to articulate and disseminate new sustainability-related scientific knowledge and information, including its attendant uncertainty, to society at large.

SW 2014 Strategic ESD

6



7



8

Root Question

ESD is a challenge to answer the questions .

Why has human "intellectual" activity resulted in such devastating situation, unlike our common expectation to peaceful and cohesive society?

A lot of unsustainable phenomena

Environmental decay

Economic gap — Activity of Modern Individuals — *Societal erosion*

Modern society

If some of global issues would be human-made, the cause and solution must be hidden in individuals.

ESD Agenda by UNESCO

(1) Biodiversity
(2) Climate Change
(3) Disaster Risk Reduction
(4) Cultural Diversity
(5) Poverty Reduction
(6) Gender Equality
(7) Health Promotion
(8) Sustainable Lifestyle
(9) Peace and Human Security
(10) Water
(11) Sustainable Urbanization

SW 2014 Strategic ESD

9

Responsibility of Higher Education

Human–made global issues — Socioeconomic deterioration

Industrialized society ⟷ Consumeristic society

Human resources — scientists, researchers, politicians, educators, entrepreneurs, engineer, citizens and so on — *Human resources*

Higher education

Restructuring education in order to address the human-made problems,
by reflecting the historical way we had come,
by reconsidering the interrelationship between human and nature, and
by anatomizing modern mind we believe.

SW 2014 Strategic ESD

10

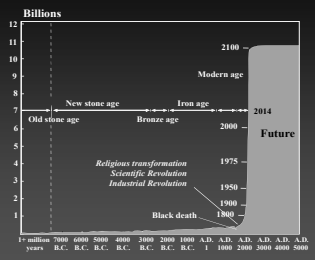
Key Aspects of Modern Mind

1. Individualism
   as an attitude to have the right to decide his behavior, exclusively and freely.
2. Economic liberalism (Homo economics→Economic rationality)
   as an attitude to maximize self-interest, whatever he is (a consumer, a producer, an entrepreneur, scientist and so on)
3. Scientific rationalism (scientific determinism)
   as a belief that everything is determined by the cause-result relationship.
4. Democracy
   as a political system to decide a social intention based on the contract by legally equal individuals.

SW 2014 Strategic ESD

11

Secular Trend of World Population



Source: Population Reference Bureau; and United Nations, *World Population Projections to 2100* (1998)

12

Question for the origin of modern science

Needham Question

Joseph Needham "The grand titration-science & society in East & West-"

1900 – 1995
Joseph Needham

"Gunpowder, the magnetic compass, and paper and printing, which Francis Bacon considered as the three most important inventions facilitating the West's transformation from the Dark Ages to the modern world, were invented in China". Until 15th century, Chinese society had been leading technological innovation, why China had been overtaken by the West in science and technology, despite its earlier successes….

"Why did modern science, the mathematization of hypotheses about Nature, with all its implications for advanced technology, take its meteoric rise only in the West at the time of Galileo."

Process of papermaking in ancient Chinese society

13

Historical Aspects of Scientific Revolution

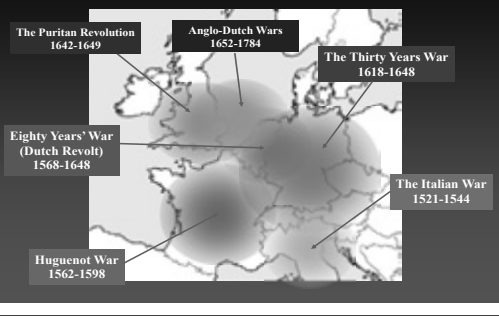
1543	N. Copernicus	On the Revolutions of the Celestial Spheres
	A.Vesarius	On the Structure of the Human Body
1584	G.Bruno	On the Infinite Universe and Worlds (pantheism)
1600	G.Bruno	A sentence of death
1609	J. Kepler	Astronomia nova
1610	G. Galileo	Discovery of satellites around Jupiter
1616		Copernicus's work prohibited
1620	F. Bacon	Novum Organon (advocacy of experimental methods)
1628	W. Harvey	On the Motion of the Heart and Blood
1632	G. Galileo	Dialogue Concerning the Two Chief World Systems
1633	G. Galileo	A sentence of guilty
	R. Descartes	The world (the law of inertia), not published
1637	R. Descartes	Discourse on the Method
1687	I. Newton	Principia

14

Schema of Western Thought

15

Backdrop in 16-17 Centuries in Western Europe



16

Origin of Individualism

Discourse on Method

Cogito, ergo sum
-I think, therefore I am. -

Rene Descartes
1596～1650

"……If I convinced myself that my beliefs are false, then surely there must be an "I" that was convinced. Moreover, even if I am being deceived by an evil demon, I must exist in order to be deceived at all. So "I must finally conclude that the proposition, 'I am,' 'I exist,' is necessarily true whenever it is put forward by me or conceived in my mind" . The mere fact that I am thinking, regardless of whether or not what I am thinking is true or false, implies that there must be something engaged in that activity, namely an "I." Hence, "I exist" is an indubitable and, therefore, absolutely certain belief that serves as an axiom from which other, absolutely certain truths can be deduced….."

SW 2014 Strategic ESD

17

Historical Impact of Descartes's " I"

Essential origin of modern "individualism"

1. Rejection of Church doctrine & Emancipation from it.
2. Logical Explanation of being "I" as a thinking process
3. "I" as an agent to recognize what is true (self-reliance).
4. Justifying scientific evidences found by an individual reason.
5. Leading to the concept of "scientific determinism".
6. Development of mathematical thinking (attestation).

SW 2014 Strategic ESD

18

Protestant Ethics & Science

Max Weber
1864 - 1920

Max Weber "The protestant ethics and the spirit of capitalism."

(1) "Capitalistic spirit" comes from subjective adoption of an ascetic faith conducted by individuals: Occupational work is the obligation.
(2) Protestant asceticism (strict attitude) is associated with a propensity to rationalize on a mathematical basis.

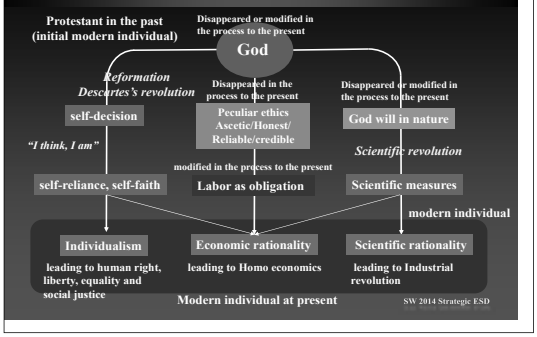
"The favorite science of all Puritan was physics, and next to it all those natural science which used a similar method, especially math. (Because) It was hoped from the empirical knowledge of the divine laws of nature to ascend to a grasp of the essence of the world…. The empiricism of 17th century was the means for asceticism to seek God in nature." (note, 145)

Fighting Calvinism is characterized by
(1) "God will" that is quite similar of natural law(→scientific rationality),
(2) feeling of inner loneliness of the single individual isolation(→self reliance)

SW 2014 Strategic ESD

19

Historical Evolution of Individualism & Science



SW 2014 Strategic ESD

20

Implication of Science

British historian
1900-1974

Scientific Revolution

H. Butterfield "The origins of modern science"

"Scientific revolution overturned the authority in science not only middle age, but of the ancient world – since it ended not only in the eclipse of scholastic philosophy, but in the destruction of Aristotelian physics. …. It changed the character of men's habitual mental operations even in the conduct of the non-material sciences, while transforming the whole diagram of the physical universe and the very texture of human life itself . It looms (appears) so large as the real origin both of the modern world and of the modern mentality."

21

Shift of Paradigm

H. Butterfield "The origins of modern science"

Movement as a given condition from motionlessness

"the modern law of inertia-the modern picture of bodies continuing their motion in a straight line and a away to infinity-was hardly a thing which the human mind would ever reach by an experiment, or any attempt to make observation more photographic, in any case"

"The change is brought about, not by new observation or additional evidence in the first instance, but by transpositions that were taking place inside the minds of the scientists themselves."

Change inside mind with no change of data !

22

Outcome of Scientific Revolution

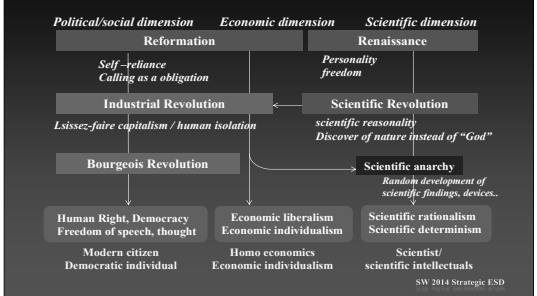
The concept of "progress" has been resulted from scientific revolution, which accelerated accumulation of the knowledge by discovery of natural laws and followed by drastically change of society. Scientific revolution are characterized by

1. Accumulation of knowledge about nature by purposeful observation－development of scientific rationality
2. Quantitative estimation by practical use of mathematics, instead of qualitative Aristotelian estimation －mathematics as a powerful and precise language to explain of and change the world
3. Establishment of scientific methods by reproducible experiments －lifestyle change by discovery & application of natural law

Since 18th century, human could not have thought the future without notion of "progress", and the future is the same meaning of "progress" or "development ".

23

Modern Individual in Historical Context

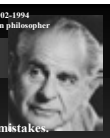


SW 2014 Strategic ESD

24

From "Conjecture & Refutation" written by K. Popper

1902-1994
Austrian philosopher



Critical Scientific Mind

Science to ensure "Progress"

"All our knowledge grows only through the correcting of our mistakes. Since our knowledge can grow, there is no reason here for despair of reason.(Scientific optimism) At the same time, since we can never know for certain, there is no authority for any claim to authority."

"There is no ultimate source of knowledge. The proper epistemological question is not one about sources; rather we ask whether the assertion made is true- that is to say, whether it agrees with the facts.
It is essentially the critical and progress character－the facts that we can argue about any claim to solve our problem better than competitors－which constitute the rationality of science."

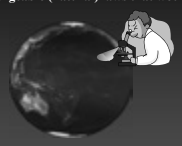
"Man can know, thus he can be free!" This is a formula which explains the link between epistemological optimism and the Scientific liberalism. We believe the developmental and progressive future (but blind the future).

25

"Nature" as a Object

"Nature" is the very target to understand the world, instead of "God." Nature is completely subjected to strict and unchangeable (natural) laws that would intertwine with each other.

In natural science, short-sight objectivation makes nature into pieces (segmentalization).



When we research a mechanism of nature or try to find a natural law, we have to be disconnected the target condition from nature itself. However, recognition or understanding based on disconnected from the integrated condition (nature) is not true one. That' why we are confronted the crisis of SD.

SW 2014 Strategic ESD

26

Knowledge Explosion-Scientific Anarchy

Who control the huge amount of scientific findings ?

A new finding is based on precedent findings. Scientific findings have been accumulated day by day, leading to (fragmented) "knowledge explosion". Accumulated findings psychologically assure us that our knowledge is certainly progressing beyond the past, despite none can control and understand a huge amount of data in detail. None could integrate them into the real one.

Science has been organized as social activity by a number of scientists. The conviction or belief of "progress" is socialized. People believe that tomorrow is deemed understandable scientifically. However, lack of self-control may lead to despair of getting them all sorted out or organized inside society.

The crisis of SD may be an aspect of scientific anarchy, that is also the basis of scientific progress, because of freewheeling thinking.

27

The process without an agent

Modern "invisible hand"

Scientific liberalism (freedom of science, freedom of research, freedom of thought → Scientific Anarchy

→origin of creativity and social innovation

Industrial application

Economic liberalism (market mechanism, free trade, open competition) → Economic Anarchy

→supposedly, the result would be most harmonious & equal.

Uncontrolled environmental crisis
Widening social gap

Both are based on modern "individualism"

28

Restructuring of knowledge

This crisis could be no longer overcome by only a disciplinary science, because the crisis includes a wide range of issues, some of whose solutions may be opposed to each other. Interdisciplinary (multi-major) approach is inevitable.

Most of data or evidence are fragmented. We have to raise SD-oriented professionals who are capable of integrating and systematizing knowledge. To that end, ESD has to be reconstructed and oriented to getting rid of the untranslatable barrier primarily between two cultures, natural science and humanity.

Any scientist may be required attitude to try the internal-relationship among other sciences beyond a specialization (panoramic view), not to take a part, but to stand for the comprehensive integration of sciences. Accordingly, any specialty is responsible to link with others as an essential effort in the context of ESD (interdisciplinary attitude)

29

Conclusion

If the global issues would certainly originate from our modern mind, the primary target of ESD would be ourselves (modern mind), not phenomenal problems, nor planet.

If modern mind embedded with us would control our behavior, we would already have the critical solution for the crisis of SD in ourselves.

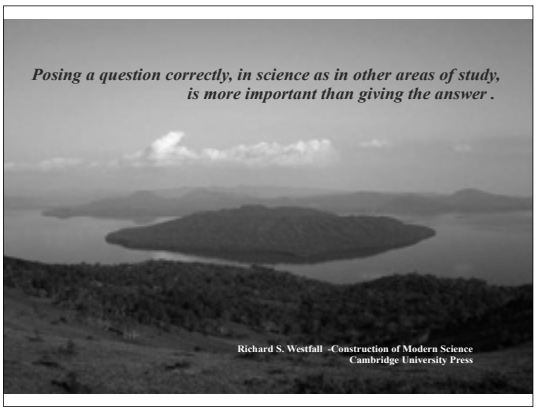
If our behavior would be motivated by our mind, the strategy of ESD should aim at reconstruction of our mind, even if it's tough question.

In this context, "humanity stands at a defining moment in history." (Agenda 21: 1-1, 1992)

SW 2014 Strategic ESD

30

Posing a question correctly, in science as in other areas of study, is more important than giving the answer .



Richard S. Westfall -Construction of Modern Science
Cambridge University Press

31

Outcomes and Prospects of ESD Campus Asia

Co-host: Korea University (Republic of Korea), Seoul National University (Republic of Korea), Chulalongkorn University (Thailand), Beijing Normal University (China), Hokkaido University
Venue: Room D (Conference Room 4)

Summary

By Masao Mizuno, Faculty of Education, Hokkaido University

Over the past four years, HU's School of Education has worked closely with four other leading universities in Asia (Korea University, Seoul National University, Beijing Normal University and Chulalongkorn University) on the ESD Campus Asia Project based on interactive student exchanges. This session, held under the title of Outcomes and Prospects of ESD Campus Asia, featured discussions based on shared educational objectives, achievements and future improvements by two faculty members supervising the project from each of the universities. The meeting began with a presentation by HU, which has hosted students from Asia in workshop-style discussions on ESD issues, followed by presentations from representatives of other universities on their initiatives. Attendees learned that more than 120 students from HU and elsewhere had been hosted under the project over the past four years, and that the initiative had produced certain positive results. These include the establishment of a social student network in Asia based on the Buddy Program (under which host school students provide comprehensive support for the studies and daily lives of international students on the program), an increasing number of students going on to graduate school based on their international experience, and the decision by a university to adopt ESD in its future teacher training course curricula. While recognizing issues such as the ideal financial basis for interactive student exchanges, follow-up work in relation to participating students and upper limits on student numbers, attendees also discussed quantitative expansion of the project based on work to increase the number of participating universities, and qualitative enhancement of the project based on the sharing of more educational assets. In this way, those present affirmed their commitment to creating ESD campuses in Asia through continued collaboration to further promote this project.

Presentation

Brief background of ESD Campus Asia Project

Masao Mizuno
Professor, Hokkaido University
(Chairman)

Jun Moriya
Professor, Hokkaido University

Outcomes and Prospects in Korean University

Yong Jin Hahn
Professor, Dean

Seung Hyun Son
Professor

Outcomes and Prospects in Seoul National University

Chan-Jong Kim
Professor,
Vice Dean

Johannes Tschapka
Associate Professor

Young Joo Lee
PhD candidate

Outcomes and Prospects in Beijing Normal University

Xuelian Li
Professor

Chen Wang
Associate Professor

Outcomes and Prospects in Chulalongkorn University

Charoonsri Madiloggovit
Professor

Fuangarun Preededilok
Associate Professor

ESD Campus Asiaの成果と展望

共催: 高麗大学校(韓国)、ソウル大学校(韓国)、チュラロンコン大学(タイ)、北京師範大学(中国)、北海道大学
会場: Room D (第4会議室)

サマリー

報告者：北海道大学大学院教育学研究院教授　水野　眞佐夫

北海道大学教育学部がアジアの有力4大学(高麗大学校、ソウル大学校、北京師範大学、チュラロンコン大学)と過去4年間取り組んできた双方向生学生交流を基盤としたESD国際協同教育(ESD Campus Asia Project)について、各大学の担当教員2名ずつが参加し、「ESDキャンパスアジアの成果と展望」と題して、共通の教育目標の確認と到達点、さらに今後の改善点を踏まえた議論が行われた。ESDの諸課題に対し、アジアの学生が一同に会して議論するワークショップ形式の北大の実施報告を皮切りに、各大学の取組が報告された。すでに4年間で参加学生は北大生を含み120名を越え、ホスト校の学生が包括的な修学・生活支援を行うBuddy　Programを根幹としたアジアに学生のソーシャルネットワークが形成されていること、国際経験を基に大学院に進学する学生が増えていること、次世代の教師養成教職課程にESDを取り入れた大学など、一定の成果が得られていることが確認された。一方で、双方向生学生交流に伴う財政的基盤の在り方、参加学生のフォローアップ、参加学生数の上限などの課題も認識されたが、参加大学の拡大によるプロジェクト量的拡大と、教育資産のさらなる共有化による質的向上が議論され、今後も協同で本プロジェクトを推進し、ESDのアジアにおけるキャンパス形成にむけて努力していくことが確認された。

プレゼンテーション

ESD Campus Asiaの歩み

水野　眞佐夫
北海道大学
教育学研究院
教授(司会)

守屋　淳
北海道大学
教育学研究院
教授

韓国・高麗大学校師範大学における成果と展望

Yong Jin Hahn
Professor, Dean

Seung Hyun Son
Professor

韓国・ソウル国立大学校師範大学における成果と展望

Chan-Jong Kim
Professor,
Vice Dean

Johannes Tschapka
Associate Professor

Young Joo Lee
PhD candidate

中国・北京師範大学における成果と展望

Xuelian Li
Professor

Chen Wang
Associate Professor

タイ・チュラロンコン大学における成果と展望

Charoonsri Madiloggovit
Professor

Fuangarun Preededilok
Associate Professor

Brief background of ESD Campus Asia Project
ESD Campus Asia の歩み

HOKKAIDO UNIVERSITY

Parallel Session 1

Outcomes and Prospects of ESD Campus Asia

5th International ESD Symposium
Strategic ESD in the Next Generation

Saturday, October 25th, 2014

1

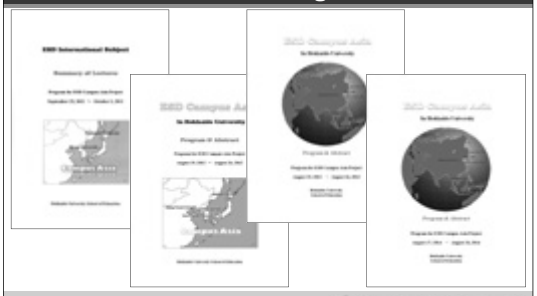
Program

16:00 – 16:10	Brief background of ESD Campus Asia Masao Mizuno & Jun Moriya
	Outcomes and Prospects of ESD Campus Asia
16:10 – 16:25	In Korean University Seung Hyun Son & Yong Jin Hahn
16:25 – 16:40	In Seoul National University Johannes Tschapka, Young Joo Lee & Chan-Jong Kim
16:40 – 16:55	In Beijing Normal University Chen Wang & Xuelian Li
16:55 – 17:10	In Chulalongkorn University Charoonsri Madiloggovit & Fuangarun Preededilok
17:10 – 17:50	Overall Discussion
18:00 – 18:30	Wrap-up Discussion

Saturday, October 25th, 2014 HOKKAIDO UNIVERSITY

2

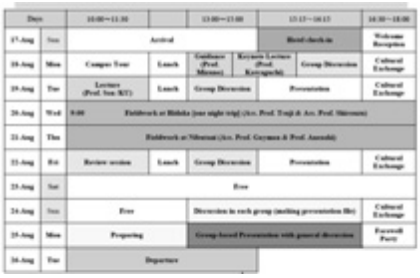
Historical Background



HOKKAIDO UNIVERSITY

3

Hokkaido University Program 2014



Saturday, October 25th, 2014 HOKKAIDO UNIVERSITY

4

HU Program 2014 –Group Work–

Saturday, October 25th, 2014 HOKKAIDO UNIVERSITY

5

HU Program 2014 –Group Presentation–

Saturday, October 25th, 2014 HOKKAIDO UNIVERSITY

6

HU Program 2014 –Fieldwork–

Saturday, October 25th, 2014 HOKKAIDO UNIVERSITY

7

HU Program 2014 –Fieldwork–

Saturday, October 25th, 2014 HOKKAIDO UNIVERSITY

8

9

10

Outcomes and Prospects in Korean University
韓国・高麗大学校師範大学における成果と展望

ESD OUTCOMES AND PROSPECTS IN KU

Korea University & Hokkaido University ESD Campus Asia Projects Since 2011

1

Primary Project Goals

- To recognize the significance of education that plays a central role in realization of sustainable future
- To foster communication skills, problem-solving skills and integrative views to be able interpret issues of current societies for realization of sustainable future
- To search for the ways by yourself to realize education for sustainable development as would-be teachers (pre-service teachers) who will practice education for sustainable future at the school class

2

Lecture & Workshop Topics

- Framework for Teaching or Analyzing Social, Economic, Environmental Issues (Prof. Son, Seung Hyun Dept. of Education)
- Quality of Life and Leisure Education (Prof. Kim, May Dept. of Physical Education)
- Poverty in Current World (Prof. Kim, Young Ho, Dept. of Geography Education)
- Live Green (Prof. Kim, Youkyung, Dept. of Home Economics Education)
- Prospects for ESD (Prof. Hahn, Yong Jin, Dept. of Education)

3

Lecture & Workshop Topics

- A Contemplation on the Earth's Sustainability on the Roof of the Fragile Earth (Prof. Seong, Yeong Bae, Dept. of Geography Education)
- Decision-Making and Mathematics (Prof. Kim, Dong Joong, Dept. of Mathematics Education)
- Sustainability & Fashion (Prof. Lee, Yoon-Jung, Dept. of Home Economics Education)
- Perspectives of ESD and Key Concepts
- Planning for a Sustainable Future
- Integration of ESD Perspectives

4

Cultural Exchanges & Fieldwork

- Visit Museum
- Historical sites
- Shopping & Foods
- Short trips
- Hanok Village

5

Final Projects Presentation Topics

- Fun Fun Winter Sports
- Global community History – Glocal Communitarianism
- Overcoming poverty with Education: ESD through realization of equity and primary education for all
- The search for learning system toward solidarity-Attention to joint learning and research about history between Korea and Japan
- Science and Water
- Green Food & sustainability
- ESD to second language education

6

ESD IN ACTION

7

ESD Description/Definition in DESD

- ESD is a learning process (or approach to teaching) based on the ideals and principles that underlie sustainability and is concerns with all levels and types of education
- 5 fundamental types of learning:
  - learning to know,
  - learning to be,
  - learning to live together,
  - learning to do, and
  - learning to transform oneself and society

8

ESD in Formal Education

- Re-design of curricula (What KU did in ESD course)
- Minor adjustments to the existing system
- New approaches, cross-curricular and interdisciplinary teaching and learning
- Integrating forms of ESD into vocational education and workplace learning

9

Non-Formal Education & ESD

- Less structured
- Study groups, non-governmental organizations, social movements, youth clubs, churches, folk high schools, etc.
- Voluntary, active participation, reciprocal exchanges of ideas
- Concept of Lifelong learning and occur everywhere

10

Tools & Mechanisms for capacity building

- Seminars and eco-conferences
- Dialogues with NGOs and the media sector
- Lessons for school children
- Awareness-raising campaigns
- TV and radio programs
- Documentary films,
- Promotion videos and TV advertisements
- Video, animation, and cartoon films, excursions

11

Tools & Mechanisms for capacity building

- Road posters
- Map collages for tourists
- Magazines, leaflets, flyers, booklets, advising banners and posters
- Photo and drawing exhibitions
- Story-telling for children
- Special websites

12

How do you advertise your ideas and thoughts?

- SNS advertisement?
- UCC?
- Flyer?
- Choose type of tools & mechanisms
- Design the contents (Decide the issues & dimensions)

13

Prospectives of ESD

14

Outcomes and Prospects in Seoul National University
韓国・ソウル大学校師範大学における成果と展望

Enhance the understanding of Sustainability in ESD Campus Asia'

Lessons from 'Settlers of Catan' Game.

Johannes Tschapka, Lee Young Joo
Seoul National University

Lessons learnt 2014 Tschapka / Lee 1

1

Most likely risks:

Most likely risks
Income disparity (societal risk)
Extreme weather events (environmental risk)
Unemployment and underemployment (economic risk)
Climate change (environmental risk)
Cyberattacks (technological risk)
Most potentially impactful risks
Fiscal crises (economic risk)
Climate change (environmental risk)
Water crises (environmental risk)
Unemployment and underemployment (economic risk)
Critical information infrastructure breakdown (technological risk)

World Economic Forum (2014) Global Risks 2014, Ninth Edition is published WEF Geneva

Lessons learnt 2014 Tschapka / Lee 2

2

Conceptualise Sustainable Development

4. If not, and you encounter the concept first time here, can you guess what "Sustainability" is?
Please describe freely what you think of

5. Then, how about the composite, "Sustainable Development"? When it comes to the term "Development" please describe concrete example of what should be developed?
Please describe freely what you think of

Lessons learnt 2014 Tschapka / Lee 3

3

Development Models

World-order development	Technological inventions
Alternative development	Global shift in social values
Autonomous development	Community solidarity and cultural identity

Sauve Lucie(1998) L'éthique de la responsabilité en éducation relative à l'environnement, Montreal.

Lessons learnt 2014 Tschapka / Lee 4

4

Brundtlandt Report 1987

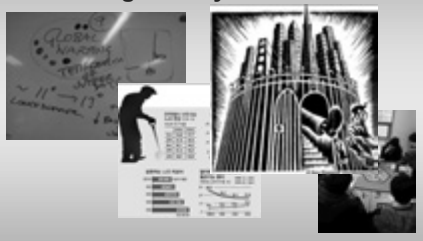
"Sustainable development is development that meets the **needs of the present** without **compromising the ability** of future generations to meet their own needs".

United Nations (1987) Report of the World Commission on Environment and Development, General Assembly Resolution 42/187

Lessons learnt 2014 Tschapka / Lee 5

5

Encovering the Key Factors



Lessons learnt 2014 Tschapka / Lee 6

6

Sustainability as regulative idea

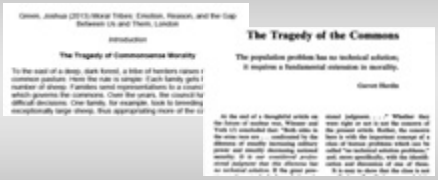
Like liberty and equality, sustainability has no single agreed meaning. It takes meaning with different political ideologies underpinned by different values and philosophy.

Huckle, John and Sterling, Stephen. (eds.) (1996) Education for Sustainability, London. Earthscan Publications Ltd.

Lessons learnt 2014 Tschapka / Lee 7

7

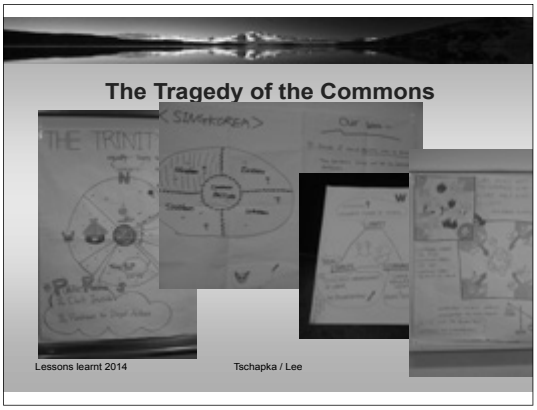
The Tragedy of the Commons


The Tragedy of the Commons

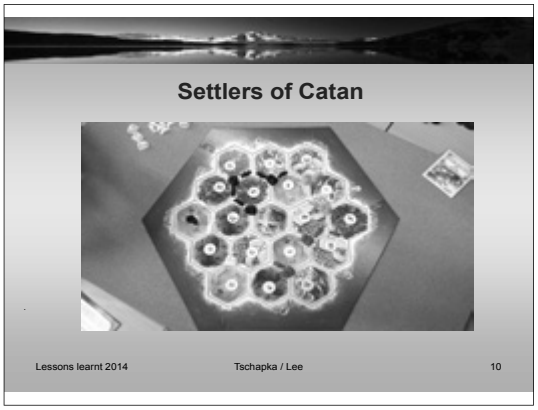
Green, Joshua (2013) Moral Tribes, London. and Hardin, Garrett (1968) The Tragedy of the Commons, Nature

Lessons learnt 2014 Tschapka / Lee 8

8


The Tragedy of the Commons
Lessons learnt 2014
Tschapka / Lee

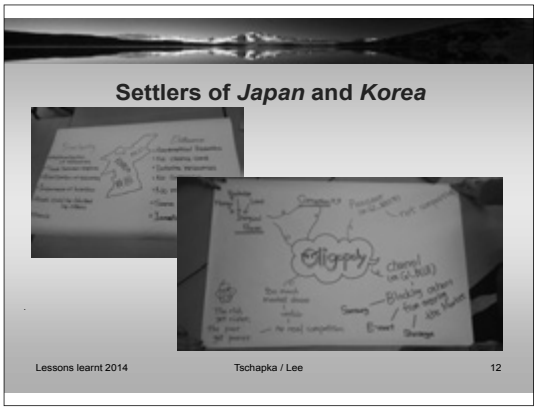
9


Settlers of Catan
Lessons learnt 2014
Tschapka / Lee
10

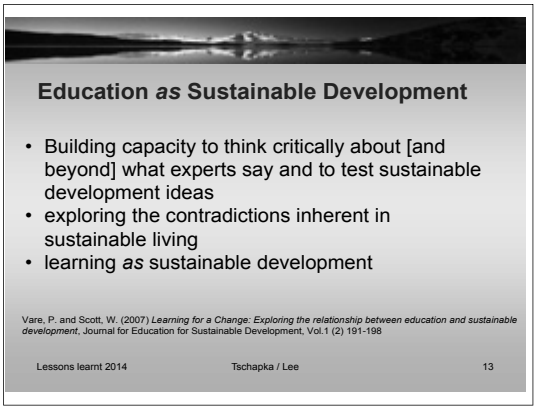
10

Settlers of Catan
Lessons learnt 2014
Tschapka / Lee
11

11


Settlers of *Japan* and *Korea*
Oligopoly
Lessons learnt 2014
Tschapka / Lee
12

12


Education *as* Sustainable Development
• Building capacity to think critically about [and beyond] what experts say and to test sustainable development ideas
• exploring the contradictions inherent in sustainable living
• learning *as* sustainable development
Vare, P. and Scott, W. (2007) *Learning for a Change: Exploring the relationship between education and sustainable development*, Journal for Education for Sustainable Development, Vol.1 (2) 191-198
Lessons learnt 2014
Tschapka / Lee
13

13

Outcomes and Prospects in Beijing Normal University
中国・北京師範大学における成果と展望

ESD Campus Asia at BNU

CHEN WANG
Beijing Normal University

Oct. 25th, 2014
Hokkaido University

1

Contents

* 1. Basic information and data
* 2. The inspiration from the Chinese students' experiences
* 3. The construction of Experiencial Learning strategy
* 4. The suggestion to ESD Campus Project in the future

2

1. Basic Information and Data

Period	2010–2014	2010: Start 2012: Students Exchange 2013: Upgrade
Totality of Students	30	China: 15 Japan: 15
Institutes involved	11	**International**: Earth Charter Communities Network **National**: China Ministry of Environmental Protection; National Astronomical observatories; Chinese Academy of Science Institutes in University Primary and Secondary Schools
Totality of Teachers	30	Professors Teachers Experts
Funds	240, 000 CNY	Air Fare Accommodation

3

2. The inspiration from the Chinese students' experiences

* 2.1 Features of the ESD Campus Project
* 2.2 Experience is a very important teaching and learning method
* 2.3 Conclusion and Inspiration

4

2.1 Features of this ESD Campus Asia Project

* The most significance of ESD Campus Aisa Project for Chinese students is to offer a different experience
* Experience is a kind of very important learning beyond knowledge learning
* Students rethinking: The harvest or the gains in **experience** of Japan (including EE/ESD) is more than the **course learning** for students. The course learning is a **bridge** for students' experience learning in this ESD Campus Asia Project.

5

2.2 Experience is a very important teaching and learning method

* Experience is the core of ESD from the angle of methodology
* Its role in teaching / learning is beyond the knowledge convey or delivery
* Two kind of knowledge in Human society: conveyed/ can be deliveried by modern school edu. and can not be conveyed/ can not be deliveried by modern school edu.
* Experience does both the first and second works

6

2.2.1 Experiences learning is more than hundreds of teaching in lecture style

* **As a knowledge and awareness:**
* Experiences learning let Chinese students:
* To know the students and people by experience
* To know the environmental quality by experience
* To know a country, its society and culture by experience
* To know the friendship by experience
* Have the international understanding: both feeling, willingness and ability to promote international understanding

7

2.2.2 Experiences learning is a very good contribution to students' attitude development

* **As an attitudes:**
* Touch on students' heart
* Moved the students with heart
* Change their view or maybe world view
* Change their attitudes
* At last change their behaviors to communicate with others / to treat others kindly
* To construct a deep international understanding awareness

8

2.2.3 Experiences learning is a good method to develop students' global vision or horizental

- **As a teaching method:**
- Offer opportunity to let students' feeling and touch on another civilization totally different from China right now
- Make all of their knowledge of globalization to be seen and to be touched as truth
- As a practice to train students' ability as a global citizen
- Promote students to think deeply about the international relationships of the world
- Promote students to treasure the peace, the world peace

9

2.2.4 Experiences learning empowers students' ability and willingness to action

- **As a teaching method:**
- Offer opportunity to let students see, hear and experience the concentration and hard work both from students and from the society (like waiter or waitress in shop, people on the road to point the road and direction to students) in Japan
- Promote students' willingness to act or do things in good and kind behaviors
- Training students' skill to imitate to action in a kind and gentle way or behaviors
- Promote students' willingness to try to construct a better social environment
- Let students to treasure the respect among people

10

2.3 Conclusion and Inspiration

- Knowledge education does not work for attitudes and behavior change for children, but knowledge education does work for adult's some behaviors change
- Attitudes and behaviors change is depended on experience learning or learning by doing

11

3. The Construction of Experiencial Learning Strategy

- **3.1 Concept: Experiential learning**
- **3.2 Factors and Process**
- **3.3 Strategy for ESD Campus Asia**

12

3.1 Concept: Experiential learning

- Based on psychological characteristics and laws of the students, experiential learning shows course content through real events or creating situations, and then enables students to experience, understand and construct knowledge and emotion, attitude and generate meaning, and put them into practice.
- The concept of experiential learning is attached to the presence of student's life from the perspective of life philosophy and Constructivism (John Dewey, J. Piaget, Lev Vygotsky etc.)

13

Kolb's experiential learning

- Core idea:
- knowledge is created through transformation of experience.
- The learner has priority over subject matter knowledge of the teachers.

14

3.2 Factors & Process

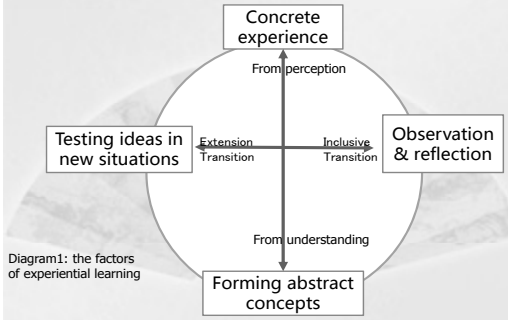


Diagram1: the factors of experiential learning

15

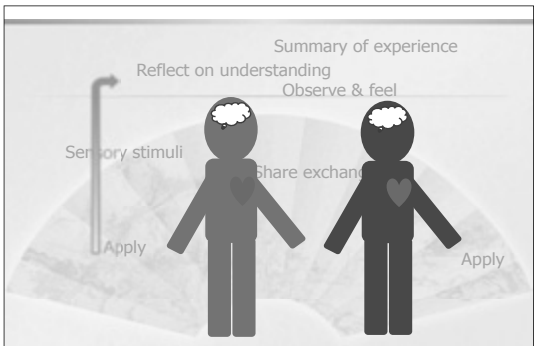


Diagram2: the process of experiential learning from individual perspective

16

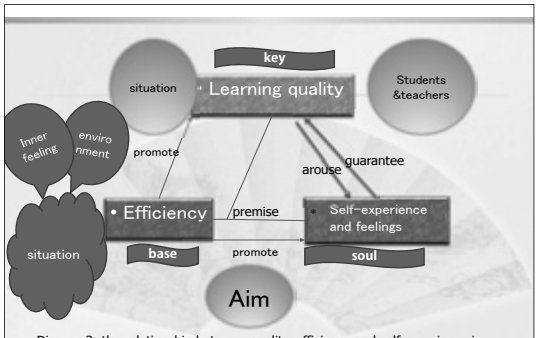
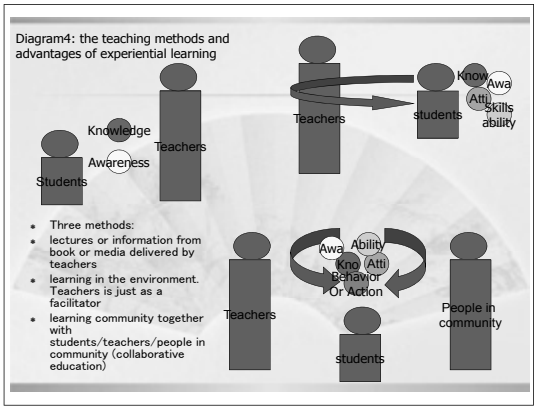


Diagram3: the relationship between quality, efficiency and self-experience in experiential learning

17



18

3.3 Strategy for ESD Campus Asia

- A) Teaching methods: make experience learning teaching method into the mainstream education method areas to let pre-service teacher have the preparation in method in ESD
- B) Create stimulate situation and well-organized activities: experience indirectly and directly
- C) critical thinking with Environmental information—under the modern society with huge information everyday and construct the inner cognition, attitude and core value

19

- D) Real world learning – make the education linked with the real world issues, based on real world issues to learning and practice
- E) Cooperative learning as the way to improve ability and achievement of students
- F) Expand experience and imagination: add others' experience to personal experience and using what students learn through this activity to create more imagination

20

4. Suggestion for ESD Campus Project in the future

- **4.2 Suggestions for HU, the leadship of ESD Campus**
- **4.2.1 Students' learning in Japan**
- Keep the summer holiday learning
- If possible, expanding participating students from 5to 10 or more
- **4.2.2 Developing Students' forum**
- based on action research in the real world issues or some other designs in education activities
- **4.2.3 Linked with some initiatives at UN level or international level to enlarge the influences**

21

Thanks for your attention!

22

Outcomes and Prospects in Chulalongkorn University
タイ・チュラロンコン大学における成果と展望

Outcomes and Prospects of ESD Campus Asia Project

Associate Professor Charoonsri Madiloggovit, Phd.
26 October 2014

1

Background

❑ Chulalongkorn University joined the ESD Campus Asia project in 2013

2

@HU
18-26 August 2013

@ CU
4-13 September 2013

3

- Exchange 5 undergraduate students each year

2013

2014

4

4

Selection Criteria for the Exchange Students

- Undergraduate student
- Passed ESD course
- Third year student (5 yrs CU edu curriculum)
- Any major of study
- Can speak English

5

5

Activities

- In classroom
- Outside classroom
  - Study trip
  - Cultural exchange

6

6

Activities in Classroom

- Lecture and Discussion
- Requirement to share ESD experiences to both CU undergraduate and graduate students who are studying ESD course in that semester

7

7

Activities Outside Classroom

- Study trip
  - Mangrove forest planting
  - Museum of Agriculture
  - Chulalongkorn University Demonstration School
  - Private enterprise
- Cultural exchange
  - Eating
  - Living
  - Shopping
  - Sight-seeing
  - Meeting new friends

8

8

Mangrove forest planting → To preserve ecosystem so fish can live and plants can grow → …… to restore livelihoods and prosperity and create awareness of the benefits of the mangroves

9

Museum trip

- to visit exhibitions at the **Golden Jubilee Museum of Agriculture** in Pathumthani province to learn about His Majesty the King's agricultural initiatives and royal projects.
- The museum shows the development of agriculture and modern agricultural technology, covering each aspect of land development, forestry, fishery, animal husbandry, and ecology. Also it has rice demonstration fields, and presentations on the lifestyles of Thai farmers by region.

10

Visit Chulalongkorn University Demonstration School

to observe learning and teaching in school

11

Visit private enterprise

To learn how SCG (Siam Cement Groups) conduct business in line with good corporate governance and sustainable development principles throughout 100 years. The Group's longstanding tradition of learning, adjustment and development in all areas has enabled SCG to survive the wave of crises and challenges and earn widespread recognition as a role model for other businesses, both locally and internationally.

12

Outcomes
of
ESD Campus Asia project

13

3 groups of student gain the direct and indirect benefits.

year	Group 1 exchange undergraduate students
2013	5
2014	5

Direct benefits from exchange program

14

Indirect benefits from attending the seminar (sharing ESD experience in HU and CU)

Year	Group 2 Undergraduate students studying ESD at CU	Group 3 Graduate students studying ESD at CU
2013	259	301
2014	226	216

15

Total numbers of students

	Direct benefit	Indirect benefit		Total
	G1. Exchange students	G2. Undergraduate students studying ESD at CU	G3. Graduate students studying ESD at CU	
2013	5	259	301	565
2014	5	226	216	447
Total	10	485	517	1,012

16

Results of the evaluation

The 2 hours seminar on 9 -10 September 2013

- 90% of all students satisfy with the seminar (knowledge is mostly for undergraduate level)
- 95% of all students would like to join ESD Campus Asia project.

17

Also indirect benefits for public and CU community (know the ESD movement)

Giving interview about ESD Campus Asia Project for publishing in CU English magazine

18

18

Social Awareness

Against Amnesty Bill Protest in November 2013

19

More cooperation among organizations, universities and faculty members (Lecturers came from other universities, faculties and departments)

20

MOU : enhancing cooperation

- CU and HU signed MOU in May 2014 to enhance the cooperation and to develop academic and cultural interchange, scientific research and other activities.

21

21

Expanding human network
Never ending relationships

Visiting friends in Korea last summer

22

22

In conclusion

23

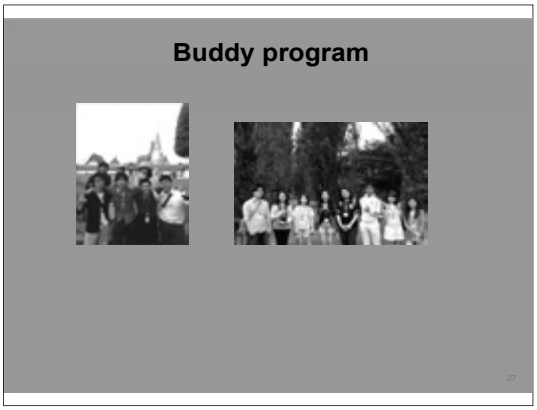
Collaborative learning

24

24

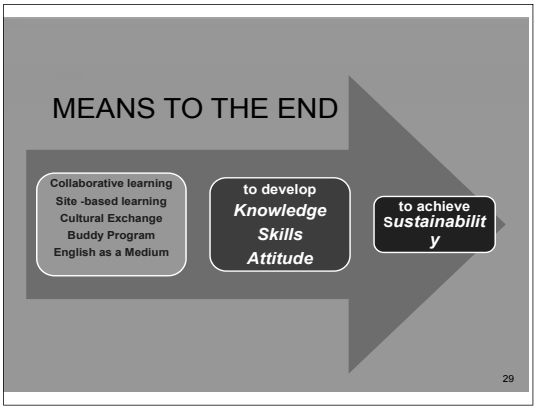
25

26

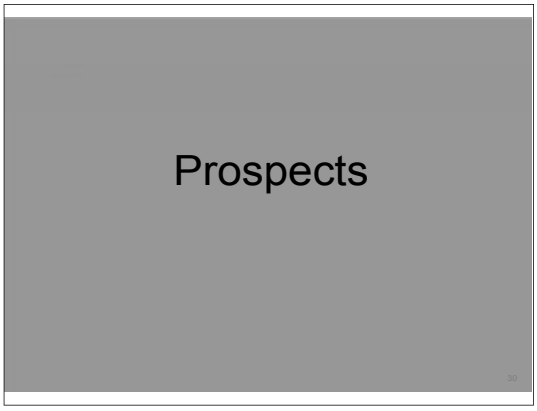


27

28



29



30

Prospects

- Increase the number of exchange students
- Allow graduate students to join the program
- Expand ESD concept to sattlelite school such as Chulalongkorn University Demonstration School that ESD encompass more than environmental issues

31

31

More Prospects

- More involve in the community development
- Set up the blog or facebook for ESD alumni to share their experiences or any ideas about sustainable development.

32

32

25

Hokkaido UNESCO School Colloquium

Host: Faculty of Education, Hokkaido University
Venue: Room B (Lecture Room)

Summary

By Takashi Nomura, Associate Professor, Hokkaido University of Education Kushiro Campus ESD Promotion Center (Session Moderator)

In the final year of the UN Decade of Education for Sustainable Development (DESD), attendees at this session summarized the activities of UNESCO Associated Schools, which have played a central role in implementing ESD in school environments, and involved discussions on post-DESD prospects. In particular, next-generation youth development and the empowerment of teachers to support such development were stressed as future ESD prospects.

To support in-depth discussions on the summary and prospects, the session featured presentations by representatives of secondary schools within the UNESCO Associated School network, a board of education supporting the activities of such schools, and universities. The speakers were Fusayuki Kanda (the former Director of Hokkaido University of Education's Kushiro Campus ESD Promotion Center, which supports the activities of UNESCO Associated Schools in Hokkaido), Chihiro Sakai (the current Deputy Director of the Center), Yuji Kanazawa (representing the Rausu Town Board of Education, which has registered all schools in the town – kindergartens, elementary schools, junior high schools and a high school – as UNESCO Associated Schools), Yoshihiko Matsuyama from Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School (a UNESCO Associated School promoting education for international exchanges and international understanding), and Takayuki Gamo (representing Sapporo Odori High School as another UNESCO Associated School).

Below are summaries of the five presentations, which were based on the perspectives of next-generation youth development and teacher empowerment.

(1) Dr. Kanda stressed, based on the UNESCO Constitution, the importance of policy continuity and horizontal cooperation among UNESCO Associated Schools. (2) Based on his practice of school education in eastern Hokkaido, Mr. Sakai outlined the importance of implementing a shift from classroom understanding to behavioral understanding in order to support the development of active future leaders. He also highlighted the significance of developing mutual education involving locals who will support the development of future leaders. (3) Mr. Kanazawa highlighted the importance of developing bear-related studies, which have been systematized by local schools and Shiretoko Nature Foundation, into Shiretoko-related studies as part of community education. He also stressed the significance of raising the awareness of teachers through workplace transfers and improving teacher training programs. (4) Mr. Matsuyama spoke about promoting education for international understanding at his school under a six-year unified lower and upper secondary school program. He underlined the importance of obtaining Super Global High School (SGH) certification to encourage the development of communication skills and problem-solving abilities among students, implementing practical activities, and collaborating with universities and local communities to build problem-solving expertise. (5) Mr. Gamo outlined education for international understanding at the part-time credit-system high school where he works, stressing the importance of promoting such education among students to ensure enhanced support for and sharing of learning by students and teachers.

The session highlighted that UNESCO Associated Schools fostering next-generation leaders based on a post-DESD agenda must remain open to all schools supporting the UNESCO Constitution, and that they must maintain a vision that combines student growth with mutual learning involving teachers and locals. Such an approach will help to address issues faced by individual schools and foster the target abilities and attitudes among those involved.

Presentation

Popularization of UNESCO Associated Schools in Hokkaido and Related Issues

Fusayuki Kanda
former professor at
Hokkaido University of Education

Japan's ASP Univ Net – a network of universities promoting ESD – provides support to institutions applying for UNESCO Associated School status. The presentation will highlight support for UNESCO Associated Schools in Hokkaido provided by the Hokkaido University of Education Kushiro Campus primarily via its ESD Promotion Center.

Learning about Bears and UNESCO Associated Schools in Rausu Town

Yuji Kanazawa
Manager, Nature Education Section,
Rausu Town Board of Education

All schools in Rausu Town are registered as UNESCO Associated Schools. Against this background, the presentation will highlight education on bears, which forms the core of local natural environment educational programs and is expanding to include information on wildlife and relationships between people and the natural environment.

Enhanced Educational Value for UNESCO Associated Schools in Hokkaido – Challenges and Prospects of ESD

Chihiro Sakai
Associate Professor and Deputy Director,
Hokkaido University of Education
Kushiro Campus ESD Promotion Cente

The presentation will outline the educational value of ESD in teaching at UNESCO Associated Schools in Hokkaido, and will highlight future initiatives planned at the ESD Promotion Center regarding investigation and research on related challenges and prospects (i.e., educational value, content and methods of ESD).

ESD Initiatives at a Secondary School

Yoshihiko Matsuyama
Hokkaido Noboribetsu
Akebi Secondary School

The presentation will highlight ESD initiatives at Hokkaido's only integrated junior and senior high school (as of October 2014) based on its ESD calendar.

The Past and Future of UNESCO Associated Schools – The Case of Sapporo Odori High School

Takayuki Gamo
Sapporo Odori
High School

The presentation will outline the objectives of Sapporo Odori High School's assumption of UNESCO Associated School status and highlight the school's past activities based on these objectives, related achievements and future challenges.

北海道UNESCOスクール・コロキウム

主催: 北海道大学教育学研究院
会場: Room B（小講堂）

サマリー

報告者：北海道教育大学釧路校ESD推進センター事務局長准教授　野村　卓(司会担当)

本分科会は、持続可能な発展のための教育の10年(DESD)の最終年にあたり、これまで学校教育におけるESD実践を中核的に担ってきたユネスコスクール活動の総括とポストDESDの展望について議論を行った。特に、将来のESD展望の視点として、重点を置いたのが「次世代YOUTHの養成」並びに、これらを支える「教員のエンパワメント」の2点であった。

分科会では、この総括および展望の議論を深めるために、ユネスコスクール実践を展開している高等学校およびユネスコスクール活動を支援する教育委員会、大学関係者から報告をお願いした。報告としては北海道のユネスコスクール活動支援を行う北海道教育大学釧路校ESD推進センターから、前・センター長の神田房行氏、現・副センター長の境智洋氏、北海道で町内の幼稚園、小学校、中学校、高等学校のすべての学校をユネスコスクールに登録した羅臼町教育委員会から金澤裕司氏、ユネスコスクールにおいて国際交流・国際理解教育を推進する登別明日中等教育学校の松山美彦氏、札幌市立札幌大通高等学校の蒲生崇之氏に依頼した。

以下、分科会の2つの視点「次世代YOUTHの養成」並びに「教員のエンパワメント」を中心に、5報告の概要を取りまとめる。

①神田報告はユネスコ憲章を土台に、政策的継続性の重要性と共に、ユネスコスクール間の、いわゆる横の連携の重要性が提起された。②境報告は自身の北海道東の学校教育実践を土台にして、知の体系を“学校知”から“行動知”に転換させ、次世代を行動主体に育て上げる重要性と共に、これを支える地域の大人との相互学習形成の重要性が提起された。③金澤報告は町内学校および知床財団と形成してきたクマ学習の体系化を通して地元学としての知床学へと発展させる重要性と共に、異動を伴う教員の啓発、教員研修の充実を図る重要性が提起された。④松山報告は中学校と高等学校の6年間の一貫教育校において、国際理解教育を推進するにあたり、コミュニケーション能力と課題解決能力を高めるためにスーパーグローバルハイスクール(SGH)の認定を受けながら、実践活動を展開し、課題解決における専門性の高まりに対して大学や地域との連携の重要性が提起された。⑤蒲生報告は定時制・単位制学校が取り組む国際理解教育が生徒自身の課題でもあることにより、生徒及び教員との共感・共有の深化の重要性が提起された。

改めて、ポストDESDを念頭においた次世代を養成するユネスコスクールは、ユネスコ憲章を共有する全ての学校に対して門戸を開きながらも、実践する学校はそれぞれで抱えている課題の解決や伸ばしたい能力や態度の涵養を図るために、児童・生徒の成長のみならず、教員や地域の大人と連携した相互学習を図り、一体となった成長の視点が求められることが確認された分科会であった。

プレゼンテーション

これまでの北海道ユネスコスクールの普及と課題

神田　房行
前北海道教育大学
教授

我が国ではESDを推進する大学ネットワーク(ASP　Univ　Net)をつくりユネスコスクール加盟への支援を行ってきた。北海道教育大学釧路校がESD推進センターを中心に取り組んできた北海道におけるユネスコスクール支援について報告する。

羅臼町におけるクマ学習とユネスコスクール

金澤　裕司
羅臼町教育委員会
自然教育主幹

町内の全学校がユネスコスクールとして登録されている羅臼町において自然環境教育の核となり、野生動物全般や自然環境と人との関係を考えさせる教育へと広がりつつあるヒグマ教育について報告する。

北海道ユネスコスクールの教育的価値の探求～ESDの課題と展望～

境　智洋
北海道教育大学
釧路校ESD推進センター
副センター長・准教授

北海道のユネスコスクール教育実践におけるESDの教育的価値、またそれらの課題と展望の調査・研究(ESDの教育的価値・教育内容・教育　方法)について、今後センターとして取り組むことについて報告する。

中等教育学校におけるESDの取り組み

松山　美彦
登別明日中等教育学校

全道で唯一の中等教育学校(2014年10月現在)におけるESDの取り組みを、ESDカレンダーに基きながら報告する。

ユネスコスクールとしての今までとこれから

蒲生　崇之
市立札幌大通高等学校

市立札幌大通高等学校の場合大通高校がユネスコスクールに加盟したねらいと、それに基づく今までの活動内容、およびその成果と今後の課題について報告する。

Fusayuki Kanda
神田　房行

5th International ESD Symposium: Strategic ESD in the Next Generation

Popularization of UNESCO Associated Schools in Hokkaido and Related Issues
これまでの北海道ユネスコスクールの普及と課題

Spread and problems of UNESCO Associated School in Hokkaido
北海道におけるユネスコスクールの普及と課題

Former Director of ESD Promotion Center of Hokkaido University of Education
元北海道教育大学釧路校 ESD推進センター長
KANDA Fusayuki
神田房行

Fusayuki KANDA Hokkaido University of Education

1

Concept of Sustainable Development
持続可能な開発

「将来の世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズも満足させるような開発」

The **World Commission on Environment and Development** (**WCED** 環境と開発に関する世界委員会)
Our Common Future（われら共有の未来）
The **Brundtland Commission 1987**

Fusayuki KANDA Hokkaido University of Education

2

ESD
（Education for sustainable development）
持続可能な開発のための教育

環境教育の進化した段階
「個人の態度の変化」から「社会的、経済的、政治的構造及びライフスタイルの転換」へ、あるいは、「気づき、知識、理解、技術の習得」から「公正、正義、民主主義、尊敬、行動する力」など、前者を内包しつつ射程を広げている。

Fusayuki KANDA Hokkaido University of Education

3

Thessaloniki Declaration
テサロニキ宣言　（Thessaloniki 1997）
国連の会議で採択された29章で構成される宣言文

10. 持続可能性に向けた教育全体の再構築には、全ての国のあらゆるレベルの学校教育・学校外教育が含まれている。持続可能性という概念は、環境だけではなく、貧困、人口、健康、食糧の確保、民主主義、人権、平和をも包含するものである。最終的には、持続可能性は道徳的・倫理的規範であり、そこには尊重すべき文化的多様性や伝統的知識が内在している。

11. 環境教育は今日までトビリシ環境教育政府間会議の勧告の枠内で発展し、進化して、アジェンダ21 や他の主要な国連会議で議論されるようなグローバルな問題を幅広く取り上げてきており、持続可能性のための教育としても扱われ続けてさた。このことから、環境教育を「環境と持続可能性のための教育」と表現してもかまわないといえる。

Fusayuki KANDA Hokkaido University of Education

4

New Trend of Environmental Education
環境教育の新しい方向性

- Central Environmental Council（中央環境審議会 1999）は、「これからの環境教育・環境学習―持続可能な社会をめざして―」
- 環境教育・環境学習は持続可能な社会をめざして行うものである
- 環境のみならず、平和、識字、開発、ジェンダーなど幅広いテーマで市民へ啓発活動を展開していくことの必要性が認識

Fusayuki KANDA Hokkaido University of Education

5

UNESCO Associated School
ユネスコ・スクールとは

- ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校
- ユネスコ憲章第1条目的及び任務

この機関の目的は、国際連合憲章が世界の諸人民に対して人種、性、言葉又は宗教の差別なく確認している正義、法の支配、人権及び基本的自由に対する普遍的な尊重を助長するために教育、科学及び文化を通じて諸国民の間の協力を促進することによって、平和及び安全に貢献することである。

Fusayuki KANDA Hokkaido University of Education

6

Purpose of UNESCO Associated School
ユネスコスクールの活動目的

- ユネスコ・スクール・ネットワークの活用による世界中の学校と生徒間・教師間の交流を通じ、情報や体験を分かち合うこと
- 地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指すこと

Fusayuki KANDA Hokkaido University of Education

7

Purpose of ESD and UNESCO Associated School
ユネスコ・スクールとESDのテーマは同じ

ESD
環境教育
国際理解教育
エネルギー教育
世界遺産・地域文化財などに関する教育
持続可能な社会づくりのための担い手作りのための教育

UNESCO Associated School
地球規模の問題に対する国連システムの理解
人権、民主主義の理解と促進
国際理解教育
環境教育
その他、ユネスコの理念に沿ったテーマ

Fusayuki KANDA Hokkaido University of Education

8

Qualification for Entry as UNESCO Associated School
参加資格

- 就学前教育・小学校・中学校・高等学校・技術学校・職業学校、教員養成学校は、国公私立を問わずユネスコ・スクールに加盟することができる
- ユネスコの理念に沿った取り組みを継続的に実施していることが必要

Fusayuki KANDA　Hokkaido University of Education

9

Duty of UNESCO Associated Schools
参加校の義務

- 法的拘束・義務はない
- 年に一度日本ユネスコ国内委員会に報告書の提出が必要
- ユネスコが提案する教材が送られ、教育現場での実験・評価を依頼されることがある
- ユネスコから年に数回、世界のユネスコ・スクールの活動報告が記載されている情報誌が送付されるとともに、ユネスコが行う様々な活動に参加する機会がある

Fusayuki KANDA　Hokkaido University of Education

10

Advantage of UNESCO Associated Schools
ユネスコスクール加盟のメリット

国際交流の機会の増大
- 世界のユネスコ・スクールの活動情報の提供
- 世界のユネスコ・スクールと交流する機会の増加
- 韓国、中国等海外との教員交流
- 世界の教育事情、国連機関の活動の把握

国内の連携強化
- ESDのための教材、情報の提供
- ユネスコ・スクールHPを通じた情報交換
- ワークショップ、研修会への参加
- 国内の関係機関との連携強化

Fusayuki KANDA　Hokkaido University of Education

11

Sustainable Schools in UK
英国におけるサステイナブル・スクール

- 英国の教育政策のひとつ
- 国連のDESD（持続可能な開発のための教育の10年）の流れを受けての活動
- 英国の全ての学校が持続可能な開発に取り組むことを目指す

- エコ・スクールとは異なる
- 英国の教育は地方分権主義的なシステム・・・強制、義務はない。緩やかな指針

Fusayuki KANDA　Hokkaido University of Education

12

Opinions of Children to Sustainable Schools（DfES, 2006）
学校がどのように持続可能性に取り組むことができるか

- 地域の環境に不満ー交通の不安全さ、汚染、治安の悪さ、建物の建設による自然破壊など
- 反社会的な行動に対する不安ー人種差別や公共物の破壊、敬意がかけていることなど
- 世界の貧困や不公平、戦争への不安
- 将来世代を軽視した自然資源の使用、生活の質を無視した汚染、大人たちが環境問題に対して関心がないこと

Fusayuki KANDA　Hokkaido University of Education

13

ASPUnivNet
Interuniversity Network Supporting the UNESCO Associated School Project Network
ユネスコスクール支援大学間ネットワーク

ユネスコスクールの活動は、1953年にASPnet (UNESCO Associated Schools Project Network)として、ユネスコ憲章に示された理念を学校現場で実践するために発足して以来、長い歴史があります。世界の民間のユネスコ活動の発祥が仙台であったこともあり、2007年に仙台の宮城教育大学で行われた「国際理解教育シンポジウム」を契機に、気仙沼市を中心に地域でのASPnetへの加盟申請が一気に増えました。学校教育への大学の協力に加え、申請を大学が支援したことが、推進力となりました。2008年11月には、「ユネスコスクールの集い」（主催：文部科学省、宮城教育大学）が開催され、ユネスコスクールの支援を考える大学の関係者が集まり、大学間ネットワークの設立が提唱されました。同年12月2日～5日「ESD国際フォーラム2008」（主催：文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、ユネスコ、共催：国際連合大学、財団法人ユネスコ・アジア文化センター（現在は公益財団法人）、宮城教育大学）が、東京の国連大学で開催され、そこで正式にユネスコスクール支援大学間ネットワーク（ASPUnivNet）の発足を内外に示すこととなりました。このときの参加８大学が、現在は17大学となっています。

Fusayuki KANDA　Hokkaido University of Education

14

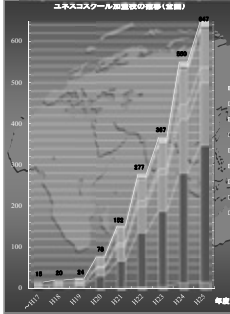
Member Universities

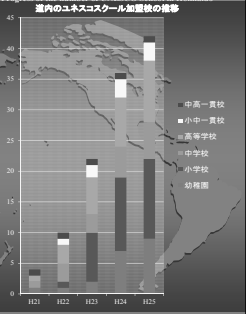
What can ASPUnivNet do?

Fusayuki KANDA　Hokkaido University of Education

15

Fusayuki KANDA　Hokkaido University of Education





Fusayuki KANDA　Hokkaido University of Education

16

Yuji Kanazawa
金澤　裕司

Learning about Bears and UNESCO Associated Schools in Rausu Town
羅臼町におけるクマ学習とユネスコスクール

2014. 10. 25

羅臼町のクマ授業

羅臼町のユネスコスクールとESD

第5回　ESD国際シンポジウム
北海道ユネスコスクール・コロキウム

＊このプレゼンテーションの一部には、公益財団法人知床財団の資料も使われています。

羅臼町教育委員会
自然環境教育主幹　金澤裕司

1

内　　容

- 羅臼町の学校とヒグマの現状
- クマ学習の誕生と発展
- 羅臼町クマ学習の構造
- 展望と二つの課題

2

羅臼町について

人口　5,676人　　面積　397.91 km²
学校　幼稚園2園　　小学校2校
　　中学校2校　　高等学校1校

3

羅　臼　町　内　の　学　校

- 知床岬地区（無人）
- 相泊地区（無人）
- 羅臼幼稚園
  羅臼小学校
  羅臼中学校
- 羅臼高校
- 春松幼稚園
  春松小学校
  春松中学校

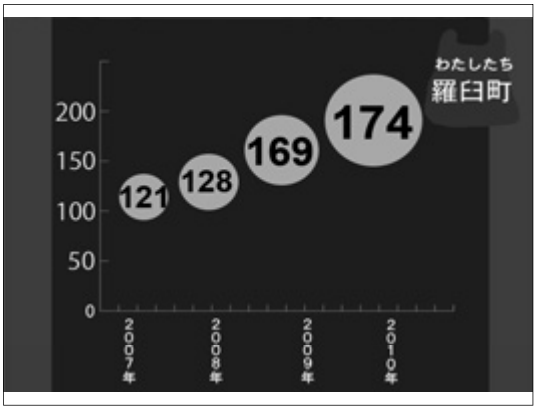
4

5

6

7

8

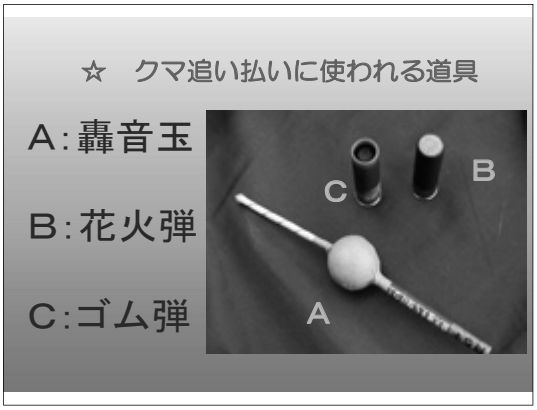


9

10

11

12



13

内　　容

- 羅臼町の学校とヒグマの現状
- クマ学習の誕生と発展
- 羅臼町クマ学習の構造
- 展望と二つの課題

14

羅臼町クマ学習成立の過程

- 1999年9月「ヒグマフォーラムin羅臼」
- 散発的なクマ学習はあったが系統だてられたものではなかった。
- 知床財団も住民への啓発活動の必要に迫られていた。
- 中高一貫教育が計画されていた。
- 「知床学」の構築が必要となった。

15

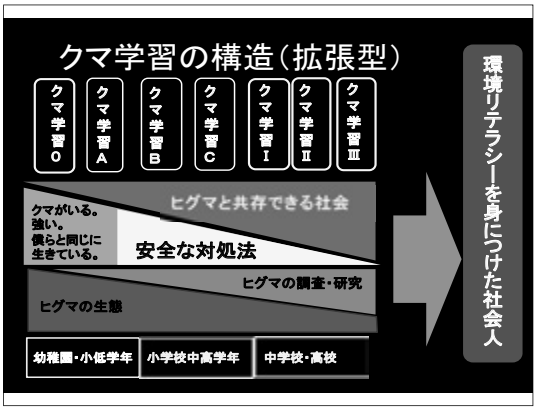
16

17

内　　容

- 羅臼町の学校とヒグマの現状
- クマ学習の誕生と発展
- 羅臼町クマ学習の構造と実際
- 展望と二つの課題

18



19

幼稚園でのクマ授業

20

幼稚園でのクマ授業

21

小学５年生のクマ学習

22

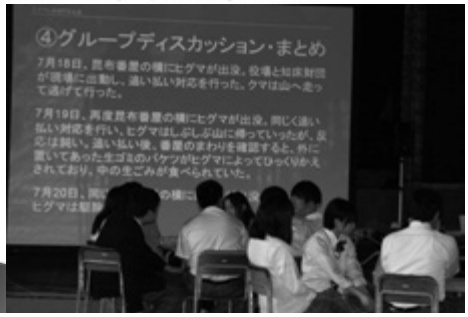
中学1年生　クマ学習　Ⅰ

23

中学3年生　クマ学習Ⅱ

24

高校２年生によるクマ学習Ⅲ グループディスカッション



25

内　　容

- 羅臼町の学校とヒグマの現状
- クマ学習の誕生と発展
- 羅臼町クマ学習の構造
- 展望と二つの課題

26

クマ学習の課題①
学習年齢の拡張

①小学校の壁
カリキュラムへの位置づけ

②教員への啓発
教員研修の機会

ユネスコスクールへの登録

27

クマ学習の課題②
学習対象の拡張

- **クマから野生動物へ**
- **野生生物へ**
- **野生生物から環境へ**

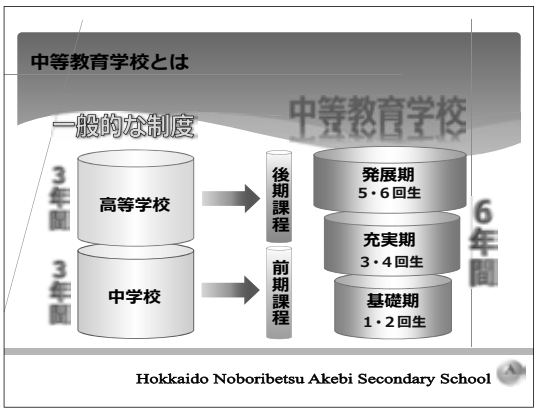
28

29

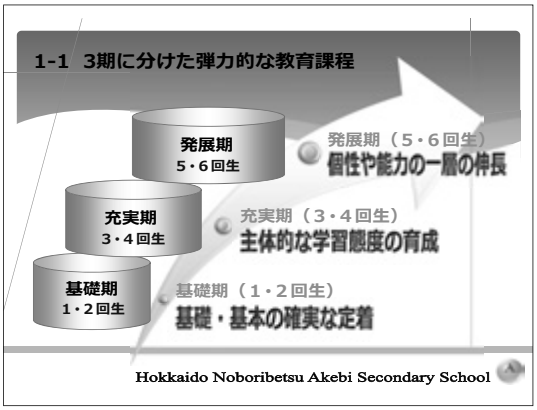
Yoshihiko Matsuyama
松山　美彦

ESD Initiatives at a Secondary School
中等教育学校におけるＥＳＤの取り組み

1



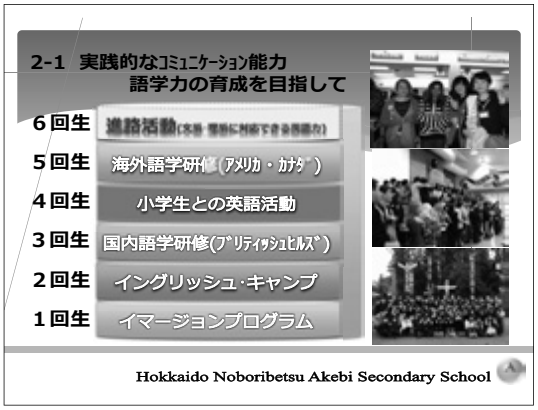
2



3

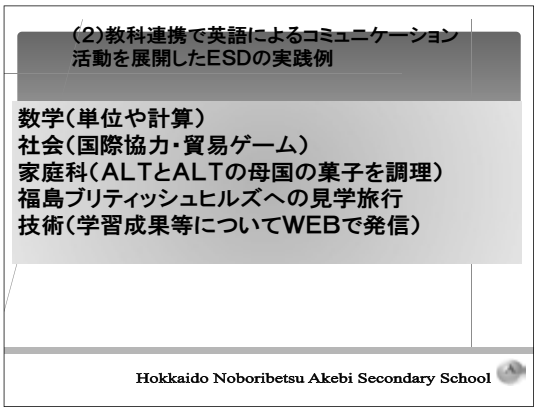
4

5



6

7



8

Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School

9

Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School

10

Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School

11

地域や北海道の良さを学ぶ学習活動の促進

地域の人材や設備等を活用
調べ学習・見学、教育活動の推進

- １回生：地域ウォッチング
- ２回生：職場訪問

国際観光学
地域性を生かした選択科目

- 発展期（６回生）の選択科目
- 地元登別を含め観光に関する見識を深める

Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School

12

室蘭ユネスコ協会と連携したESD活動

Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School

13

室蘭ユネスコ協会と連携したESD活動

Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School

14

室蘭ユネスコ協会と連携したESD活動

Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School

15

室蘭ユネスコ協会と連携したESD活動

Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School

16

室蘭ユネスコ協会と連携したESD活動

Hokkaido Noboribetsu Akebi Secondary School

17

AKB Future Project
『世界の明日を創る』

～未来のグローバルリーダーの育成～

18

スーパーグローバルハイスクール

全国の高等学校等246校（道内9校）が応募

⇩ 企画評価委員会による1次審査（書類審査）

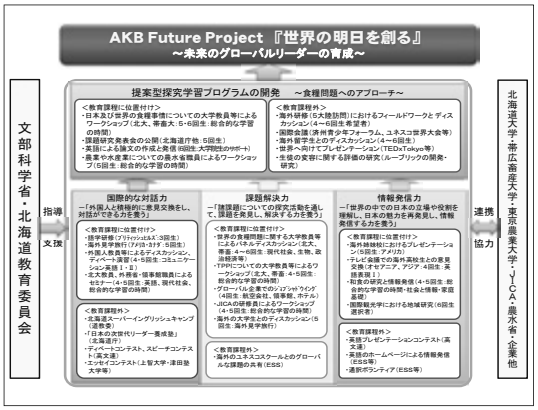
そのうち110校（道内5校）が通過

⇩ 企画評価委員会によるヒアリング

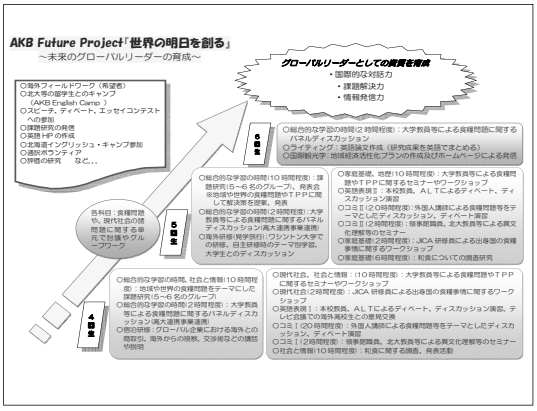
56校（道内3校）が指定

・事業は5年間実施予定（H26~）

19



20



21

☆グローバルリーダー☆

世界的規模の社会課題を発見・解決できる人材

世界的規模で展開されるビジネスで活躍できる人材

グローバル人材とは、

世界に通用する人間であると同時に、日本の良さも自覚した上で働くことのできる人材

22

AKB Future Project では

食糧問題をテーマとした課題研究を実施

↓

＊様々な視点から考察し、課題を解決する力をつける

＊国際的視野をさらに広げる

23

AKB Future Project 3つの柱

○国際的な対話力　「外国人と積極的に意見交換をし、対話ができる力を養う」

○課題解決力　「課題研究や授業における探究活動を通して、課題を発見し、解決する力を養う」

○情報発信力　「世界の中での日本の立場や役割を理解し、日本の魅力を再発見し、情報発信する力を養う」

普段の授業で学習していることがベースとなる

今後、新たに
「外部講師による専門的な内容の講話」
「海外フィールドワーク」
「AKB イングリッシュキャンプ」　など実施

24

課題研究の実施①
（総合的な学習の時間を中心として）

なぜ、課題研究を実施するのか？

論理的思考力や、課題解決力をつける
↓
前期生からの取組を深化させる

世界や日本で解決が望まれる課題を解決する方法を見つけよう

25

課題研究の実施②
（総合的な学習の時間を中心として）

研究テーマは何にするのか？

○地域（北海道）や我が国における食糧問題
○世界における食糧問題

26

課題研究の実施③
（なぜ食糧問題なのか）

＊北海道という地域性→日本の食料基地
（日本の農地の4分の1を占める）

＊胆振という地域性→農業、水産業、酪農、畜産など
（身近に、結構、いろいろなものがある）

＊グローバルな社会課題→多様な視点から考察
経済、環境、食の安全、人口増加など

＊生徒会の『世界食糧デー』の取組

27

課題研究の実施④
（課題研究の進め方）

＊1グループ　4～5名

＊総合的な学習の時間、社会と情報等を中心として実施

＜日　程＞
９月下旬まで　グループ及び研究テーマ決定
10月～12月　情報収集、考察
1月～２月　発表準備
３月初旬～中旬　課題研究発表

28

課題研究の実施⑤
（課題研究の進め方）

＜課題研究のプロセス＞

問題発見　→ 研究テーマの設定 →

情報の収集 → 研究（整理・分析） →

解決方法の提案・発表

29

平成26年度の取組

８月から　食糧や農業に関するセミナーやワークショップの開催
→講師は、北大や帯畜の教員や、ＪＩＣＡ、ＪＥＴＲＯの職員など

８月以降　英語の時間における外国人講師の授業

９月　ＡＫＢ Ｅｎｇｌｉｓｈ Ｃａｍｐ
（後期生希望者対象　２０名程度）
→留学生、外国人との交流やディスカッション
１泊２日の国内留学をニセコ（予定）で実施
もちろんオールイングリッシュ

３月　海外フィールドワーク　（後期生希望者対象　１０名前後）
→今年は、オーストラリア（予定）
５年間の研究期間で５大陸を訪問（予定）

※　通常の授業においても、食糧・農業に関する背景知識や思考力・発信力を高める取組は実施されます。

30

食糧問題へのアプローチ

食糧問題ってどんな問題があるの？

フェアトレード
TPP
気候変動
飢餓
森林伐採
食糧自給率

まだまだいろいろあるけど、どのくらい知ってますか？

31

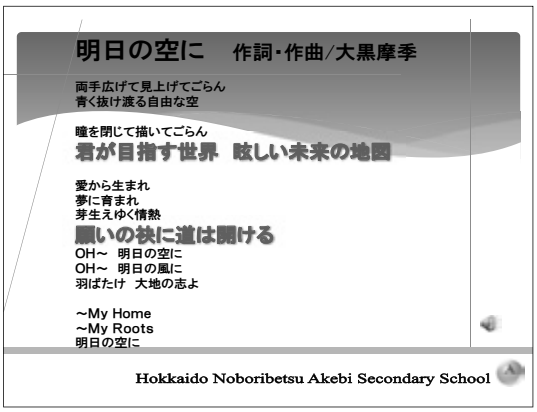
スーパーグローバルハイスクール

■開校の精神　「明日を創る」～ 北海道の将来を担う人材を育む
① 高い知性
② 豊かな人間性
③ 健康な心身
④ 郷土愛と国際性

ＥＳＤ・ＳＧＨ　の取組

世界の明日を創る

32



[Notice]

This report does not include presentation materials from Enhanced Educational Value for UNESCO Associated Schools in Hokkaido ? Challenges and Prospects of ESD (by Chihiro Sakai) and The Past and Future of UNESCO Associated Schools ? The Case of Sapporo Odori High School (by Takayuki Gamo) for various reasons.

［おことわり］

諸事情により、「北海道ユネスコスクールの教育的価値の探求～ ESD の課題と展望～」（境　智洋）、「ユネスコスクールとしての今までとこれから」（蒲生　崇之）の発表資料は掲載しておりません。ご了承ください。

The ESD Student Forum

Host: Hokkaido University ESD Student Forum Organizing Committee
Venue: Auditorium

Summary

By Hiroki Akiyama, junior, School of Education, Hokkaido University

The Parallel Session 3 (ESD Student Forum) featured lively discussions on education in the next generation from student perspectives based on HU School of Education's ESD Campus Asia Project initiatives.

In the Student Presentation section, students who had participated in the ESD Campus Asia Project held annually by HU School of Education gave presentations on what they had learned from related programs held in Japan, China, Korea and Thailand. Special guest Kei Sato, a sophomore at HU's School of Education, shared experiences from his travels in Europe that summer. Hiroki Akiyama gave a presentation on ESD in Japan with focus on the impoverished conditions of rural areas in the background of urban development, the risk of losing indigenous and rural traditional cultures, and future prospects. Masashi Manabe, a sophomore at HU's School of Education, then spoke about ESD initiatives in China. He outlined achievements of environmental education there and highlighted an educational method of stressing the importance of environmental protection to future generations. Hirofumi Nagai, an HU School of Education senior whose studies focus on Korea, expressed the view that mutual understanding transcending nationality, culture and position is required to solve the problems facing humankind, such as population, food and energy issues. Yu Furukawa and Ibuki Wakasawa, both sophomores at HU's School of Education, talked about what they had learned in Thailand, such as how ESD is implemented there and educational system differences between Thailand and Japan. Lastly, Kei Sato, a special guest and a sophomore at HU's School of Education who had traveled in Europe for five weeks that summer, stressed the importance of seeing, hearing and acting for oneself.

Following the presentations, Devon Dublin (the symposium's commentator, a third-year student on a doctoral degree program at HU's Graduate School of Environmental Science and an alumnus of the Center for Sustainability Science (CENSUS)), underlined how the ESD Campus Asia Project had helped students to prepare as leaders of the future, but questioned whether the structure and education of universities can provide students with the abilities and skills necessary to solve international issues. He stressed the importance of communication, active involvement in the real world, having a purpose in life, and multicultural understanding and respect.

The subsequent Discussion and Plenary Feedback session involved bi-focal discussions on levels of ESD currently offered at schools and universities based on the presentations and comments. The first focus was on issues with educational systems. Attendees stated that students tended to study only to pass entrance examinations in many countries (particularly in Japan, China and Korea) because many people think that a diploma from a reputable university is a prerequisite to get ahead in life. The second focus was on the content of education. Presenter Kei Sato contrasted the situation in Europe (where people are often attached to their hometowns and value family get-togethers) to that in Japan (where the population is heavily concentrated in Tokyo and other metropolitan areas), stressing the importance of the former for community development. In view of HU's globalization initiatives, presenter Hirofumi Nagai argued that education for the survival of rural areas, rather than simply for globalization, is also necessary, and that students need to be educated on rural areas as well as on globalization. He is engaged in research on education for the survival of rural communities at the limits of their viability.

This session was significant as a platform for next-generation education leaders to assemble and share views on issues that require ongoing discussion as part of efforts to clarify the purpose and meaning of education.

Presentation

My thoughts on ESD

(1)What I've learned from rural life

Hiroki Akiyama
junior, School of Education,
Hokkaido University

(2)What I learned in Seoul

Yushi Nagai
senior,School of Education,
Hokkaido University

(3)How does experimental education contribute to environmental education?

Masashi Manabe
sophomore, School of Education,
Hokkaido University

(4)Campus Asia 2014 in CU – Culture and Education in Thailand

Ibuki Wakasawa
sophomore, School of Education,
Hokkaido University

Yu Furukawa
sophomore, School of Education,
Hokkaido University

(5) The invitation to "Non credo" School of Education, Hokkaido University

Kei Sato
junior, School of Education,
Hokkaido University

Commentator remarks

Devon Dublin
Junior, Graduate School of Environmental Science, Hokkaido University
Alumnus, Center for Sustainability Science (CENSUS), Hokkaido University

ESD学生フォーラム

主催: 北海道大学 ESD学生フォーラム実行委員会
会場: 講堂

サマリー

報告者：北海道大学教育学部3年　秋山　拓輝

分科会3/ESD学生フォーラムでは、北海道大学教育学部のESDキャンパスアジアプロジェクトの取り組みを元に、学生の立場から見た「次の世代の教育のあり方」について、会場全体で活発な議論が行なわれた。

学生プレゼンテーションでは、北海道大学教育学部が毎年主催しているESDキャンパスアジアプロジェクトの取り組みとしてプログラムの開催場所である、日本、中国、韓国、タイ、で何を学んだかを、それぞれに参加した学生が発表した。また、スペシャル・ゲストである教育学部2年の佐藤慧から、自身のこの夏のヨーロッパ旅行の体験が話された。

秋山は日本でのESDについて報告し、都市の発展の陰での地方の疲弊や先住民族や地方伝統文化の損失の危機と今後の展望を述べた。続いて、中国のESDの取り組みについて教育学部2年の真鍋優志が中国における環境教育の実績と、「環境の保護の重要性をどのように次の世代に伝えていくか」という教育方法を発表した。韓国についての発表では教育学部4年の長井裕史が、私たち人類が抱えるさまざまな問題―人口問題や食料問題、エネルギー問題―を解決していくためには、国や文化、立場を超えてお互いを理解していかなければならないという見解を述べた。教育学部2年の古川優・若澤美吹両氏はタイで学んだことについて発表し、タイでのESD教育のあり方や教育システムの違いを述べた。最後に、スペシャル・ゲストとしてこの夏ヨーロッパで5週間旅をした教育学部2年の佐藤慧が、自分の目で見て、聞いて、行動することの大切さを発表した。

以上のプレゼンテーションを受け、本シンポジウムのコメンテーターである環境科学院博士3年、サステナビリティ学教育センター同窓生のDevon　Dublinは、ESDキャンパスアジアプロジェクトが、学生たちが将来のリーダーになる準備において貢献しているとした上で、大学の仕組みや教育が国際問題を解決できる力を学生に与えることができるのかという課題を投げかけ、コミュニケーション、現実世界との積極的な関わり、人生の目的をもつこと、多文化理解と尊重等の重要性について話した。

全体討論では、以上に述べた発表やコメントを踏まえ、果たして今の学校や大学で行われている教育がどれほど持続可能な教育となっているかについて、以下の2点を議論した。1つ目は、教育制度の問題である。多くの国、とりわけ日本をはじめとして中国や韓国では『良い大学に入学することが良い生活をおくるための必要条件』となってしまっているために、生徒たちの学習は主に“入試”のための学習になってしまっているという議論がなされた。そして2つ目の議論では教育の内容が話し合われた。発表者の佐藤は『現在、日本は東京をはじめとした大都市に人口が集中しているが、ヨーロッパでは多くの人が自分の街に愛着をもっていて、家族の団欒を大切にしている。こういったものが地域のコミュニティーづくりには大事なのではないか。』と意見を述べた。また、北海道大学がグローバル化を目指していることを受けて、限界集落の存続のための教育を研究している発表者の長井は『グローバル化のための教育だけが重要なのではなく、まちの存続のための教育のような、地方のための教育も必要。一方の教育だけではなく、両方の教育を受けることが必要だと思う。』と意見を述べた。

教育の目的と意義を追求するうえで、次世代の教育を担う人材が集まり、今後も継続的に議論してゆくべき課題を共有し合えたことは、本分科会の大きな成果である。

プレゼンテーション　私がESD（持続可能な開発のための教育）について考えたこと

(1) What I've learned from rural life

秋山　拓輝
北海道大学教育学部3年

(2) What I learned in Seoul

長井　裕史
北海道大学教育学部4年

(3) How does experimental education contribute to environmental education.

眞鍋　優志
北海道大学教育学部2年

(4) Campus Asia 2014 in CU - Culture and Education in Thailand -

若澤 美吹
北海道大学
教育学部2年

古川　優
北海道大学
教育学部2年

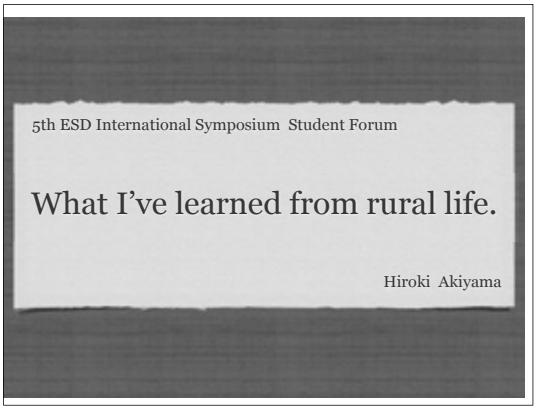
(5) The invitation to "Non credo" School of Education, Hokkaido University

佐藤　慧
北海道大学教育学部3年

コメンテーターから

Devon Dublin
北海道大学大学院環境科学院3年
（サステナビリティ学教育研究センター 同窓生）

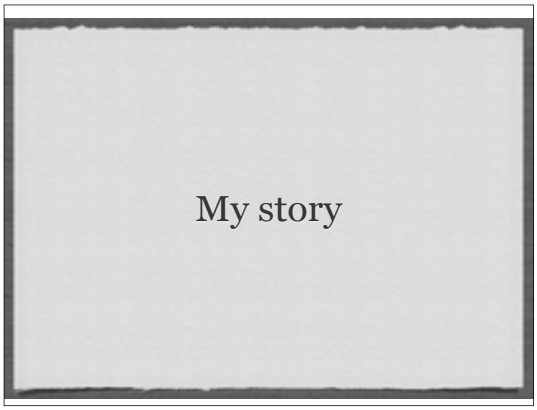
（1）What I' ve learned from rural life



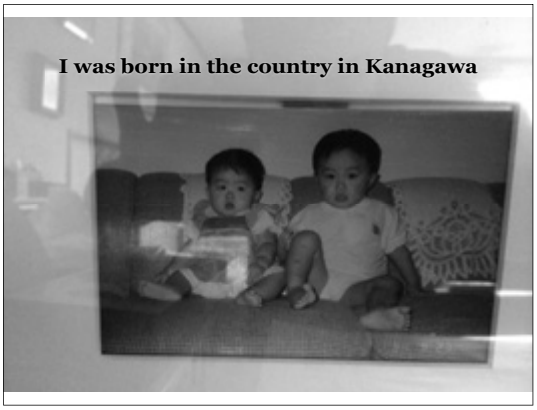
1

2

3



4

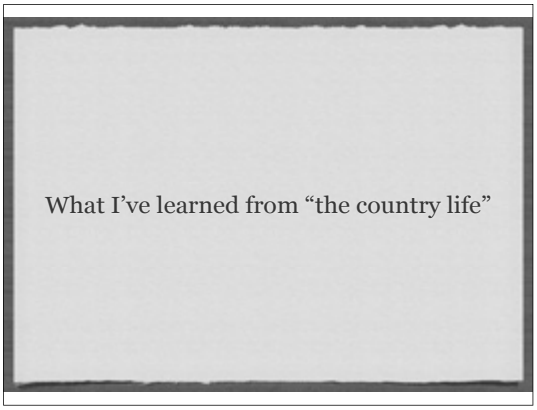


5

6

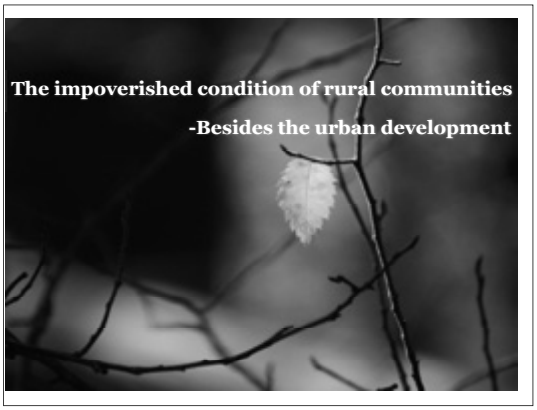
7

8



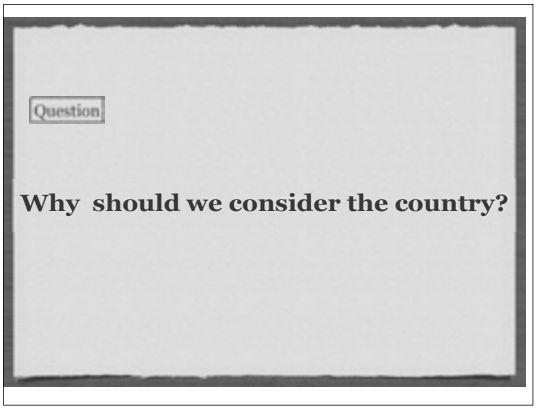
9

10

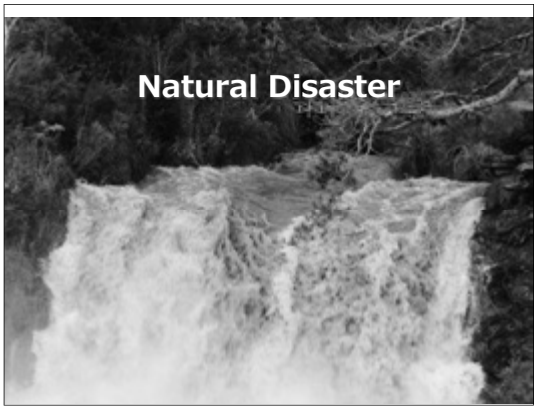


11

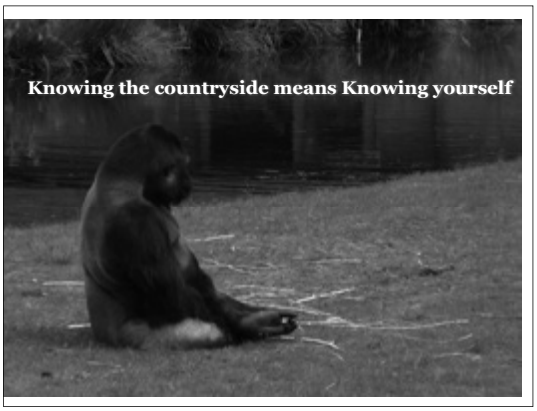
12



13



14



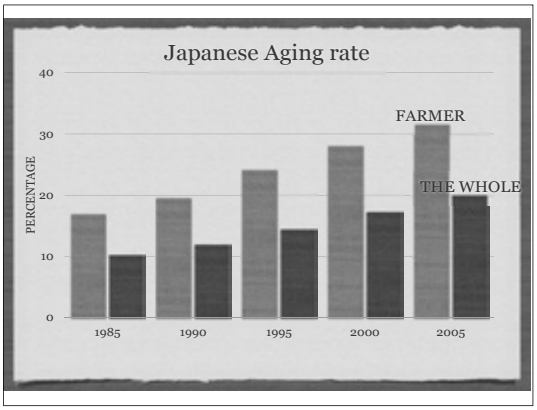
15

16

However....

17

18



19

20

We have some hope.

21

Now is the chance to change your view for the country side.

Facebook

Volunteer

22

In my opinion

It is the most important that you pay attention to rural area and take some actions.

23

Change before you have to
-Jack Welch

24

Thank you for listening

25

（2）What I learned in Seoul

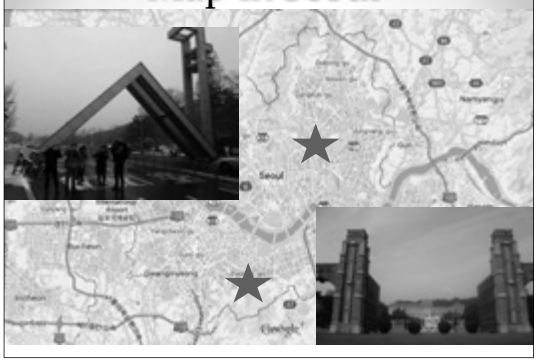
ESD Campus Asia in Seoul National University (SNU)

December16~23 in 2012

Yushi Nagai

1

Map in Seoul



2

ESD Program in SNU

	Morning(9:45-12:15)	Afternoon(13:45-17:00)	Evening
12/16 Sun	Arrival in Soul / Contrasting current development		Introduction and dinner boxes
12/17Mon	Class 1	Class 2	Invitaion dinner
12/18 Tue	Class 3	Class 4	Free
12/19Wed	Due to election in Korea (We will start later)	Class 5	Free
12/20 Thu	Class 6	Class 7	Small evening lesson including free dinner
12/21 Fri	Class 8	Class 9	Farewell Party
12/22 Sat	Options and recommendations are welcomed		
12/23 Sun	Departure		

3

"Water of Life"

4

[Group A]
- can look
- cannot use hands

[Group B]
- can use hands
- cannot look

Group A → Group B → Pour glasses

direct　　action

5

Comment and idea

a gap of each group's position

↓

difficult to understand what's really bothering other group

↓

difficult to cooperate with each group

6

Social problem

gap of two groups = gap of background of people

Group A=employers, developed countries
Group B=employees, developing countries

➡ **unequal** situation
social problem ex. social gap, civil war

7

http://www.myticket.jp/acce2013-5.jpeg

http://cache5.amanaimages.com/cen3tzG4fTr7Gtw1PoeRez/25507000097.jpg

8

In the game…

Not understand/cooperate
➡ cannot pour glasses to spill water

unsustainable situation

Understanding each group is important to share water and to pour grasses.

9

Key point for sustainable development

- **understand** a social gap or other people

➡ Education for Sustainable Development(ESD)

10

11

http://ja.wikipedia.org

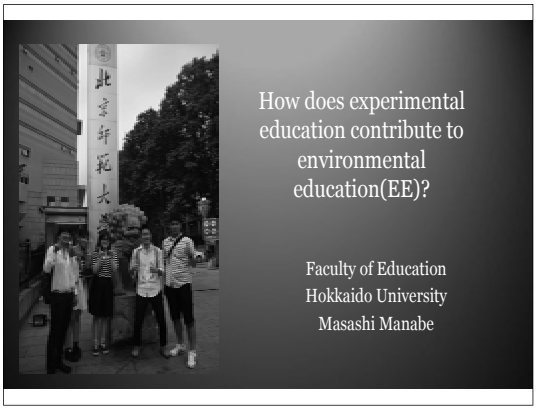
12

Thank you for listening!!

13

Masashi Manabe
眞鍋　優志

（3）How does experimental education contribute to environmental education.



1

What is effective way to teach students essential parts of ESD and EE ?

2

Activities by students themselves

3

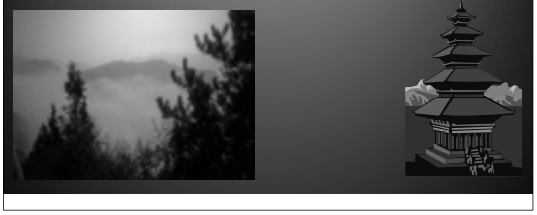
My topic

Importance of activities in ESD and EE

4

Contents

① ESD in China
② Activities in China
③ What I learned in China



5

ESD and EE in China

6

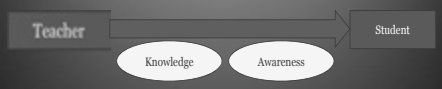
About ESD in China

- Three factors of ESD: Environment
  Economy
  Society
- China: Focus on Environment(EE)
  Based on experimental education

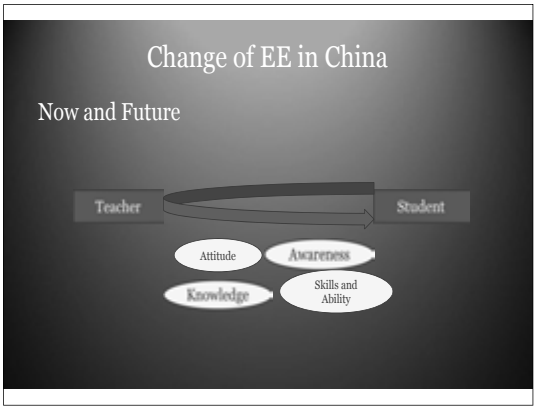
7

Change of EE in China

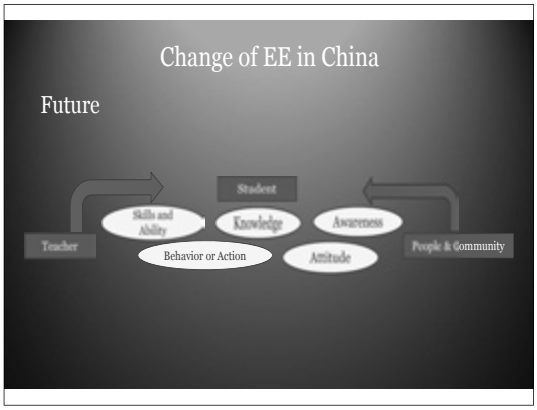
Past and Now



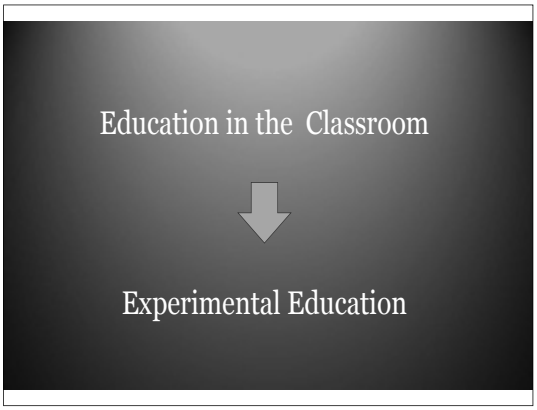
8



9

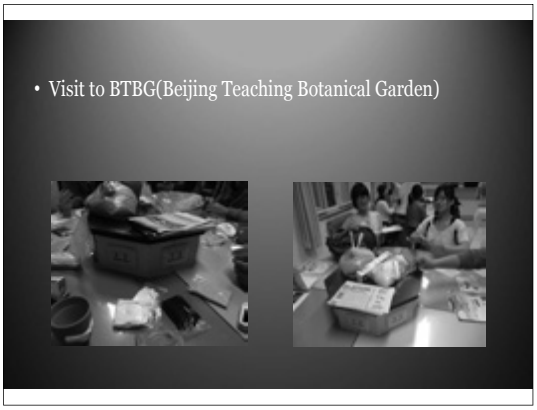


10

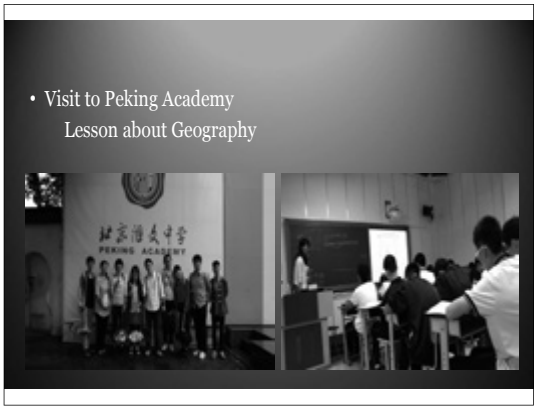


11

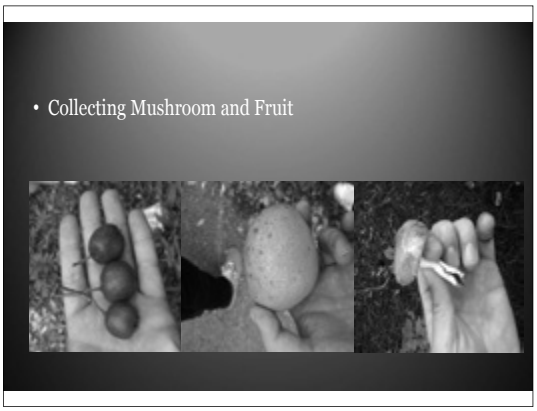
12



13



14



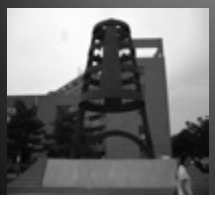
15

16

- Visit to High School Affiliated to BIT
  Education about Chang River
  Lesson about trees

17

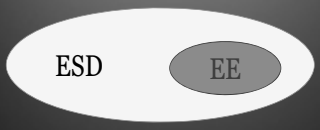
What I learned in BNU



18

Importance of ESD and EE

ESD: Necessary for human to live together
EE: Necessary for human to live together in harmony with the earth



19

What is important for EE

- Interest : Interest
- Knowledge
- Awar
- Th

How to make students more sensitive to environment and environmental problems

20

Methods of EE

Not only in classroom

Discussion, Activity, Research...

Experience a lot of things by students themselves

21

However...

Experience cause lacking in knowledge

Keep balance between education for knowledge and experimental education

22

Moreover...

Research. P

Some activities help students to gain in knowledge for ESD and EE

ESD

23

In Conclusion

Effective way of ESD and EE

- Experience by student themselves
  Research, discussion...

Learn actively and independently

24

25

（4）Campus Asia 2014 in CU - Culture and Education in Thailand-

Campus Asia 2014 in CU
～Culture and Education in Thailand～

Hokkaido University
Ibuki Wakasawa, Yu Furukawa

1

Colors –National Flag

- Red NATION
- White RELIGION
- Blue MONARCHY

2

Colors –weekday1

- Colors are decided in each day
- People know their own color

Day	Color of the day
Sunday	red
Monday	yellow
Tuesday	pink
Wednesday	green
Thursday	orange
Friday	blue
Saturday	purple

3

Colors –weekday2

4

Temple –Wat Pho

- Oldest temple in Thailand
- Huge statue of the Riclining Buddha
- The center for Thai traditional massage

5

Thai Education System

6

The Faculty of Education

The faculty of education is five year university.
The last year, the fifth year students have to do the teaching practice.

7

The Uniform

8

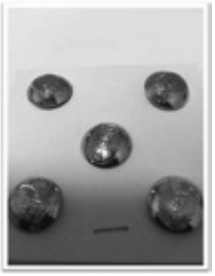
The Male Uniform

9

The Female Uniform

10

Buttons and School Emblem



11

What We Learned in ESD Program

12

Our Opinions about ESD Campus Asia

study and have knowledge of ESD and SD in each university

⬇

have the presentation in ESD campus Asia

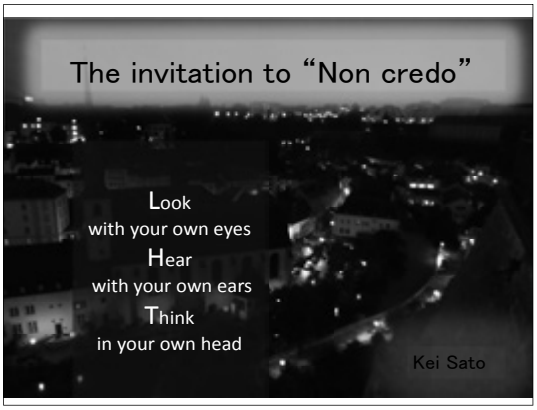
⬇

have the more practical actions

13

Kei Sato
佐藤　慧

(5) The invitation to “Non credo”



1

2

3

4

5

6

7

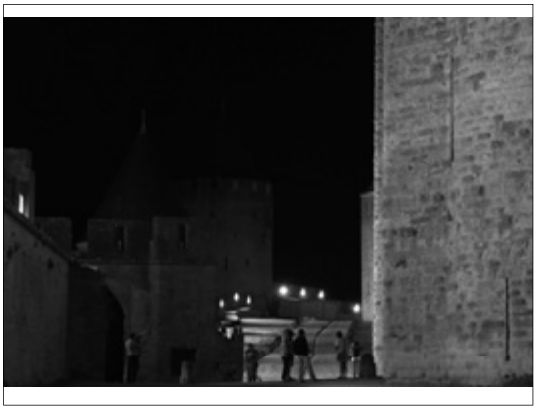
8

9

10

11

12



13

14

15

HOKKAIDO UNIVERSITY
FOUNDED 1876

HOKKAIDO UNIVERSITY
FOUNDED 1876

HOKKAIDO UNIVERSITY
FOUNDED 1876

Strategic ESD in the Next Generation

ESD based on Society-University Collaboration

Co-host: Ministry of the Environment's Environmental Partnership Office Hokkaido, Faculty of Environmental Earth Sceince, Hokkaido University, Rakuno Gakuen University College of Agriculture, Food and Environmental Sciences
Venue: Room C (Conference Room 1)

Summary

By Miki Arisaka, Ministry of the Environment's Environmental Partnership Office Hokkaido

Held on the theme of ESD Based on Society-University Collaboration, this session focused on measures necessary for ESD promotion by society as a whole, including universities.

The session began with a presentation by Professor Yasuhiro Yamanaka from HU's Faculty of Environmental Earth Science on the Course in Practical Science for Environment (PractiSE). With emphasis on practice and discussion, the course is intended to foster the development of young people capable of leading a sustainable society. A wide range of parties from outside the university contribute to the course.

Professor Yamanaka gave examples of master's thesis work, such as Hokkaido environmental report publication in collaboration with a non-profit organization and initiatives toward the resolution of local issues on Teuri Island and elsewhere. He also highlighted how students can come to understand social backgrounds and values through involvement in community affairs and trial and error. In his summary, Professor Yamanaka said that striking a balance between the resolution of local issues and the development of human resources is essential in the creation of a sustainable society.

Professor Masami Kaneko of the Department of Environmental and Symbiotic Sciences at Rakuno Gakuen University's College of Agriculture, Food and Environment Sciences then spoke on an ongoing initiative toward the development of a Regional Centre of Expertise (RCE) on ESD in central Hokkaido. The project is intended to support the development of an RCE in that area to encourage universities and other educational institutions, local businesses, NGOs and local governments to collaborate in the promotion of ESD. Professor Kaneko outlined past movements toward the establishment of the RCE and future developments, with focus on the identification of central Hokkaido's characteristics and challenges, perspectives to be adopted in their resolution and in the development of necessary human resources, related visions and other considerations.

The presentations were followed by a panel discussion on Prerequisites for the Development of a Regional Centre of Expertise (RCE) on ESD in Hokkaido featuring the speakers and two panelists. These were Masahiro Koizumi, Executive of the Specified Nonprofit Corporation Sapporo Freedom School YU, and Chikayuki Shimizu, Vice-President of the Ebetsu District within the Sapporo Branch of the Hokkaido National Conference of the Association of Small Business Entrepreneurs . The discussion, which was moderated by Miki Arisaka from Environmental Partnership Office Hokkaido, covered the need for enhanced partnerships between universities and businesses, Ainu issues and cooperation with other country's RCEs facing problems relating to indigenous people.

The discussion also highlighted the need to make university education available in the community and change the method of its provision. The session ended with a summary by Prof. Kaneko, who expressed hopes for the development of an RCE characterized by diversity stemming from the participation of numerous stakeholders, favorable coordination of a variety of issues, and fun.

Presentation

Fostering People to Lead a Sustainable Society – HU's Course in Practical Science for Environment (PractiSE)

Yasuhiro Yamanaka
Professor,
Faculty of Environmental Earth Science
Hokkaido University

HU's Faculty of Environmental Earth Science offers the Course in Practical Science for Environment (PractiSE) to provide students with expertise in environmental science and the capacity (including knowledge, skills, experience and personal contacts) to identify problems and solve them in collaboration with various parties based on practical learning as one of HU's basic philosophies. Students on this course engage in solution-oriented practical activities in collaboration with parties outside the university. In 2012, the Faculty concluded a comprehensive partnership agreement on human resource development with e-navi Hokkaido, four environmental coordinating organizations to facilitate collaboration with local communities.

The environmental field in particular requires personnel with multi-disciplinary perspectives who can get things done. This session will highlight initiatives that have been implemented on the course to meet such needs.

Progress toward the Development of a Regional Centre of Expertise (RCE) on ESD in Hokkaido

Masami Kaneko
Professor,
Department of Environmental and Symbiotic Sciences
College of Agriculture,
Food and Environment Sciences
Rakuno Gakuen University

The international community has stressed the need for partnerships among various parties for joint work as part of action to promote ESD. The United Nations University Institute of Advanced Studies (UNU-IAS) has also stepped up its efforts to establish Regional Centres of Expertise (RCEs) on ESD. In this regard, the institute has set up six RCEs in Japan (Greater Sendai, Yokohama, Chubu, Hyogo-Kobe, Okayama and Kitakyushu) as part of work to promote ESD through collaboration among diverse stakeholders.

In Hokkaido too, various parties have continued initiatives to promote ESD but failed to take concerted action, such as collecting and disseminating information in a unified and cohesive manner or developing a shared vision. Accordingly, the establishment of a core institution has been called for to promote ESD. Given these circumstances, work has begun toward the development of a Regional Centre of Expertise on ESD in Hokkaido in consideration of the need for this type of facility. This session will feature such work.

大学と地域社会が協力するESD

共催: 環境省北海道環境パートナーシップオフィス、北海道大学地球環境科学研究院、酪農学園大学農食環境学群環境共生学類
会場: Room C（第1会議室）

サマリー

報告者：環境省北海道環境パートナーシップオフィス　有坂　美紀

「大学と地域社会が協力するESD」をテーマに、大学を含めた地域社会全体としてのESD推進のための必要策について討議した。北海道大学地球環境科学研究院の山中康裕教授より、実践環境科学コースの取り組みが紹介された。「実践すること」と「論ずること」を重視し、学外の様々な主体と連携した持続可能な社会を担う人材育成に取り組んでいるというもの。

修士論文として、非営利団体と北海道の環境報告書を制作した例や、天売島等で地域の課題解決をテーマとした事例を紹介した。山中教授は、学生が地域に飛び込み、小さな失敗と成功を繰り返すことにより多様な立場や価値観を理解することができるとし、地域の課題解決と人材育成を両立させることが持続可能な社会づくりのエッセンスであるとまとめた。

また、酪農学園大学農食環境学群の金子正美教授は、現在進められている道央圏のESD推進拠点（RCE）設立に向けた動向を報告した。道央圏にRCEを作り、大学等の教育機関と地域の企業、NGO、自治体が連携をしてESDを推進していくというもの。道央圏の特徴や課題を抽出し、その解決と人材育成に必要な視点、目指す姿などを提案し、これまでのRCE設立に向けた動きや今後の展開等について紹介した。

続いて、報告者に加え、NPO法人さっぽろ自由学校「遊」の小泉雅弘理事、（一社）北海道中小企業家同友会札幌支部江別地区の清水誓幸副会長をパネリストに加え、北海道におけるESD地域拠点に必要なことをテーマに、北海道環境パートナーシップオフィスの有坂美紀の進行で公開討論を行った。この中で、大学と企業間の連携強化の必要性や、アイヌ民族の問題に触れて、先住民族問題を抱える他国のRCEとの連携についても話された。

さらに、大学教育が地域に出ていき、大学教育のあり方自体の変革の必要性も提起された。多くのステークホルダーが参加することで多様性が生まれ、多様な課題を上手くつなぎ、楽しみを加えたRCEを目指していきたいと金子教授がまとめ、閉会した。

プレゼンテーション

持続可能な社会を担う人材育成のために～実践環境科学コースの取り組み～

山中　康裕
北海道大学
地球環境科学研究院
教授

地球環境科学研究院では、北海道大学の基本理念のひとつ「実学の重視(Practical Learning)」のもと、環境科学に関する専門性を身につけ、問題の発見から様々な人々と連携して解決する能力（知識+技量+経験+人脈）をもつ人材の育成をめざし、実践環境科学コースを設置している。このコースでは、学外の様々な主体と連携した課題解決型の実践活動を行っている。2012年には、地域社会との連携を深めるために環境中間支援会議・北海道と人材育成に関する包括連携協定を締結している。特に環境分野においては、分野横断的な視点を持ち、実行できる人材が求められており、このニーズに対応するために実践してきた本コースの取り組みをご紹介する。

北海道におけるESD推進拠点・ESD-RCE設立に向けた動き

金子　正美
酪農学園大学
農食環境学群環境共生学類
教授

国際社会では、多様な主体が力を合わせて行動を起こすためのパートナーシップの必要性が強調されている。国連大学高等研究所でも、ESDに関する地域拠点（RCE）の構築に力を入れてきた。日本国内では、仙台広域圏、横浜、中部、兵庫ー神戸、岡山、北九州の6か所にRCEが設立されており、多様な主体の協働によるESD推進に力を入れている。北海道においても、各主体によってESDの取り組みが続けられてきものの、まとまりのある情報収集や発信、共通ビジョンなどを掲げた取り組みは行われておらず、ESDの推進のための中核拠点の設立が求められている。そこで、北海道においてもRCE-ESDが必要であると考え、設立に向けて動き始めた。その動きについてご紹介する。

Yasuhiro Yamanaka
山中　康裕

5th International ESD Symposium: Strategic ESD in the Next Generation

Fostering People to Lead a Sustainable Society – HU's Course in Practical Science for Environment (PractiSE)
持続可能な社会を担う人材育成のために～実践環境科学コースの取り組み～

持続可能な社会を担う人材育成のために
～実践環境科学コースの取り組み～

私は、戦後、日本の高度成長を支えた20世紀型大学の役割しか知らないけど…

活版印刷による中世大学の死。アカデミーの機能。
米国型：教養の大学(学部)　＋　研究の大学院
リベラルアーツ vs. エクセレンス (COEのE)
インターネット(MOOC)による20世紀型大学の死(がある中)

"知の伝授"という専売特許が崩れ、学位(国家資格)という価値が低下

持続可能な社会に対する21世紀型大学の役割：
個性を尊重したテイラーメイド、情報・人的交流の場(特に学生という非日常性)の提供

社会とともに
大学のパラダイムシフトが
訪れている危機感

山中康裕
北海道大学大学院地球環境科学研究院
galapen@ees.hokudai.ac.jp
北海道環境教育等推進協議会 会長

Y. Yamanaka

1

2007年6月7日G8サミット

「2050年CO2排出半減を検討」を伝える朝日新聞の記事

安倍首相は「美しい星50」
を2007年5月24日提案した

Y. Yamanaka

2

みなさん2050年を想像してください！

- 私は86歳、人生を終える頃。20代前半のみなさんは、定年を迎える頃
- 温暖化を止めるために、CO_2排出量は世界半減、日本8割減が不可欠！
- 人口は日本2割減、北海道4割減、地方6割減。

※そこに待っている暮らしが幸せであって欲しいと思いませんか？

- 自然から農耕地・都市へと土地を改変した社会資本の流れを変えれば、北海道の1/2を広大な自然保護区にすることも出来るかもしれません。都市・町・村・自然それぞれの地域がそれぞれの役割を持った持続可能な社会が創造できる絶好チャンスなのです。
- 地球温暖化や少子高齢化社会が徐々に進行…
  対抗策：社会を支える人が全世代で徐々に活躍…

誰が担う？行政・企業→みなさん
今から大学から
社会(行政・企業・NPO)
に出て行く人

- 2050年に向けて、みんなで自分たちの将来を想像して、未来を創造しよう。

"2050年委員会"の起源

みなさん2050年を創造してください！

Y. Yamanaka

3

人がいる20%(北海道52%)が2050年人がいなくなる

人を増やそう！と短絡的には考えるが…
残したい地域・機能に対して、計画的に公共投資する…「減少を選択のチャンスと捉える」

2050年の人口減少
国交省国土計画局作成　2011年2月23日

神山町を紹介する新聞記事

大南信也(イン神山)
：創造的過疎

国交省国土計画局作成　2011年2月23日

4

人口減少地図：2040年若年女性の人口増減

日本経済新聞より：使用している数値データは日本創成会議、国立社会保障・人口問題研究所、総務省の資料に基づく

北海道の人口減少地図
(日本経済新聞ホームページより)

男女比が極端に違わないはずだから、男性人口と見なしても良いはず
(女性っていうのか少々疑問)

Y. Yamanaka

5

北海道大学大学院環境科学院
実践環境科学(Practical Science for Environment)コース
2011年4月設立

PractiSE

コースの理念：**社会に何かを生み出す人材を育てる**

実学の重視(Practical Learning)→北海道大学の4つの基本理念

Think Globally, Act Locally, and Step-by-Step!!

Y. Yamanaka

6

2010年12月30日
実践環境科学コース設立を紹介する記事

Y. Yamanaka

7

PractiSE:「実践すること と 論ずること」を学ぶ

合格発表の日(今年9月2日)、Facebookに書いた文章：

不合格になってしまった方、ごめんなさい。みなさんの現時点での基礎学力では、2年間で修了させることが難しいと判断いたしました。

実践環境科学コースでは、2年間に、学外の方々に御願いすることが数多くあります。その方々にとって「学生さんは何故会いに来たのか？私たちは何をすれば良いのか？」が分からなければ、「学生さんのために何かをしてあげようという温かい気持ちを持っていた」としても力を貸すことが出来ません。学生さんとしては、相手に分かるように「自分たちの思い、御願いしたいこと、協力したことがどのような修士論文研究につながるのか」などを言葉にして(文章にして)説明していかねばなりません。自分の考えをまとめ伝える論理性が問われます。また、そのなかで、「相手の気持ちを察する」(想像する)力が育まれていきます。

修士課程の2年間は、就職活動も含まれ、大変短い期間です。もちろん、20歳代という大人としての旅立つ重要な時期に、2年間あれば、修士論文研究という形あるものを生み出せるとされてきたわけです。私たちは、それを踏まえ、入学時点で必要なレベルを見るために、入学試験として、A4サイズの紙1ページ分解答する小論文2問を課しています。1問は事前出題しています。小論文では、解答する分野の知識、および、論理的記述を見ています。(以下省略)

Y. Yamanaka

8

9

10

福岳渉：修士論文発表

環境非営利団体による「北海道の環境報告書」の出版に関する考察、およびその環境教育の可能性

～「もうひとつの北海道環境白書」の制作を事例として～

もくじ

- 背景・制作過程(7枚)
- 制作物の完成(2枚)
- 考察(8枚)
- まとめ(1枚)

実践環境科学コース
福岳　渉

11

福岳渉：修士論文発表

出来上がった「本」はどう評価する

批判的な4つの視点から「本」を評価する。

- Q1. 制作者は、「本」の制作を通して何を得たのか？
- Q2. 「本」は既存の環境白書と比べ、どのような特徴を持つか？
- Q3. 環境政策に携わり、"白書"を制作する行政担当者はどのように評価するのか？
- Q4. 対象とする大学生に、どのように受けとめられるか、制作者の意図は届いたか？

社会科学の分野でよく用いられる"質的データ分析(QDA)"を行う

12

福岳渉：修士論文発表

産官学連携協定

環境中間支援会議・北海道

- EPO北海道（環境省）
- 北海道環境財団（北海道）
- 札幌市環境プラザ（札幌市）
- きたネット（民間）

環境変化の20年を人の視点を通して振り返りたい。
自分たちの活動を報告する、独自の媒体を作りたい。

環境科学院と中間支援会議
北海道との連携を伝える新聞記事

北海道大学大学院 環境科学院

環境非営利団体の機能を強化し、共に良い環境を創っていきたい。
- NPOの評価機能
- 若手人材交流機能
- 大学への講師の派遣

高い知識や見識を持つ環境中間支援会議・北海道の後押しをしたい。

北海道の環境保全に貢献してきた"先駆者の視点"から北海道の環境変化20年を伝え、20年を生きてきた若者に、これからより良い環境を創るための知恵を授ける、本をつくりたい！

13

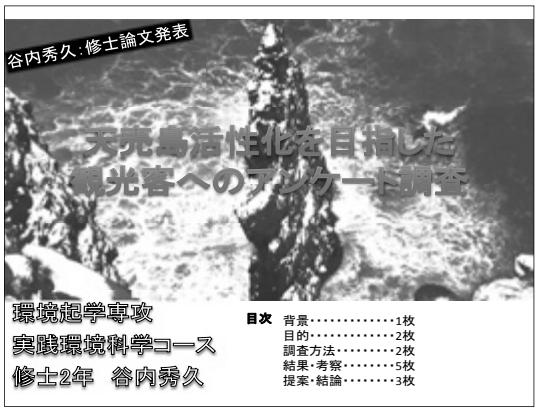
福岳渉：修士論文発表

まとめと結論

- 「本」の制作過程
  地球サミットから20年を機に、環境中間支援会議・北海道と環境科学院が連携し、制作スタッフの使命感により、「もうひとつの北海道環境白書」が完成した。"先駆者の視点"から北海道の環境変化20年を若者に伝える内容となっている。
- 出来上がった「本」を改めて4つの視点から評価した。
  - ✓A1.出版することで、スタッフは、現場にも応用できる知識を得た。出版を継続するには、各団体の体力差を補う必要がある。
  - ✓A2.出来上がった「本」は行政の環境白書とは本質的に異なる。
  - ✓A3.しかし、行政も見習うべき興味深い内容という高い評価を得た。
  - ✓A4.環境に興味のない若者にも、環境分野の入門書となりうる。

労力を伴いつつ、思いを込めた「本」の制作には学びがある。その成果物は"環境に興味がない人"にも学びをもたらす良い入門書となった。

14



15

まとめ　13/13
谷内秀久：修士論文発表

本研究では、天売島に訪れる観光客に対するアンケート調査を約30日間実施した。その結果、観光客の詳細な人物像を得た。さらに、アンケート結果やそれに基づく提案は、島民へフィードバックされ、高い評価を得た。すなわち、「島民が行う観光振興への貢献」という本研究の目的が達成された。

バイトの若者に何が分かるんだ！→
仕事が終わった午後9時-11時「いのちの電話」→
地道なアンケート→島の人が知らないことが分かる→それを伝える

最後に…
昨年から、私は島のことについて、幾度もコメントしてきました。30日間の住み込みバイトをしながら、島の人と生活を共にし信頼関係を築き、そして、アンケート結果を得たことで、12月には、単なる「一人のよそもの＆若者の意見」ではなく、私の提案が島の人に届くようになりました。
そして、3月には、修士論文を武器として携えて、島を訪れようと思います。

16

武田尚太：修士論文発表

2014年02月04日（火）

石狩浜における海岸保全に向けた交流・情報共有の場の創造

武田尚太
実践環境科学コース 修士2年

＜目次＞

- 背景　3枚
- 研究目的・内容　2枚
- STEP 1　3枚
- STEP 2　3枚
- STEP 3　2枚
- まとめ　1枚

17

武田尚太：修士論文発表

STEP2・石狩浜フォーラム

【目的】

参加者に、石狩海岸の魅力の大切さを実感してもらい、次世代に残し引き継いでいく石狩海岸の理想の姿にけた取り組みについて考えてもらう

【参加者】

29名（石狩市13名、札幌市15名、小樽市1名）

【第1部：講演会】

①「石狩海岸の紹介」
　北海道大学大学院農学研究院講師　松島 肇

②「3つの活動団体による石狩海岸における取り組み事例の紹介」
　いしかり海辺ファンクラブ
　石狩ウォーターパトロール
　NPO法人北海道海浜美化をすすめる会

【第2部：ワールド・カフェ（ワークショップ）】

第1ラウンド　問い：石狩海岸の魅力を一言で伝えるとすれば
第2ラウンド　問い：次の世代にどのような石狩海岸を贈りたいですか
第3ラウンド　問い：私たちはこれから新たにどのような取り組みをしていければいいでしょうか

18

まとめ

武田尚太：修士論文発表

研究は、勉強会やフォーラムという形で、石狩浜の関係者に対する「情報共有・交流の場」を創造する長い道のりの第一歩となった。

すなわち、(1)新しい人との出会う機会、(2)次に向けた行動を起こす1つのきっかけを提供することが出来た。しかし、「情報共有・交流の場」の具体的な必要性は共有化されていない。「海岸保全を進めていく際の海岸管理者に関する認識」の違いが、具体的な「情報共有・交流の場」の必要性の違いにつながっている。例えば、市民団体は海岸管理者として参加を望み、行政は市民団体主体で場を作って欲しいと考えている。

10年かかって行政の協議会が出来たよ…学生1年間で何が出来るの？
or 今さら石狩浜の魅力なの？当たり前じゃないの…→第2回今年11月8日

長い道のりの次の一歩は？

第一歩として、「石狩海岸の魅力」を中心にして意識共有を図った。石狩浜の関係者は、それぞれが持っている「石狩海岸の魅力」や「活動への想い」が、勉強会やフォーラムの参加者ごとに異なることを知った。また上で述べたように「情報共有・交流の場」の具体的な必要性は異なっている。

従って、いきなり「市民と行政が出会う場を創造する」ということではなく、一歩一歩、今回の共有出来なかった具体的な必要性などを、関係者間で徐々に共有していく必要がある。継続することが最も重要である。

宿題：私は卒業しますが、参加した関係者の方々によって運営していって欲しいと想っています。3月末までにはまだ時間がありますので修論の結果をその方々へフィードバックさせたいと想っていま

19

古川雄大：修士論文発表

平成25年度修士論文発表

雲海テラスに訪れる5万人のお客さまに自然を伝えたツール開発：雲海カード

＜目次＞

はじめに(3枚)
目的(1枚)
作成の枠組み(4枚)
内容と評価(7枚)
まとめ(1枚)　計16枚

実践環境科学コース
古川 雄大

20

雲海カードを作る　人々の様子　7/16

古川雄大：修士論文発表

21

まとめ　16/16

古川雄大：修士論文発表

雲海カードは、お客さまやスタッフからの意見や評価を参考にして数多くの改良を行い、28種40ページ作成された。

その結果、

1. 雲海テラスを訪れる約半数の5万人の人に見てもらえるものとなり(アンケート回答数2251組より)、スタッフからも雲海テラスに不可欠なものと判断されるようになった。
2. 聞き取り調査より、雲海カードを読んだお客さまは、今まで「漠然と見ていた雲海」を、どのタイプの雲海が見えているか、その見られる可能性も含めて、実感するようになった。また、「雲海テラスを訪れた全員が見られるわけではない貴重な瞬間を見られた」や「見られなかったけど仕方がない。雲海を見にまた来よう。」といったことを自ら判断するようになった。
3. 雲海カードについても、「雲海テラスに必要なもの」、「わかりやすく、面白い」という多数の意見を得た。

といったもの

作りっぱなしではない。自分が作ったものが5万人に読まれている実感

以上より、数多くのお客さまに「雲海テラスで自然を感じてもらう」雲海カードを作成する当初の目的が達成されたと考える。

22

尹春英：修士論文発表

星野リゾート・トマムを訪れる人々への自然という観光資源に関する意識調査

実践環境科学コース
山中康裕研究室　修士課程2年
尹春英

目次：

(1)国際化　. . . 11枚
　i 背景　. . . 4枚
　ii 目的と進め方　. . . 1枚
　iii 試み　. . . 1枚
　iv 結果と考察　. . . 5枚
(2)雲海テラスでの動向調査(ハイライトのみ)　. . . 2枚
(3)まとめ　. . . 1枚

23

尹春英：修士論文発表　14/14

本研究では、星野リゾート・トマム長期滞在を通じて、展示翻訳(英語・中国語(繁体字・簡体字))・オリジナル展示作成、および、外国人観光客の意識調査(聞き取り・アンケート)を繰り返しながら、北大環境科学院の「自然を伝える活動」等に関する国際化を試行しました。

試行内容：外国人観光客に聞き取り調査、および、
(1)基本案内の必要に応じた翻訳[STEP1]：例：チケット販売機ではなくゴンドラの標路等(∵団体行動による)
(2)海外の関心に沿った説明の仕方[STEP 2]：例：雲海や雪の説明ではなく、北海道の日の出時刻、気候なども…
(3)外国人観光客の興味に基づいた対応[STEP 3]：例：台湾人観光客にとっての『水の教会』

そこから、国際化として
(1) 外国人観光客への詳しい聞き取り調査、および、それにもとづく
(2) 外国人観光客に対する(翻訳だけではない)展示や対応
を行うことが重要だと分かりました。
本研究の試みは、他の観光地にも展開できると思います(早急な対応を迫られると、外国人観光客の要望とはズレるかも知れません)。

儲け関係なく、お客さまに地道に聞いていく→(翻訳だけではない)当たり前の国際化

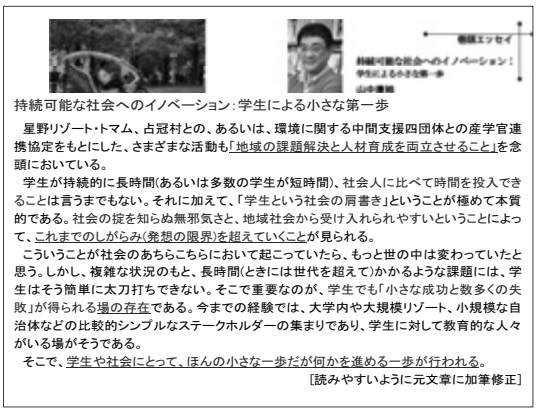
また、大規模アンケート(回答数：日本人2683組、外国人197組)から、観光客の雲海テラスの動向を初めて定量的に知ることが出来ました。

今後の課題：展示物等の翻訳を行ったが、「水の教会」のミニツアーなどを実施したり、さらに、他の施設(ミナミナビーチなど)への展開が考えられます。また、本研究は星野リゾート・トマムだけの試みなので、他の観光地等での国際化についての調査比較検討を行う必要があると思います。

24

25

26



持続可能な社会へのイノベーション：学生による小さな第一歩

星野リゾート・トマム、占冠村との、あるいは、環境に関する中間支援四団体との産学官連携協定をもとにした、さまざまな活動も「地域の課題解決と人材育成を両立させること」を念頭においている。

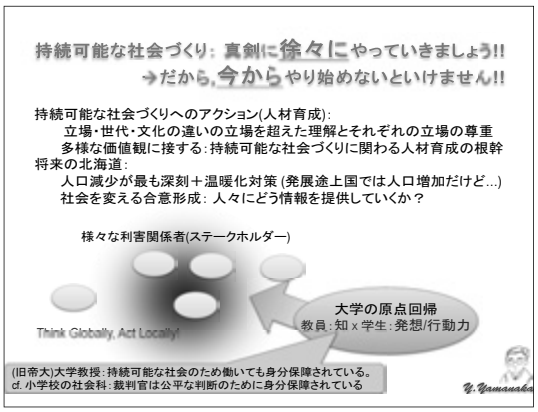
学生が持続的に長時間(あるいは多数の学生が短時間)、社会人に比べて時間を投入できることは言うまでもない。それに加えて、「学生という社会の肩書き」ということが極めて本質的である。社会の掟を知らぬ無邪気さと、地域社会から受け入れられやすいということによって、これまでのしがらみ(発想の限界)を超えていくことが見られる。

こういうことが社会のあちらこちらにおいて起こっていたら、もっと世の中は変わっていたと思う。しかし、複雑な状況のもと、長時間(ときには世代を超えて)かかるような課題には、学生はそう簡単に太刀打ちできない。そこで重要なのが、学生でも「小さな成功と数多くの失敗」が得られる場の存在である。今までの経験では、大学内や大規模リゾート、小規模な自治体などの比較的シンプルなステークホルダーの集まりであり、学生に対して教育的な人々がいる場がそうである。

そこで、学生や社会にとって、ほんの小さな一歩だが何かを進める一歩が行われる。

[読みやすいように元文章に加筆修正]

27



28

Progress toward the Development of a Regional Centre of Expertise (RCE) on ESD in Hokkaido
北海道における ESD 推進拠点・ESD-RCE 設立に向けた動き

北海道における**ESD**推進拠点・**ESD-RCE**設立に向けた動き

酪農学園大学　環境共生学類
金子正美
KANEKO@RAKUNO.AC.JP

1

本日のトピック

ESDとは？
RCEとは？
RCE北海道道央圏の設立に向けての提案

2

ESDとは？ ：EDUCATION FOR SUSTAINABLE DEVELOPMENT
持続可能な開発のための教育

ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育

環境、平和や人権等のESDの対象となる様々な課題への取組をベースにしつつ、環境、経済、社会、文化の各側面から学際的かつ総合的に取り組む

文部科学省　日本ユネスコ国内委員会　HPより

3

ESDの目標

○全ての人が質の高い教育の恩恵を享受すること

○持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること

○環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと

文部科学省　日本ユネスコ国内委員会　HPより

4

育みたい力

○持続可能な開発に関する価値観（人間の尊重、多様性の尊重、
非排他性、機会均等、環境の尊重等）

○体系的な思考力（問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方）

○代替案の思考力（批判力）

○データや情報の分析能力

○コミュニケーション能力

○リーダーシップの向上

文部科学省　日本ユネスコ国内委員会　HPより

5

学び方・教え方

○「関心の喚起 → 理解の深化 → 参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置付けること

○単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチをとること

○活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すこと

文部科学省　日本ユネスコ国内委員会　HPより

6

我が国が優先的に取り組むべき課題

先進国が取り組むべき環境保全を中心とした課題を入り口として、環境、経済、社会の統合的な発展について取り組みつつ、開発途上国を含む世界規模の持続可能な開発につながる諸課題を視野に入れた取組を進めていく。

（「我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画」より）

文部科学省　日本ユネスコ国内委員会　HPより

7

ESDに関するグローバル・アクション・プログラム

5つの優先行動分野
政策的支援
教育・トレーニングの場に持続可能性の概念を取り入れる（機関包括型アプローチ）
教員やトレーナーの能力向上
ユースの役割支援と動員
地域コミュニティや地方政府にコミュニティ・レベルのESDプログラム策定を推奨

文部科学省　日本ユネスコ国内委員会　HPより

8

ESDの10年）の目的

第57回国連総会で「ESDの10年」の国際的な推進機関として指名されたユネスコ（国連教育科学文化機関）は、2004年の第59回国連総会の場 で「ESDの10年国際実施計画案」を発表しました。この計画案にはESDの10年の目的として、以下の5つが明記されています。

持続可能な開発の実現を人類が協力して追い求める中で、教育・学習が中心的な役割を果たすということについて、幅広い理解を得ること

ESD に関係する様々な機関・団体・人々の間でネットワークや交流を推進すること

あらゆる学習や啓発活動を通じて、持続可能な開発のあり方を考え、その実現を推進するための場や機会を提供すること

ESDにおける指導と学習の質を向上すること

ESDにおける能力を強化するため、各段階で戦略を策定すること

認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）HPより

9

ESD-RCEとは？

・ESD - RCE：
Regional Center of Expertise on Education for Sustainable Development

・「国連 ESDの10年」を推進するための先進的な取組事例として、その活動内容を世界に発信し、ESDを広めていくための地域の拠点。

・推進機関は国連大学サステナビリティ高等研究所（UNU-IAS）

10

世界のESD-RCE　129の拠点

11

RCEの目的

・地域において、ESDに関わりのある組織、団体等のネットワークをつくり、関係者が連携・協力しESDをより効果的に実践していこうとするもの

・RCEの取組は国連大学の認定方式によるESD推進の仕組み。地域レベルに発言権を与え、地域の優れた実践を促そうとするもの

12

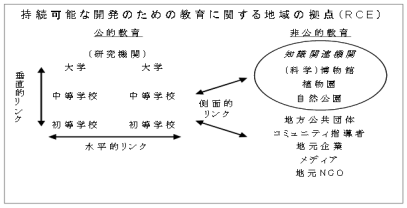
RCEの仕組み

＜RCEを支える機関・組織＞

地方自治体、高等教育機関、NGO、民間部門、市民団体など既存の関係者や専門家

＜プラットフォーム＞

ESDのために複数のセクターをまたがって学際的な情報共有、対話、協力、実践を行うためのプラットフォーム



13

RCE認定のためには？

RCE認定に必要な4つの要件

1. ガバナンス:
しっかりとした事務局体制が整えられるか

2. コラボレーション:
あらゆるレベルの公的・非公的教育の関係者が参加しているか

3. 研究開発:
研究開発の役割及びRCE活動における活用と、RCE間協力を含む様々な協働活動の戦略設計に貢献するための取組がなされるか

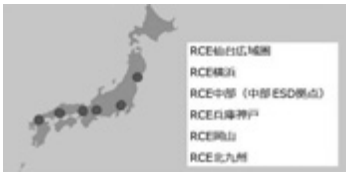
4. 変化をもたらす教育:
持続可能な生活と暮らしに関する地域の抱負を達成するための現在の教育・研修システムの変革への貢献できるか

14

日本国内のESD-RCE

・2013年9月1日現在、日本国内のRCE-ESDは、仙台広域圏、横浜、中部、神戸、岡山、北九州の6地域
※EPOの管轄でいうと、北海道と四国にはない

・事務局を担っているのは、 横浜及び岡山は行政機関、その他は大学が中心



15

事例　中部ESD拠点

＜活動内容＞

1. プロジェクトの推進
例）CBD-COP10後の生物多様性に関する国際的な対話事業

2. 教育システムの構築
初等・中等・高等教育でのESDの実践に加え、なごや環境大学の幅広い市民講座を活用したファシリテーターの育成などを実施

3.「ツールボックス」の開発
国内外の関係者がESD促進のための情報や技術、システムを構築し、ストックし、その開発・発展を目指す

16

事例　中部ESD拠点

代表	阪古 厚夫（中部大学 理事長・総長）
共同代表	濵口 道成（名古屋大学 総長）
委員長	竹内 恒夫（名古屋大学 教授）
副委員長	千頭 聡（なごや環境大学 常任理事）
委員	今村 光章（岐阜大学 准教授）
	新海 洋子（中部環境パートナーシップオフィス（EPO中部）チーフプロデューサー）
	宗宮 弘明（中部大学 教授）
	高山 進（三重大学 教授）
	羽後 静子（中部ESD拠点推進会議 代表）〈企画担当〉
	加所 良美（名古屋市立大学 教授）
	宮川 秀俊（中部大学 教授）
	浅田 益章（アドバイザー） スマート環境社会研究所
	九里 徳泰（アドバイザー） 冒険家、富山県立大学教授
	黒岩 恵（企業担当）
	西宮 洋（アドバイザー） テクノ中部
	松井 恒雄（アドバイザー） 中部大学　特任教授
	武者小路 公秀（国際協働担当）
	武藤 一郎（アドバイザー） アフリカ協会特別研究員

事務局	古澤 礼太（中部大学 准教授）
	影浦 順子（中部大学 研究員）
	松野 正太郎（名古屋大学 特任講師）
	馬場 恭子（中部環境パートナーシップオフィス（EPO中部）コーディネーター）
事務局顧問	藤井 昭彦（中部大学 学務部）

17

事例　仙台広域圏ESD

＜活動方針＞

1. 各地域の活動を相互につなぐ
   構成地域：仙台市、気仙沼市、大崎・田尻地域、白石・七ヶ宿地域
   宮城教育大学（分野：持続発展教育の教員養成）
   東北大学（分野：エネルギー、環境教育）
2. 学びあいセミナー
   例）未来づくりESDセミナー（ほぼ月一ペースで開催）
3. 共通テーマ
   1）里山・里地・里海の生態系サービスを守る
   2）持続可能な農業・食糧を創ろう
   3）持続発展教育の学校のネットワークづくり

18

事例　仙台広域圏ESD

地域の機関	機　関	所　属	氏　名
仙台広域圏全体	宮城教育大学	RCE推進委員会（環境教育センター長） RCE推進委員会（学長特別補佐） RCE推進委員会副委員長	村松　　隆 岡上　　一幸 小金澤　孝昭
	宮城県	環境生活部環境政策課課長	高橋　　総一郎
	仙台市	環境局環境部長	小林　　隆一
	環境省	東北地方環境事務所所長	吉井　　雅彦
	国連大学	高等研究所・上席研究員	名執　　芳博
	東北グローバルセミナー ＋NPO	みやぎ環境カウンセラー協会 サイクネイチャークラブ（子供エコクラブ） 仙台いぐね研究会 みやぎ環境とくらしネットワークMELON 早寝・早起き・朝ごはん実行委員会in宮城	溝口　　忠昭 小野　　正之 （結城登美雄） 斉藤　　昭子 塚越　　美和子
	河北新報社	編集局長	西川　　善久
	JICA	東北支部長	甲斐　　真樹
	東北EPO		谷田貝　泰子
仙台市	FEEL仙台 （杜の都の市民環境教育・学習推進会議）	FEEL仙台・副委員長 FEEL仙台・副委員長 事務局（環境都市推進課長）	海藤　　郁生 高橋　　万里子 小林　　弘美
気仙沼市	気仙沼RCE推進委員会	推進委員会委員長（） 副委員長（スローフード気仙沼） 推進委員会事務局（教育委員会）	阿部　　弘康 菅原　　昭彦 及川　　幸彦
大崎市・田尻	田尻地域RCE推進委員会（予定）	大崎市田尻総合支所産業振興課 NPO法人・田んぼ理事長 日本雁を保護する会	関川　　一幸 岩渕　　成紀 呉地　　正行
事務局	宮城教育大学	連携主幹 連携主幹付研究協力	芳賀　　茂 目々澤　紀子

19

今後のRCEは…？

・国連大学としては、現在のRCEの数を倍増させたいと考えている。300か所程度。

・これまでも、今後も、RCEの維持などに関わる行政からの予算的支援はない。

・今年11月4日～7日、「グローバルRCE会議」が岡山市で開催される

金沢大学の鈴木克徳教授（元国連大学高等研究所　国連大学シニアフェロー）にヒアリング（EPO北海道　有坂さん）

20

他のRCEの予算は？

RCE横浜の場合（事務局：横浜市）
　予算の出所：横浜市　　予算額：10万円程度
　使途：国内RCE会議に参加するための旅費

REC中部の場合（事務局：中部大学）
　予算の出所：中部大学　　予算額：200万円（＋中部大職員の人件費一部）
　使途：物品、旅費、会場費、レンタル料、印刷代など
　※この他、プロジェクト経費は助成金等の外部資金を獲得。直近の3年間で約1000万円。

REC北九州の場合（事務局：会議体形式）
　予算の出所：北九州市　　予算額：1400万円

21

RCE認定の申請書づくりのために

・連携相手と体制について合意がとれているか
・RCEを担うにふさわしい実績はあるか
・グローバルRCE会議に出席したことはあるか
・申請書（英文100ページ程度）を作成できる労力（UNUとの英文でのやり取り？）は確保されているか

22

RCE北海道道央圏の設立に向けて

○設立に向けたこれまでの流れ

第7回アジア太平洋RCE会議　7th RCE Asia Pacific Meeting and International への出席（出席者：金子）
　2014年8月26~ 28日、マレーシアペナン島

・第1回　北海道のおけるESD-RCE設立のための意見交換会
　2014年9月1日、北海道環境サポートセンター
・第2回　北海道のおけるESD-RCE設立のための意見交換会
　2014年10月7日　北海道環境サポートセンター

23

RCE北海道道央圏の設立に向けて

○北海道道央圏の範囲
　石狩、後志、空知、日高、胆振振興局管内

将来
・道南圏（渡島、檜山）
・道北圏（上川、留萌、宗谷）
・オホーツク圏（網走、知床半島）
・十勝圏（十勝）
・釧路・根室圏（釧路、根室）

24

北海道道央圏の特徴

○ 環境

・雄大な北方的景観と豊かな動植物が生息・生育する良好な自然環境

・急速な開発による生物多様性の低下

○社会文化

・アイヌ民族の歴史と文化

・明治以降の急速な開発による地域社会の変容。

○人口

・北海道人口約550万人、低い人口密度

・道央圏には、北海道の全人口のうち6割にあたる約340万人、札幌に190万人と一極集中

・高齢化および過疎化が深刻な問題

25

北海道道央圏の特徴

○ 経済

・北海道経済は一次産業と三次産業の割合が全国に比べて高い。
・農業に関しては、食料自給率200%、日本全体における12%の生産量
・世界有数のスキーリゾートでもあり、自然を活かした観光、エコツーリズムが盛ん

○教育：

・都市部のすぐ近くに自然などを体感できるフィールド
・場所の利点を活かして、森のようちえんなどの子どもに対する環境学習の場が多く展開
・先住民であるアイヌに関する教育は必要不可欠

26

RCE北海道道央圏の課題

1. 生物多様性の低下
2. 気候変動
3. 再生可能エネルギー
4. 人口減少・少子高齢化・グローバル化
5. 食と暮らしの安心安全
6. 先住民族

27

課題解決と人材育成・教育の視点

○課題を解決する視点

1. 国際的な視点
2. 地域的な視点
3. 環境保全、エネルギーの視点
4. 経済的視点
5. 文化的視点

○人材育成、教育の視点

1. 実践、体験
2. 小さな成功と失敗
3. 多様な価値観
4. 強みを活かす

28

RCE北海道道央圏ESDの目指す姿

○方向

北海道道央圏特有の課題を様々な視点から分析し、これに関連した事業を様々な団体が協働して実施することにより、道央圏の持続可能な地域づくりに取り組む。

○目指す姿

世界の地域とつながる国際的地域

野生生物と共生する地域

自然エネルギーを活用した地域

安心・安全な食を産み出し、安心して暮らせる地域

豊かな自然環境を活かした国際的観光地域

平和・人権・福祉が実現する地域

先住民族の人権・文化が守られる地域

29

組織

教育機関：

酪農学園大学、北海道大学大学院環境科学院、道央圏の大学、高校等

行政機関：

道央圏の国、道、市町村の行政機関、JICA

NPO、NGO機関：

環境、福祉、人権、教育等の団体

民間企業：

道央圏で活動する企業

30

今後のスケジュール

1. 道央圏RCE-ESDづくりのための事務局メンバー（たたき台づくり）、ESD-RCE設立運営委員会のメンバーを決定

2. 2014年11月に岡山で開催されるグローバルRCE会議にて、RCE北海道道央圏の設立構想を発表

3. 2015年4月までに国連大学認定のための申請書類を完成させるべく検討

31

ご清聴ありがとうございました。

32

Report of Wrap-up Session

By Akito Kawaguchi, Professor, Faculty of Education, Hokkaido University

Moderated by HU Faculty of Education Dean Toru Onai, the symposium's Wrap-up Session featured presentations summarizing discussions held at the Parallel Sessions based on those at the Plenary Session. These were delivered by Korea University Professor Seung Hyun Son for Parallel Session 1, Associate Professor Takashi Nomura of Hokkaido University of Education's Kushiro Campus ESD Promotion Center for Parallel Session 2, HU School of Education student and ESD Campus Asia Project participant Hiroki Akiyama for Parallel Session 3, and Professor Masami Kaneko of Rakuno Gakuen University's College of Agriculture, Food and Environment Sciences for Parallel Session 4. The presentations were followed by overall discussions on the significance and achievements of the symposium, including comments by the three Plenary Session lecturers, in order to establish a common understanding of the discussions held at the Parallel Sessions (based on those at the Plenary Session) and other event content transcending attendees' varying positions and viewpoints.

The symposium attendees recognized that ESD was still in a transitional state as the mainstream of education despite producing certain positive results over the past decade. While issues concerning the initiatives of UNESCO and collaboration with regions and educational institutions among other matters were discussed, it was also reaffirmed that the progress and development of ESD as a core of education will require networking in all respects regardless of level and generation. Accordingly, event participants recognized the importance of international collaboration by educational institutions (Parallel Session 1), the collaboration of elementary and secondary schools in practical ESD activities (Parallel Session 2), related collaboration with institutions of higher education (Parallel Sessions 1, 2 and 3) and collaboration with the initiative to establish a Regional Center of Expertise (RCE) in Hokkaido (Parallel Session 4). Attendees reaffirmed their commitment to the expansion and quality improvement of ESD for future generations to ensure that the outcomes of this symposium would be fruitful for the future.

Coordinator

Toru Onai
Dean, Faculty of Education,
Hokkaido University

総括セッションの報告

報告者：北海道大学大学院教育学研究院教授　河口　明人

本シンポジウムの締めくくりとしての総括セッションでは、小内透教育学研究院長による司会のもと、全体セッションを踏まえた議論について、分科会1では高麗大学校の孫丞賢（ソン・スンヒュン）教授から、分科会2は北海道教育大学釧路校ESD推進センターの野村卓准教授から、分科会3はESDキャンパスアジアプロジェクト参加学生である北大教育学部の秋山拓輝君から、分科会4からは酪農学園大学農食環境学群の金子正美教授からそれぞれの議論の概要について報告があった。全体セッションの講演者三人からのコメントを含め、プレナリー・セッションのあとを受けて行われたそれぞれの分科会の議論を踏まえ互いの立場や視点をこえて共通の認識を得るために、本シンポジウムの意義と成果についての総括的な議論が行われた。

ESDがこの10年で一定の成果を上げているものの、教育の主潮流としては依然として過渡的状態であること、ユネスコの取組と各地方、教育機関との連携に関する課題なども話題とされたが、とくに教育の核心としてのESDの進展・開発のためには、レベルや世代を問わず、あらゆる側面でのネットワークが不可欠であること、したがって教育機関の国際的連携（分科会1）はもとより、小中高校でのESDの実践的活動の互いの連携（分科会2）と高等教育機関との連携（分科会1，2，3）、さらには地方のRCE（Regional Center of Expertise）を目指す北海道の取組（分科会4）との連携などの重要性が認識された。本シンポジウムを将来に向かって実りあるものにするために、新たな次世代のESDの拡大と質的向上を目指し、互いに努力していくことが確認された。

座長

小内　透

北海道大学
教育学研究院長

Secretariat for Sustainability Weeks
Office of International Affairs
Hokkaido University
Kita 15, Nishi 8, Kita-ku, Sapporo,
060-0815 Hokkaido, JAPAN
TEL: +81-11-706-8031　FAX: +81-11-706-8036
E-mail sw1@oia.hokudai.ac.jp
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/

Faculty of Education, Hokkaido University
Kita 11jo, Nishi 7Chome, Kita-ku, Sapporo,
060-0811 Hokkaido, JAPAN
TEL: +81-11-706-3965
http://www.edu.hokudai.ac.jp/

サステナビリティ・ウィーク事務局
（北海道大学国際本部内）
〒060-0815　札幌市北区北15条西8丁目
TEL 011-706-8031　FAX 011-706-8036
E-mail sw1@oia.hokudai.ac.jp
http://sustain.oia.hokudai.ac.jp/sw/jp/

北海道大学大学院教育学研究院
〒060-0811　札幌市北区北11条西7丁目
TEL: 011-706-3965
http://www.edu.hokudai.ac.jp/

作成日：平成 29 年 3 月
作成者：北海道大学サステナビリティ・ウィーク事務局
〒060-0815 北海道札幌市北区北 15 条西 8 丁目
TEL　011-706-8031／ E メール contact@oia.hokudai.ac.jp
北海道大学国際部国際企画課
〒060-0815 北海道札幌市北区北 15 条西 8 丁目
E メール planning@oia.hokudai.ac.jp